川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成三年九月二十五日　印刷
平成三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七七三号

日川協加盟

No. 773

平成三年度　二賞発表

十月号

平成三年度 同人総会と 二賞表彰 本社十月句会

とき　10月6日（日）午後1時開場

ところ　大阪府中小企業文化会館

（☎771―4096）

。地下鉄「谷町9」⑤番出口から谷町筋南へ徒歩7分東入る

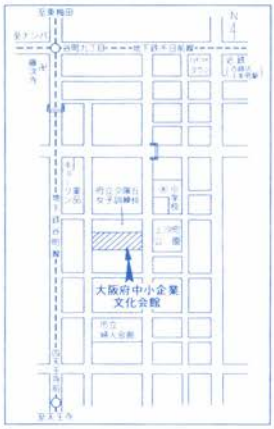
。近鉄「上本町」下車、南西へ徒歩10分

同人総会　午後2時から

［議事］①会計報告②会計監査報告③事業経過報告④その他

本社句会　午後5時半から

同人総会会場略図



川柳塔社

河村日満氏を偲ぶ川柳大会

とき　10月20日（日）午前10時開場

ところ　しいたけ会館「対翠閣」

（JR鳥取駅から徒歩7分）

TEL（0857）24―8471

お話　「河村日満氏を偲ぶ」　西尾　栞氏

兼題　（各題2句・正午締切）

「日の丸」　阿萬　萬的選

「満　足」　森中　恵美子選

「偲　ぶ」　板尾　岳人選

「温　泉」　恒松　町紅選

「　丘　」　八木　千代選

「ふるさと」　土橋　螢選

「おいしい」　小林　由多香選

会費　出席　2000円（作品集・昼食・記念品呈）

投句　1000円（作品集呈・10月10日必着）

懇親会　2000円（希望者・当日受付）

投句先　〒680　鳥取市瓦町五二七　岩原　喬水

主催　川柳塔とっとり

んは運

西尾　栞

大阪市の肥後橋にフェスティバルホールがある。そのホールがオープンした時、記念講演者の一人として将棋の名人升田幸三氏が紋付羽織袴で立った。威風堂々、眼光烱々、容貌魁偉、髭の先生は何にたとえんあの広いホールを威圧した。渡辺紳一郎氏の司会も立派だった。いまだに強く印象に残る。

升田名人のお話に魅了された私は、それから名人の「著書」を読み漁った。その中の「んは運」という一文が面白いから転載してみる。

いろは歌の最後に〝ん〟という字がついている。弘法大師が歌をつくる時、もってゆき場に困って、あそこへつけたのかどうか知らないが、私はあれは、仲々意味のあることだと考えている。というのは、あの〝ん〟はじつは、〝運〟だと自分は解している。

色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢見し酔ひもせず

というのであるが、これだけの文句のあとに〝ん〟がついている。つまりあらゆることをつくして達観したあとのものが運だと私は解釈している。よく何もするべきことをせずして、運が良いとか悪いとかいう者もおるが、これは下司な奴のいうことだと思っている。それァなりたいなりたいと思って一所懸命努力した結果、案外すらすらと総理大臣になる者もおれば、ついになれん者もおる。之が本当の運というものである。努力もせずに俺は運が悪いというのはおかしい。つくすべきことをつくして悪いのか、つくさずに悪いのかと私はきくことにしている。

もっとも、そんなことには無関係に、横着して助かる運というのもある。

私は二度目の召集の時、ポナペ島へもってゆかれた。その時、仮装巡洋艦といって、商船を巡洋艦に見せとるやつに乗せられた。之が又非道いオンボロ船で、こんな木っ葉舟、魚雷をうけたら一発だと腹をたてていたのだが、案のじょう島かげにかくれていた潜水艦にねらわれた。魚雷というのは、目標となる船の速度と魚雷の速度を計算して発射する。だから船の何メートルか前方をねらって撃つわけだ。向こうのは性能がいいから、正確にやってきてポンポン当たる。こりゃァもうあかんと思うとったら、こっちの船がオンボロだから、一寸波をくうとすぐクルリと廻る。それがため速度が一定しない。おかげで数発受けたがみんなスルスル通りすぎてしまった。これには潜水艦も首をかしげたと思う。

でトラック島へ着いたら、みんなこの船は運がいいというので、わざわざ乗りかえた人もあるし、降りなかった人もある。私は先へ行く為、他の船でポナペへ向ったんだが、あとできくと、この運のいい筈の船が空襲をうけて非道い目にあっている。運がいいからというて続くものでもない。運にも色々あるから、こういう運は、いろはにほへとのあとにつく運とは又違う。偶然というか奇蹟みたいなものである。よく軍隊は運隊だというたことがあるが、その一例かも知れない、と思うて読んでニッコリして、名人の生還をよろこんだ。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句

結局は女房の膝にたちかえり　岩原喬水

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　んは運……西尾　栞…（1）
ミーシャの国……田中正坊…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（37）
川柳の群像　宇和川木耳……東野大八…（42）
■古川柳　柳籠裏三篇研究（九丁）……（44）
平成三年度　路郎賞・川柳塔賞……（46）
水煙抄……黒川紫香選…（50）
秀句鑑賞┌同人吟……奥田みつ子…（70）
　　└水煙抄……片上明水…（71）
銀河系……河内天笑選…（72）

ミーシャの国

田中正坊

「世紀末のことだから何時、何所でどんな事件が突発するかも知れないが」と六月号の〝編集後記〟で書いたら、待っていたかのようにソビエトでクーデターに始まり、共産党の解散に至るめまぐるしい動きが起こった。ここでソビエト情勢について論評するつもりはないが、毎日のように新聞・雑誌・テレビで各地の状況が報道されるので、今から十二年前と六年前の二回にわたって旅行した時の思い出を書きとめておきたい。

一回目は一九七九（昭和五十四）年で、シベリアを経由してモスクワ、レニングラードとキエフの三都市、二回目は中央アジアのタシケント、サマルカンド、ブラハとオデッサであった。つまりロシア連邦、ウクライナ、ウズベクの三つの共和国の首都とその周辺を訪れたわけだが、ハバロフスクとモスクワとは同じ国内で七時間の時差があり、また、モスクワからタシケントまでは空路七時間もかかる。経済面では流通ひとつをとっても大変

茴香の花……小出智子選…(76)
大空のこころ(10)……橘高薫風…(41)
「赤い」……新正子選…(78)
一路集「時代」……米田恭昌選…(78)
「貯める」……山本希久子選…(79)
初歩教室「匿名」……辻白渓子…(80)
九月本社句会……(82)
各地柳壇(佳句地十選/河井庸佑)……(86)
■句集紹介 佐藤奏月句集『草千里』……宮園射月芳…(99)
柳界展望……(102)
十月各地句会案内……(103)
■編集後記……正坊・楓楽・射月芳…(104)

座右の句

勲章の欲しい七歳七十歳　(薫風)

私の句

六歳も六十歳も科つくる　籾山隆

なことだろうと思った。

この広大な国土は、ロシア帝国の版図を革命後もほとんどそのまま継承したもので、ツンドラから砂漠まで目を見はるような広さであり、イスラム文化圏内のウズベクをはじめそれぞれの共和国が異なった民族・文化・伝統を持っている。何と言ってもこれだけの国土と民族を一元的に統治するのは、政治的には困難が大きく、住民の希望にもとづいて自治もしくは独立を認めるのがよいのではないかと感じたことを思い起こす。

旅行前、社会主義国だから何かにつけてギクシャクするのではないかと思ったが、これは全くの取り越し苦労であった。ツアーで接した〝ミーシャ〟(ロシア人)たちはいずれも素朴で明るいし、モスクワのクレムリン宮殿やレニングラードのエルミタージュ美術館、サマルカンドの回教寺院などの見どころも多く、ヨーロッパとは一味違うくつろいだ楽しい旅であった。

もとより一介のツーリストにはうかがい知ることのできない暗部もあり、それが今回のような激変を招いたものと思われるが、たらいの水とともに赤ん坊まで流してしまわないよう、私たちの愛すべき隣人たちが守るべきものは守ってこの激動の時代をくぐり抜け、平和で民主的な国として再生することを心から願わずにはおられない。

川柳塔

西尾栞選

修飾語重ねて罪を意識せず
気まぐれな風とさすらうのも男
法の日の精粗　善人気にならず
やはり小物　芝居が下手なふところ手
自画像の嘘から続く不整脈
壮語した男バブルと共に消え

美禰市　安平次　弘道

おんなごころを秋へ調律しておこう
どの唄も下手なり　まして恋唄は
千羽鶴の一羽が逃げる風の音
日日怠惰あわだち草が生えている
貧しくてころし文句がまだ買えぬ
妥協かな石榴が熟れてゆくことも

和歌山市　西山　幸

体重が浮く幽霊はこのような
憐みの目が肋骨を貫くよ
もう強いて生きたいという世でもなし
大河かな死者が流れる神が流れる
掃海の要がありそう兜町
悪玉ぞろぞろ明日はどうなる紙芝居

松原市　谷垣史好

沢山の恩ふところに光るべし
妻も長女も次女もときどき魔女になる
大切な日が来る昼寝でもしよう
栗の木にまだ神がいて栗が実る
秋が来て恩師の墓の前にいる
誰もいないところで脱皮していたな

竹原市　小島蘭幸

愛と言う一字が華奢な絵となりぬ
姿見の帯におんなの川がある
勉学のポストへ続く窓明かり
水を汲む朝のコップに虹が立つ
迎え火に嘘せて寄り添うちちとはは

米子市　林瑞枝

ひと巡りして一昨日に会いに行く　大阪市　西出楓楽

大ジョッキ仲間は多い方がよい
ときどきは自分に贈るほめ言葉
リフレッシュした気にさせる生野菜
ケーキもらって明日からにするダイエット
体中のネジをゆるめて母といる
おとな対おとな火花はふところに　松原市　玉置重人

女系家族で猫も男を信じない
痴呆症のテレビ必ず見ています
悪い癖まだアクセルを踏みすぎる
シナリオを考えなおす余命表
温室の甘いミカンにある傲り　岡山県　嘉数兆代賀

秋風に袴りを刻むわたしを刻む
生き下手のときどきのぞく水鏡
期待外れの風が黙って通り過ぎ
ミスをしたわたしも言い分持っている
自分史に大往生と書いておく　奈良市　宮口笛生

髪長く伸ばした僧でたよりない
亡父の歳に近づいてくる墓参り
盆おどり田面流れる風がない
盆おどり子供は食べにやってくる

もったいない位の老後満たされる　伊丹市　樫谷寿馬

子が親を翔び越す夏の爽やかさ
ペット屋の奥で人間住んでいる
町会の書記に大学元教授
リハビリに出る妻の脚まだ確か
振り込みが父権どころか夫権まで　下関市　石川侃流洞

吊り忍　水を注ぐと風が立ち
ゴキブリへ必需品です蠅叩き
折れた矢を集め反省会の愚痴
兎小屋でも大黒柱ちゃんとある
死んでも御恩忘れぬという嘘がある　倉吉市　奥谷弘朗

真心を送ることだけ考える
白足袋の白に自信のある茶室
粗大ゴミ水屋を捨ててホッとする
子に賭けた夢しぼんだりふくれたり
美辞麗句一人いい子になる隣　今治市　矢野佳雲

二度の職　判こは小さいほうにする
空港で団体さんの国なまり
信念をなくした顔が上げられぬ
高原の駅を無人にせぬホタル
大あくびつぎ足すように妻がする

大阪市　江城修史

腎不全素直に振れます白い旗
ちぎれ雲口下手故につき合える
重い義理一つあるから我慢する
コスモスが咲けば亡母の風に逢う
振り向いて欲しい日もある絆です

島根県　西村早笛

これからは勤めに出ます乳しぼり
太平記　隠岐畏れ多いことばかり
くたびれた案山子雀と仲がよし
障子しめて秋しみじみとくつわ虫
拵えた話へチロリ虫も鳴き

米子市　林荒介

味噌汁の匂いに今日も繋がれる
黒揚羽　義姉の記憶はまなうらに
剝落の土塀に父の影がある
対岸に舫ったままの母の舟
ときめいた昔は消えぬ絵具皿

倉敷市　小野克枝

飾らない女に夢が小さく住み
子の声の届くところに椅子を組む
青春がくれた貴重な回り道
忘れ得ぬ面影ひとつ滝に佇つ
秋の葉を抱いてときめくものがある

島根県　堀江正朗

雨音も耳からもらうゆとりの差
都合いいように人さま見てくれる
文明は夢ふくらます風船か
それなりの知恵八十に従いてくる
嫌われる好かれる僕の裏表

島根県　堀江芳子

リハビリと日にちが薬だと主治医
書くことは生きる証の行を埋め
鈴虫よ　いとしさばかり秋深む
まとまった意見を持って来た正座
冗談に乗せてあっさり言い切られ

廿日市市　林野甦光

忘却と言う喜びを隠し持つ
相槌を交わす瞳がちと潤む
レモンティー今度の週も逢うつもり
駆け引きのうまさを悪く言われても
自動ドア出てから被る夏帽子

豊中市　安藤寿美子

志賀島の金印買うて押してみる
竹の杖たよりに上る磨崖仏
磨崖仏何しに来たというお顔
文五郎の酒屋の段のなつかしや
世につれて文楽もまたさま変り

熊本市　永田俊子

ドライフラワー吊して炎ゆるものがない
節穴から覗くか覗かないかの違い
かしら右　箱の干物の悪い夢
修羅の世を経てきて仏画にあこがれる
あなかしこわが身ひとつに割る卵

島根県　小砂白汀

ぎりぎりの線で水着は妥協する
金だけが頼りですとは佗しすぎ
おどす気はなかった亡父のラブレター
明けしぶる河をあいがも朝にする
頓首再拝きょうはここまで鰯雲

藤井寺市　吉岡美房

敗戦の日から鳴いてる蟬しぐれ
河童から暑中見舞の来た冷夏
夕立ちが過ぎると胸が熱くなる
風の島健気にトマト熟れている
味方塚　寄手塚あり風が死ぬ

堺市　高橋千万子

飛べるうち逃してやろうキリギリス
ボーナスの誤算振袖Bにする
クイズ正解抽選という関所
慰謝料で女は店を一つ買う
玉ねぎの涙にも負け男てれ

奈良県　上田翠光

農業をする身に万歩計などいらぬ
人妻の浴衣姿が目にささる
襟足の髪のほつれに風がある
浄土への誘いか鐘にある余韻
いつか来る死への備えはまだ出来ず

柳井市　弘津柳慶

空を仰げば空気があまい過疎の里
半分は嫁の意見も入れておき
マスコミに疑いの目でつめられ
真相はうやむやのまま閉会し
趣味は川柳と言ったら変ってますネ

大田市　藤田軒太楼

あっけない幕切れどこか隙間風
燃えた日もあった老いの語り草
聞き飽きた話題呆気だと暗示され
生来の無口代々の血が流れ
床柱背に紋服の喜寿の春

東大阪市　森下愛論

酔うているコップに愚痴が浮き沈み
いらんこと言うて二次会ほっとかれ
痛飲飽食三猿忘れ勝ち
不都合は忘れましたと呆け上手
一期一会好きな言葉のときめきよ

笠岡市　松本忠三

無職でも一人前に汗をかき
古疵をほじくり出して何になる
閃きがひょろついてきた生字引
古里の敷居が高いUターン
考えてみれば言われるのも道理

尼崎市　春城武庫坊

秋立つ日海輝いて人を恋う
立秋にほんとの秋が欲しくなる
縁のない億と言う字が氾濫す
何遍も同じ言葉を辞書で引く
片肺の妻にやせろと医者は言う

尼崎市　春城年代

黄昏は静かな湖を見ていよう
傍観者には徹し切れない向日葵か
それもこれも自愛のなせる酒たばこ
ためらい傷が立ち直るたび深くなる
八月の風が抹香臭くなる

西条市　片上明水

勝ちそうな気がして脚が速くなる
カーテンの色が決まらぬ隠居部屋
台本のここできれいな月が出る
盆が来た仏に聞かすことがなし
赤脱いで赤に着替える地蔵盆

松原市　小池しげお

五時五分ウインク机越えてくる
サービスのない居酒屋の醤油びん
ネクタイの芯雑兵と思わせず
極楽へ無事に送った僧の汗
試着室　母は財布をもっている

八尾市　宮西弥生

足達者なうちにと急ぐこと多く
女見る男の視線にすきを見る
つまずけばすぐ足洗う若さなり
繋がりとんぼゆっくりゆっくり秋にする
白い帽子たのしい夏の日を語る

大阪市　津守柳伸

饒舌が過ぎるお方で淋しがり
控え目に生きて健康だけ留意
浜木綿の律義を偲ぶ走馬灯
高かったので美味しいという西瓜
楽焼に一句記した旅ごころ

寝屋川市　稲葉冬葉

雪月花それにつけては酔うている
母の命日姉さんのガン告知
半分は植木が吸った缶ビール
ジンフィーズ女の苦吟を聞いている
ときどきは君の名を見る覚めている

奈良市　天正千梢

酸欠の街にこがれてやせほそり
ブームのはかなさ知らないわけでなし
水と油の要の中でゆれ動き
ポックリ寺繁昌している梅雨しとど
久安寺仏を拝み庭おがみ

西宮市　奥田みつ子

夏空へ青い炎となるポプラ
炎にはなれずぷすぷす秋の恋
花氷　花の悲鳴が聞こえぬか
働き蟻も紙のコップも使い捨て
回転レシーブ　人生観を変えました

西宮市　門谷たず子

火葬場の扉が重い会者定離
途中下車しながら旅をつづけたし
ある距離を保ってやさしい人と逢う
新しい冷蔵庫にときめくのも女
幼い頃の夫を知ってる菱の実よ

今治市　越智一水

妻ありてありがたきかな茶一ぷく
老夫婦喧嘩つまらぬことばかり
欠点をみとめ夫婦は戦友よ
肩の力抜けば楽しい友が出来
ゆかた着て過去にはふれぬ遠花火

加古川市　吐田公一

結局は許してしまう血の絆
地位名誉縁なき父の定期券
定年へ地道に歩く靴の減り
イミテーション似合わぬ母にある気品
通関へ少しドキドキする雑誌

堺市　楊井二南

控え目の言葉の中に刺が有る
短命をかこつ風情の蟬時雨
大金の行方が危機を孕ませる
流し目を使い慣れてる私利私欲
冷房の崇り鼻声隠せない

西宮市　林はつ絵

蟬しぐれわたしひとりの闇にする
生意気なようだが自負は変らない
幕下ろすマナーぼつぼつ身につける
少年の手紙は祖母に夢くれる
馬鹿いくつ付く　子で足らず孫自慢

富山市　舟渡杏花

通り魔のようなあなたに縛られて
思い出し笑い見上げる膝の猫
雑学をひけらかしてる自己嫌悪
もろいとこ知っております練りがらし
これが他人ならどんなにかラクだろな

ふるさとに家族待ってる作業帽
反対の父が酔えない披露宴
勘当も死語なり堕落した父権
二の腕はまだ衰えぬ鍬の汗
跡継ぎも嫁にも鍬だこ嫌われる

松江市　恒松叮紅

環境は螢が飛んで保証する
しきたりを引継いでいる壺の艶
命拾うて八月は繰り返す
甲虫ペットのつもりなどは無し
夏帽子未完のドラマとなり冷夏

松江市　舟木与根一

ミスターロープなんて冗談言ってます
貧乏も二つあります心と金
エンジン交換資本主義も社会主義も
もの一字に腹をたててるヘソ曲り
女にしておくのはおしい女房殿

松江市　柳楽鶴丸

風鈴を吊るし忘れの暑さぼけ
世渡りに八方美人という渾名
溜息を一緒に吐いて笑い合い
苛立ちへミシン踏む糸までからむ
青春をふと振りかえる星月夜

島根県　榊原秀子

包丁研ぎとても上手な妻といる
恥じらいが誇りに変るマタニティー
余命幾許ながし短し糸ぐるま
男なら泣かないなんて嘘でしょう
ポケットの財布よお前も淋しかろ

名古屋市　越村枯梢

茹る午後行けば詩人もパチンコ屋
永遠を悟った顔でまた遅刻
この人のサワリ内緒のハナシだが
赤煉瓦解体　神戸に秋の風
蓮の花乗せてやりたい知恵おくれ

神戸市　中村ゆきを

いつまでも達者な老母の火吹竹
作業衣が父の姿で吊ってある
逝く時はどうせ一人の旅衣
カーテンを変えて余生を派手にする
頑なを通して傷を深くする

高槻市　川島諷云児

均等法女の視野が広くなり
ハチキンの涙を月にのぞかれる
川柳を愛しつづけた師の帽子
針金でまげたさつきの私語を聞く
夫の留守あの日のメモを探さねば

高知県　赤川菊野

豊中市　田中正坊

先頭はもう歩かない落とし穴
朱と緑　ハイビスカスは律義者
無季の花　彩とりどりに咲く花屋
なまなかな妥協はしない赤いペン
風はらむ帆に少年の夢がある

大和高田市　岸本豊平次

革靴の重さも暑い老いの夏
言い訳を母は目尻を下げて聞き
太指で摑んだ幸は疑わず
故里が手に取るような天の川
マジックの鳩の羽搏きに空がない

姫路市　人見翠記

一つずつ望み叶えて今日を生き
馬鹿咨で怠け者にならぬ酢を好む
金ふやす欲を捨てれば眠れます
行き過ぎて風蘭の香に振り返る
水葵薄紫に池を染め

箕面市　坪田紅葉

夏休み従姉妹はとこの母の里
墓まいり里の嫁さんできた人
十年も寝たきりでいて良い笑顔
耐えて来たつくして来たと話し出す
妹がシルバーホームの話する

高石市　浅野房子

気付いても気付かぬ振りも愛情か
ある別れときめきが消え去った時
恋しい人は故人なんです秋桜
あと少し炎えて生きようまんじゅしゃげ
そして秋コスモスに託す今日のうつ

大阪市　大塚節子

残暑見舞出しそびれてる冷夏です
送り火へまつわるように夏の蝶
メロンより西瓜の株があがる夏
船渡御の神輿へ花火星下り
鏡に祈る美しく老いるよう

寝屋川市　岸野あやめ

バランスを崩さぬ真面目さが怖い
応接間アンバランスな美術品
手かざし教信者わたしの隣人で
また叱る謝りようが悪いとて
マンガ字で書いた抗議のあなどれず

宝塚市　丸山よし津

音も無くまわる地球の大惨事
右へならえして置く母の処世術
開発の駅に階段多過ぎる
同じ罪きょうも重ねて生きている
八月は霊の世界を覗かせる

大阪市　北勝美

盆帰省お香漂うローカル線
幽玄や春日の森の万灯美
六地蔵線香にむせるさるすべり
一つしか出せない答にある律義
かにサボテン苛めて咲かす慈悲もある

寝屋川市　江口度

マンネリを破る切符を二枚買う
損失補てんみんな温和しすぎないか
空一杯におむつを干している希望
肩書きもとれて人間らしく老い
母の歩に合わせ聞いてる嫁の愚痴

大阪市　河井庸佑

本当の父の怖さをまだ知らず
ライバルの元気の無さが気にかかり
嫌なこと言わねばならぬのも立場
急所だけ押さえ自由に泳がせる
時代どうあろうと不易人の道

大阪市　本間満津子

ひたすらに思いつづけて陰の舞
つまらないなどと波乱の無いくらし
余分には持ってないので身が軽い
帳尻が合うているので油断する
補聴器をはずし雷さん平気

大阪市　神夏磯典子

やっと秋されど秋　萩咲き乱れ
虫干しに亡母の匂い探してる
十姉妹のようにはゆかぬ仲直り
ばあちゃんが慕われている夏休み
盆供養まだお勤めが残ってる

寝屋川市　柴田英壬子

秋の陽を浴びて石庭辞す無口
さわやかな笑顔に焦点合わす秋
余生いま過去の捨て石生きてくる
指切りの誓いを流すえびす橋
甘味増す素肌を晒すつるし柿

守口市　羽原静歩

橋架けて島の人情薄くなり
運動会五百羅漢の闘志かな
天と地の狭間人間欺し合い
建前と本音　神代の昔より
フルムーンああ遅かった遅かった（亡妻を憶う）

大阪市　井上白峰

理想論掲げ追い風待っている
目の高さ変えて若さを取り戻す
嫌という言葉にもある裏表
反論を秘めて流れに添ってみる
例えばの話で妻が攻めて来る

大阪市　板東倫子

偏屈が個性派という旗を振る
智も徳も金で買いたい親のエゴ
生きて来ただけ忸怩たり原爆忌
老い化粧　姫鏡台でこと足りる
お土産に猫用グルメ持って行く

大阪府　坂口公子

煙くない火をたいている大馬鹿さ
何とかスマイル功徳も積んで下さいな
プライドという貌ひとつ哀しすぎ
見てしもうた目が泣いてます流し水
ともかくも力んで見せる枕もと

和歌山市　若宮武雄

合掌がふっと忘れていた痛み
妻の忌や妻そっくりの貌に逢う
庭いじりも重荷になってきた齢
物思う秋にカンナが赤すぎる
くたびれた辞書を励ます秋の陣

和歌山市　堀端三男

竹光をあかず磨いている愚直
逝く時に嘘のないよう生きてゆく
お互いにさよなら言えず駅に着く
郷に入れば郷に従う踊りの輪
損失補塡ささやかな夢破られる

和歌山市　牛尾緑良

語り部になったが語るものが無い
命よりある時重くなる言葉
時々はつついて命たしかめる
古手紙焼いて思い出だけ残す
枠すこし緩めて君を受け入れる

和歌山市　福本英子

行きずりの石蹴ってすむほどの憂さ
俎のきず勲章に胡瓜もみ
亡夫からのサインがしきり熱帯夜
風鈴の舌とり替えて残暑お見舞
低血圧とても便利な朝寝坊

和歌山市　松原寿子

ブラウスにときめきを溜め翔んでゆく
蒼い風　乳房を越えてまるく舞う
白い枕の先に畳んでおく慕情
人間砂漠なさけを枯らしてはならぬ
引き際の良さを波から教えられ

和歌山市　垂井千寿子

救われた命知ってる百度石
虚と実を泡に溶かして大ジョッキ
蟬時雨短い命の丈を鳴く
平凡という字が好きなヤジロベエ
鎮静剤として熱帯魚が飼われ

和歌山市　内芝登志代

終焉まで女は肌をいとおしむ
一億円当ってびっくりしてみたい
勝負師と子供の顔もつ貴花田
国民の用心棒が悪企み
七転びまだまだ懲りてない男

和歌山市　内田結実

夏風邪と我慢くらべをしてやろう
これでいいのかと念を押す発車ベル
無器用な男が折っただまし舟
車間距離開けてつづいている逢瀬
私はここよ無視されている夏帽子

和歌山市　細川稚代

手鏡にうつる機嫌は誰のせい
力まずに生きよう二人の丸木橋
涙腺が涸れて女の一人旅
法話聞く心に栄養ほしくなり
ある予感あしたはきっと来てくれる

和歌山市　桜井千秀

えこひいき不愉快だけどして欲しい
スランプの日小まめに犬の毛繕い
無防備な背中をいつも忘れ勝ち
凡人だから凡人の気障鼻につく
おためごかしが見え見えですよそちら様

和歌山市　木本朱夏

いじわるな視線斜めにとんでくる
手帳の符号妻に解読されていた
髪やせる憎さも憎しおとこありて
いまここにいるわたしとは誰だろう
句集読む愉しみがある雨の夜

和歌山市　福井桂香

かぼちゃの花素敵な蝶を待っている
いたずらが過ぎて昼寝のキューピッド
醜聞を流す資格がいるらしい
毎度まいどチリ紙交換車のような愚痴
丸ければまるいりんごに飽きてくる

和歌山市　山川克子

それからの覇者が探しているテーマ
真剣な顔して母は針に糸
殿方に用心せよと妬いている
ライバルの横でそ知らぬ顔の耳
お嬢さんスカートをはいて下さいな

和歌山市　青枝鉄治

温厚と言われて小言引っ込める
化粧して舞台つとめる馬の足
仲人は雨もめでたいことにする
悪い芽は育たなかった母の膝
エリートが近所に居ない子の安堵

和歌山市　山田高夫

老いの日々付録で生きる箸二膳
水嵩が口まで浸す四面楚歌
秒刻む時計に合わす心不全
痛い顔して傷口を見てあげる
灰色の疑惑にフタをする裁き

和歌山市　田中輝子

一頁めくる重さの無神論
運少し外れて雨の音が好き
突破口探すに濃い目の珈琲
タイムカプセルわたしの恋も入れてある
言い尽し語りつくして里は秋

米子市　小西雄々

バッカスも知る人柄を気づかわれ
銀行の一本釣りにねらわれる
胸の火を隠す笑顔と気が付かず
割箸で選られ男の中にいる
人柄を褒められながら無位無冠

米子市　石垣花子

一人旅　石ころ道は避けて行く
一人旅　五百羅漢と逢うて来る
古井戸の蛙にも逢う一人旅
カタツムリお前もやはり一人旅
不都合な事は見て見ぬふりもする

米子市　寺沢みど里

強がりを言っても池の葦である
床の間を印象づける壺の位置
魚偏の漢字に弱い主婦である
静止した旗が新風待っている
湖のうねり伝説信じよう

米子市　政岡日枝子

えくぼ薄れて徐々に大人になっていく
善人でいつもみぞおち柔らかい
お隣の笑い袋はうるさすぎ
病院坂で誰かふわっとすれちがう
火の山を立ち退かないのは牛の墓

米子市　田中亜弥

米こぼすこぼした数の罰をうけ
横むきの象がいちばん絵になるぞ
畳から貰う情けでよく眠る
日時計の影に狂いがないように
火の山の神を鎮める嘆願書

米子市　澤田千春

挫折した帽子を照らす月あかり
ベレー帽かぶりおしゃれの風にのる
愚痴なんて笑いとばして縄をなう
さりげなく男が米をといでいる
卵割り今日のドラマの幕があく

米子市　新　正子

情報を作ってからの後遺症
潮満ちて花子を抱いたイヴになる
草花が庭に居着いた夏の陣
戸主ばかり増えて二つの飯茶碗
雲の峰越える貯金をしています

米子市　金山夕子

ベンチャラは言わぬお金は持っている
柵外し風景に向く夫婦なり
囲まれて猥談聞くも久しぶり
それからはせっせと作る毒だんご
注射と戦う友わたしも痛い

唐津市　田口虹汀

刺すときは蜂も私も命がけ
暖流と寒流が住む好い家庭
日捲りに今日も感謝の箸をとる
まだ角がとれぬ傘寿の竹トンボ
日の丸に背中をむける日本人

唐津市　久保正敏

腕で拭く働く汗が美しい
国の救援ＰＫＯより火砕流
国賓が手ぶらで金を借りにくる
ハイミスは三高などと言うとれず
忍び逢い花火が闇を深くする

唐津市　仁部四郎

散歩道わが哲学の径をゆく
ほら話入道雲が聞いてくれ
雷の距離にも妻の黙秘権
城下町地図の要所に寺社があり
宴会は嫌い噂は気にかかり

唐津市　山口高明

失念をしたと答弁ご老体
海の深さを知らずに過ごす深海魚
熱い鋼におとこは一度試される
太平に馴れておとこが病んで居る
夢無惨初心なおとこの五稜郭

唐津市　浜本義美

孫が持つ螢の籠は貴重品
逆立ちの蛸はアロエによく似てる
にんげんが出来すぎていて出世せず
自由化に負けてなるかと筵旗
妥協することが嫌いで古希を過ぎ

唐津市　浜本ちよ

水と緑自然に還れば世も栄え
鉢巻の広場に遠い老いの足
森に来て自然に呼吸深くする
朝夕に庭を踏む幸　茄子トマト
老い二人たのしい話も無く食べる

鳥取県　林　露杖

露草の星の滴か藍清し
墓洗う天に一線飛行雲
流燈の遅速に心ある如く
涼やかな声でキリスト売りに来る
笑うこと日々に少なく夏終る

鳥取市　両川洋々

冥土まで持って行く気の恋一つ
青田苅る土の訴状が聞こえぬか
美しい嘘へ拍手を送ろうか
幕待たず夫婦の独楽がよろけ出す
風紋が死ぬ時僕の恋も死ぬ

鳥取県　土橋螢

前よりも後が短い六十二歳
瞳の奥に理想の妻が飼ってある
仏さんに供える菊を作っている
遠慮せず海が裸になれという
太陽の陰から文句ばかり言う

鳥取県　松下たつみ

かくれんぼ母は尻尾を隠さない
争いに出口を開けたジャンケンポン
休耕田諦めたとき痩せてゆく
住む気ない過疎の夕陽をべたほめし
かたい固い頭ていよく無視される

鳥取県　新家完司

にんげんと鬼と見分けがつきにくい
美しい瓶に薬を詰め替える
海に来て息をするのが楽になる
スナックのコップのように光らせる
ともだちの家でビールが冷えている

鳥取県　土橋はるお

辞書が笑う頭の貧しさを笑う
パンツ一丁でお経読ましてもらいます
念を押さずに三文判を押したのか
ていねいに送って塩を撒いておく
腰弁当で今日も男を売り歩く

松原市　佐藤奏月

水嚢を満たして恋はひと休み
いつまでの二人ぞ森は蟬時雨
とこしえに勇士の像は雨にぬれ
故郷へつづく線路がさびてくる
藤棚の今もあるのは人の恩

香川県　松村迷観子

息切れがするからゆっくり歩こうか
法の目が金の流れを追ってゆく
逆らっていると流れに遅れだし
歓びも悲しみも知る酒の味
共通点一つ二つはある夫婦

羽曳野市　田中透太

見送りは橋の手前と決めている
味噌汁の味にこだわる朝ごはん
追いかけて夢の中まで来たおんな
柘榴の実割れて思いが深くなる
流れにはもう逆らわぬ灯を点す

羽曳野市　榎本吐来

ひらめきが欲しい煙草に火をつける
午後の虹やさしい老爺になる予感
蟬しぐれ今日は仇となる夫婦
その先は読まないという知恵もあり
飯どきが来たから座るだけの昼

竹原市　森井菁居

おとなしかった長女の恋を見守ろう
甘ったれ息子をしゃんとさすバイト
パーティーを盆に帰省の娘に合わせ
いんぎんに彼の電話を取次ぎぬ
大阪にとんぼ返りを止めはせぬ

京都市　都倉求芽

ＡＢＣとイロハで揺れる第九条
抜け道の方が当節太くなり
藍染めのほかの浴衣はなくもがな
初盆の墓へ亡母の声聞きにゆく
色褪せてきても切れはせぬ赤い糸（妻、透析はじまる）

京都市　松川芳子

父ちゃんの帽子に鳩を期待する
昨日より今日の生命が重くなる
イヤリング私に味方してくれる
宅急便届いて揺れる里心
何時か来る不安大きな落し穴

大阪市　藤田頂留子

風鈴が秋を呼びこむ北の窓
もうけものとお口のお上手な
ああ落目じゃんけんにさえ負けました
水と緑　人と地球の仲であれ
大ジョッキ逃げるジュースの紙コップ

岸和田市　植山武助

カセットブックだんだん文字にうとくなる
子の居ない夫婦に旅の地図溜る
ストレスは自分に勝てと言う試練
他人の夫と比べられてる私生活
今年まだ孫に勝ってる背の丈

岸和田市　福浦勝晴

自分だけ分かる符号で書く日記
満員車見上げる美人の鼻の穴
そして旅　気だけは若い老い二人
ちょっとキザに飲むユンケル黄帝液
判断が邪推の域を出ぬ嫉妬

岸和田市　原　さよ子

お若いよ　そんな言葉に自己過信
遺伝だと納得できる子の音痴
お隣も孫が来ている夏休み
気がつけば孫の自慢になっていた
連山の雄姿心の画布に画く（大台原登山）

岸和田市　清野　こう

武豊にうつつぬかしておじんギャル
御近所と哀しい別れする異動
永遠の唄声　九ちゃん七回忌
こだわりを捨てて明るい友の声
良い出来を上げて貰って畑仲間

岸和田市　古野　ひで

見ていても見ぬ振りをする世間の目
謝ってすむ事なんぞ小さいこと
夢うつつ愛の告白聞いている
言い過ぎた悔いをくよくよ持っている
卑怯かも二の矢三の矢持っている

岸和田市　岩佐　ダン吉

天気図の雲は国境知りません
いのちがけでやれと気楽に言われても
甘くみるなとラストに言うておきました
河川改修ふる里ひとつ減りました
謝るのはとってもうまい妻といる

岸和田市　高須賀　金太

休むのにどうして遠慮するんです
きれいだな意中の人がいるらしい
冒険をしないたいらな棒グラフ
遠回りしたから大きくなれた君
バーゲンの品は大目にみてやろう

岸和田市　三輪　通彦

汚職には遠い屋台のコップ酒
時効でも洩らしてならぬ秘密持つ
沈黙を美徳と誤解されている
耐えることばかりで亡母の半世紀
いずれひとりとなる日を思う立ち眩み

弘前市　真喜内　實

いいないいな同級会の古希面々
夫婦仲見ている稲のよい孕み
田の畦で稲と話せばとめどない
僕のママ昔話の鶴じゃない
旅先で樹々の緑に男解く

宇部市　平田　実男

赤ん坊の微笑へモナリザが負ける
空気までどこか重たい義理の席
外孫へちょっときびしいヤジロベー
老人ホームの下見淋しい目に出合う
長生きの秘訣長生き考えず

七尾市　松高秀峰

元気でね長生きしてね他人様
郵袋の数に追われて四十年
母逝って心のふる里遠くなる
風鈴も秋風が好きいい音色
人並の私の彩が見当らぬ

神戸市　山口美穂

遠雷を茶室できいている風情
虹の橋渡れば会えそう青い鳥
庭の胡瓜の曲がり具合を褒めている
たわいない話冷そうめんと老母と
汗ふけばとれる化粧をして出かけ

呉市　槇田英詩

折鶴の千羽が祈り鬼が哭く
五つは若く見せる帽子を売っている
煮ても焼いても食えぬ御仁も酒が好き
アルバムの若い自分に妬けてくる
婿になる若者試す酒を酌ぎ

広島県　田村新造

アムールで慣れぬ腰つき沖仲仕（シベリア回想）
戦利品荷揚げ虜囚にあるノルマ
五列縦隊うるさく人数かぞえられ
アムールの脱走探照燈が追い
じゃがいもに嬉し泣きしたコルホーズ
妻たちが談合してる見舞金
来世もと思いこりごりとも想い
田村亮子のあれがほんまの柔道や
やさしさを罪と感じて女郎花
ひと呼吸おいて無職と書き終える

高知市　北川竹萌

ファイナンス望みの庁舎宙に舞う
薬師堂床下に並ぶ蟻地獄
さよならで引っ繰り返る甲子園
古投網　鳥害守る西瓜畑
妹も娘も西瓜さげて来て笑い

町田市　竹内紫錆

手術後の眼で万緑を知った丘
バス席のご縁　並木を教え合い
祐筆の血筋ワープロ打ちまくり
一犬に答える犬の増えた路地
キャッチボール翻訳の師と続けたし

有田市　松井かなめ

坊さんの座布団出来て盆を待つ
観音経五十部書いて悟れない
パスポート持っているのか渡り鳥
三尺寝とは昔今は昼寝する
クーラーより自然の風をさがしてる

広島県　藤解静風

東大阪市　崎山美子

一言で一気に絆もろくなる
教わった口上一気にまくしたて
あと継ぎの無い名人が路地に生き
坂道の途中でため息ついている
車椅子やさしい風に背を押され

八尾市　宮崎シマ子

道一つ曲れば生の蟬の声
盆の海漁火一つなく昏れる
大胆に西瓜食べてる帰省の子
いきさつを一切消して姑は逝く
俎板のくぼみの修羅を抱いている

八尾市　鷲尾章

落書きの消すには惜しい芸術派
流れ星老いには老いの願い事
スタッフを揃えて断を待つ脳死
枯れた手で品書きの茸飯
木簡はみな達筆な墨の色

八尾市　高杉千歩

普陀落や無に近くなる風のむき
ちちははに話すあれこれ百万遍
シナリオに二歳が主役童歌
百円のノートに軽い句がならぶ
一ランク下げて聞き手に秋夜長

八尾市　古川覚然坊

池の主　甲羅に苔の付いた亀
満員になるとサービス欠けてくる
地球の虫甘い匂いへ我を忘れ
髪を気にしながら女の夜のバイト
入試前万引きあると言う本屋

姫路市　大原葉香

ネクタイとは無縁となった車いす
後頭部薄き男は隙だらけ
サイコロは七つの運をもっている
サイコロも振らねば運はついて来ぬ
三面鏡それぞれ違うとこもある

姫路市　丁坪サワ子

因習の輪から抜けたい月の夜
ドライにもなれぬ老残もて余す
伸びゆく孫　亡夫へ見せたい盆の墓
隔世遺伝　強情なとこ祖父と言う
子のためのパートで狂い出した独楽

姫路市　中塚遊峰

ひたすらにゆるし合うてる親息子の章
幾ばくか余命をせめて信の真似
豊かさに犬も本分忘れがち
昭和史の絵巻に自分のせて見る
暗い川一人流れるだまし舟

出雲市　吉岡　きみえ

母のみちたどれば海が凪いでいる
なんべんも自問自答し得た結果
極道に逢いにいそいそ赤い靴
いろんなことあった夫婦の道すがら
サマータイム思い出の中の混乱期

出雲市　園山　多賀子

風鈴の饒舌それは蔑まぬ
紫陽花の単細胞を嗤わない
俎板の凹みに愚痴を溜めている
心の襞ジョーク一つがこなせない
建前で育ち慇懃だと言われ

島根県　松本　文子

諦めたひとから届くカモメール
無理矢理に繋いだ糸がもつれだす
気の弱り大きな声でカバーする
正直なやまびこだったありがとう
いつまでも嫁で廊下を光らせる

出雲市　板垣　夢酔

衣食住満ち足り愛に飢えている
砂となり女サラサラ手から逃げ
喪服しか持たぬカラスの空威張り
無礼にも蚊帳の中まで覗く月
せんべいも株も湿ってうまくない

出雲市　石倉　芙佐子

折々に遠い彼方を見てる妻
たとえ話が何より好きな魚売り
背伸びして知らない世界覗きたい
人間に今も馴染めぬ尾骶骨
釣りしのぶそろそろ覚悟迫られる

出雲市　小玉　満江

紀子さまのおしゃれシックな夏帽子
ホテルから遠い神社へ手を合わす
一本で足りず二本で余る酒
ある時は女同士になる母娘
出雲弁本音の尻尾つかまれぬ

出雲市　久谷　まこと

表現の自由を子等は容赦なく
和解した今日一日が正念場
古傷は死火山だから語られる
本心も後の一つは伏せておく
義理からみ思案の外の船出する

出雲市　竹治　ちかし

明日の夢見るため眼鏡拭いておく
色々な正義が喧嘩する地球
骨埋める土地を捜して生きている
想い出を美化して軍歌聞いている
クーラーの中で家旅が冷めてくる

岡山県　小林妻子

テレビ見ぬ虫も台風知っており
候補者の上手い会釈に騙された
寝ころんで動かぬ父の日曜日
コシヒカリ出穂今年も食いつなぐ
深々と頭は下げた方がよい

岡山県　矢内寿恵子

家中の和音は老母として束ね
昭和史を綴ると強い木綿糸
数珠繰って心のうろこ落します
理屈嫌いで教師にならぬ教師の子
ときめきをきいて下さい不整脈

岡山県　山本玉恵

八月の風は西方浄土より
人生の旅幾度か花手桶
水面下の謀反に風が荒れている
心境の変化に鳩を飼いならす
ポトリと散った花に遭うての失語症

岡山県　二宗吟平

夢の橋お先に御免渡り初め
高清水と言えば石州不昧公
鼠の子でも可愛さに藪へ捨て
甘えとは二人揃っておればこそ
行くとすぐ帰る時間を言うておき

岡山県　荻野鮫虎狼

セールスのトーンが上がる電話口
真相と若干違う自慢顔
絵葉書の向うに女の艶がある
お隣の台所から匂う風
遠花火浴衣の妻は見直され

岡山県　千原理瑛

風きままコスモス揺れている多情
気まま風吹かせて寒くはないですか
定退の無い妻いまもやってます
女房どのさんまのかば焼さすがです
川柳三昧と言うにはまだ若い

鳥取市　小谷美っ千

さむらいが大きなクシャミして通る
コスモス街道を吉報がとんでくる
世をすねて愛に渇いていませんか
冬帽のまんま景色は夏になる
また欲にくらむ両手をさしのべる

竹原市　岡本清水

孫の守り自分の子より貴重品
よい女の話を出すと妻無口
歳なのか諦めムード進む感
物事に苦しむ時は御念仏
借金とローン見解の差よ父と子と

立秋に六十歳を過ぎた肌
夕立ちを待って緑を染め直す
学歴のランク及ばぬ恋と知る
遠慮虫いつもお腹を空かせてる
ヒントが下手で出口なかなか見つからぬ

鳥取県　羽津川　公乃

芋粥の頃がロマンは多かった
淡雪の恋に鉛筆書き似合う
なつかしい友のセールス何故哀し
老後への備えは妻にみな任せ
肩書のない名刺なら持ち歩く

鳥取市　春木　圭一郎

またしても過去のみ追わす秋海棠
お見舞の花スケッチする安静時間
歩いても歩いても帰れぬ嫌な夢
和紙の夢　吹風小雪におこされる
方言のゆたかさ病室で大笑い

島根県　栂　みどり

一坪の墓に我が家の過去未来
隠しごと下手な夫の高鼾
ここからはお節介となる他人
楷書ではかけぬ自叙伝持ち歩く
優柔不断の男の影がやせていく

羽曳野市　吉川　寿美

亡き母が巨人ファンと知らなんだ
騒音の都会へ向かぬ二度の職
窓越しにバイパスが浮く夏の雨
限界を知らずに走る自己主張
住み慣れた下町がよし夜の酒

河内長野市　井上　喜酔

ビタミン剤ちょっぴり妥協して見よか
カラフルな日傘の顔は見ぬことに
人生の折り返し点です赤を着る
捨犬のけげんな顔に見送られ
ブランドのバッグで銀行借りに来る

和泉市　西岡　洛酔

週休は広場抜け切り塾通い
重唱のこの道　妻と呼吸弾む
友と酌み話題をつなぐ冷奴
老妻よモーツアルトを聴きなさい
詩とピアノ暮しをつなぎ老い裕か

静岡市　渥美　弧秀

素晴らしい答をにぎる無口の掌
百点の父でいるから角が立つ
手裏剣の名手妻の影武者か
バーゲンに僕の好みの服吊るす
側に居て妻の抱いてる不発弾

静岡市　安本　晃授

夏の客裸男をあわてさせ
お粗末な巣だが立派に鳩育つ
スタンプに思い出残す暑い旅
夫婦五十年ちょっとあなたも目配せで
年数回来る孫たちへ増築し

静岡県　薗田　獏沓

ねたきりをコスモスさんに招かれる
言いのこすことあるようでないようで
洗濯場で婆さん怒っていた暑さ
思うこころは遠くなるほど近くなる
ブレーキはきかぬ覚悟はきめている

松山市　谷　信夫

初恋の人の訃も聞く地蔵盆
残り火の芯をかきたて句作する
一つずつ生きる過程で捨てる欲
疑えば乱れる心持つ愚か
眠ければ眠る自由もある余生

守口市　野呂右近

列島は巡礼の民盆帰省
釣り糸の近くで待機しています
早起きの気功体操　亀や龍
飾らない地味で確かな一本線（退職Nさん）
頂きの風は気にせぬ雲の上（退職Tさん）

茨木市　井上森生

保津下り手を振り合って上と下
落花生殻をむきむき君と僕
祇園さん来とおくれやす鉦太鼓
昆陽池にふるさと賛歌四季のあり
濡れ落葉どこでもついておいでやす

西宮市　瀬尾六郎太

賽投げてとことん自由に走ろうよ
喉仏　乾いた話したがらぬ
くっきりとカルテに透けてくる命
脚本のない人生が面白い
切なくて雨にけぶっている思い

尼崎市　奥山美智子

蛇口からポトリと落ちた主婦のぐち
氷山の一角に来てあぐらかき
駅までの話がつきぬ曼珠沙華
切手より安い電話が長くなる
忘却のかなたに八月十五日

玉野市　小谷仙山

虫気なくきれいな実梅今の幸
鮎釣りの吉野の宿の杉の箸
湯の匂う男の裸許さるる
金魚売りに去年の金魚尋ねられ
縁日や哀しきものは甲虫

奈良県　長谷川春蘭

西宮市　西口いわゑ

ひまわりに笑われそうな愚痴を言う
ああ誤解とけてビールをあふれさす
よく読めば静かに炎えている手紙
コスモスも女も強し風の中
心を磨く本を立ち読みしています

富田林市　松本今日子

塩壺へ頭突っ込み叫ばんか
そのうちに出世する子に握り飯
水車変らぬリズムに引込まれ
夏追うて八月の末旅に出る
日本語は孫にまだまだ負けないぞ

富田林市　片岡智恵子

響き合う滝へ明日にこだわらず
クルド人平和を願う血の叫び
勤めあげ今日定年の失業者
古女房トンネルの闇やみとせず
この坂を越えれば届く縄電車

伊丹市　山崎君子

単調にそろそろあきた河童たち
もう少し寝かせておくれ蟬しぐれ
すすき野で祭り太鼓を聞く二人
未完の絵彼の残した淡い彩
熱っぽい目にさぎ草は語りかけ

倉敷市　田辺灸六

黄昏に揺れる不安の夫婦坂
目にものを見せた雲仙火砕流
子育ての苦労は言わぬ母の川
龍頭蛇尾父さんいつも負けている
我儘と私欲を捨てて肥えました

今治市　野村京子

揚げ花火疎開した日を思い出す
不発弾女が先に酔っている
逢う当てはないが女のピンカール
丸く生き丸く住もうと水すまし
そして夏詩人になれとくにの海

吹田市　栗谷春子

齷齪と大きな無駄をつみ重ね
金山寺味噌と書きおく今日のメモ
すだれ越しの景色は私だけのもの
ほどほどの散財果てし貴船の灯
おめかしが過ぎたら注意し合う仲

川西市　野村静雄

嘘書いた日記へ明日の靴が鳴る
生き残るための本音をいつも持つ
ボックスに二人はいった長電話
もう飲んでいるかも知れぬとりかぶと
気がつけば古希の祝いの中に居る

試行錯誤みんな流れて行ったきり
旅立ちを迷う心に発車ベル
会う度に育ちの早い他人の子
祭ずし帰らぬという子の分も
帰省子の後片付けを満ち足りて

豊中市　吉田　あずき

気の抜けたビール男ら懐旧談
新刊を買った一日がインテリだ
始めから手の内見せている外交
そんなわけにも行くまい妻に話しとく
実務一点張りこんなのが上司

羽咋市　三宅　ろ亭

花束でも贈っておけと言う社長
一日中他人に会わない日をつくる
感嘆符むやみに打ちたがる女
ゆっくりと寝転ぶ夢を見る達磨
七人の敵もびっくりした左遷

海南市　三宅　保州

冷害の兆しオロオロしておれず
墓参り今夏限りでダムの底
人生は旅だ遊びだ倫理学
妻の目の位置で小鳥を見ています
人の名の犬に拘り吠えられる

十和田市　斉藤　劦

向日葵がホスピス病棟の庭にあり
気に染まぬ円を画いてる水すまし
浜ひるがお海月は夢を見続ける
絵になるもならぬも壺のダリアかな

守口市　森川　まさお

暖流の島に鯨の塚がある
虫眼鏡　漢和辞典が重すぎる
相聞歌　私まだまだ老いられぬ
うろちょろと蟻にもなまけものがいる

大阪市　桝本　蕗児

仲人ボイコットの話燎原の火の如く
口紅の仏へ願をかける旅
柳散るホテルの窓の赤い服
婚約者をテレホンカードの易で選る

京都市　山本　規不風

弱点を補いながら夫婦老い
老妻は難聴　夫は白内障
車間距離守れば無理に割り込まれ
蚊取線香備えて蚊の来ぬのも淋し

仙台市　川村　映輝

夢二の絵　愛は信じる他はなし
まだお役ごめんになれぬ程の幸
歳月や遠景晴れたり曇ったり
聞いておく耳はたしかにあると言う

岡山市　川端　柳子

記念にと市電の石を庭に敷く
裏話流れを変えるもとになる
兜町どの顔見てもワルに見え
土恋し都会の道の照り返し

八尾市　山下　美津留

低金利ただマル優のかげにいる
ごまかしの筆命毛がそっぽむき
黄金波の夢は冷夏とにらみ合い
束の間の再会お盆の灯をともす

島根県　石田　清泉

他人事そんな火の粉が降って来た
よく喋るお守りで孫も口達者
カラコロと浴衣と下駄の夜の道（城崎温泉）
お小遣いもろうて旅の老夫婦

岸和田市　島崎　冨志子

墓詣り蟬楽園の大歓迎
夫の墓碑　添名の私紅もあせ
ありがたや子等が新調御仏壇
御先祖もさぞお喜び御仏壇

寝屋川市　宮尾　あいき

おみやげの香水振ってどこへ行こ
腰痛が邪魔してどこへも行かれない
恩給で一人食べれる今の幸
体重計毎日計る孫二十歳

貝塚市　行天　千代

土用中惚け木蓮の遅れ咲き
ブロック塀風を遮り熱く焼け
十も咲く向日葵好きな方に向き
雑学の蓄積事にたじろかず

岡山県　池田　半仙

高塀の古屋の中の老い二人
気のぬけた返事が返る昼下り
政権へまだ腹立てる元気あり
水中花もきっと暑さに耐えている

堺市　柿花　紀美女

今になり被爆手帳が貰われる
夏祭り昔語りの生家に居る
渋滞を抜けると故郷が近くなる
ばあちゃんもと言ってくれる孫がいて

米子市　白根　ふみ

八つ当り出来る妻あり古希の坂
ドラマあり大大阪の小さい家
足るを知る足るを知るとて貧しくて
負けるなと育てた子等に挑まれる

大阪市　塩田　新一郎

先急ぐ蟻んこ列をはみ出さず
真っ黒に成って働く蟻の列
野ぼとけへ錫杖鳴らす蝮草
渓谷を砕き権現滝しぶき

唐津市　筒井　朴竜

十和田市　阿部　進

倖せは二人三脚古希迎え
根あかまで母にそっくり血の絆
職場では他人顔する共稼ぎ
下積みの苦労が見せる人間味

豊中市　上田登志実

気にすまいこれが時世というのかも
独り旅若い日思う夜の街
見た目には優しそうだが太い骨
水打てば庭木もホッと息をする

岡山県　花田たけ志

本音ともしゃれとも取れて攻めあぐね
工夫して活かす余裕に夢がある
煙たくて避けたお人に助けられ
老妻の領分犯していつくしみ

倉敷市　稲田豊作

日の丸に経済大国の風が吹く
浄土への切符は余生の善で買う
信念は曲げず貧しい灯を点す
結構な話に釣られそうになる

島根県　北川民子

美しい恋にあこがれただけのこと
ヘソクリをはたいた靴で豆つくり
土壇場で頑張っている皮下脂肪
約束を忘れタコ焼買うてくる

大阪市　北山悟郎

一汗の効果が判らぬ不仕合わせ
自由な自由に何処でも行ける自由
炎天の試練受けて立つ汗の義肢
名声がふとした事で地に堕ちる

諫早市　原田メイシュン

長生きを詫びてるように飯をくい
火砕流で泣き土石流でまた泣かせ
毒舌の奥にひめてる人情味
別れたら死ぬと言うたが生きており

黒石市　相馬一花

風呂敷に包めるような嫁娶る
有料にすれば静かなリサイタル
柳腰やはり団扇の風が好き
痩せた手がヒップに伸びる回復期

竹原市　岩本笑子

女坂ふり向くことの多かりし
ロマンスを期待してます夜光虫
その昔根締めに咲いた恋心
月見草　風に逆らうことをせず

竹原市　信本博子

蟹歩き自己主張あり曲げられぬ
深呼吸視野に子の影孫の影
骨組のハウス残して過疎の村
鳴き砂を泣かせて帰る宿の下駄

夏衣装いそぐ娘の岩田おび　出雲市　小白金　房子

米倉へ夕陽かげさす築地松

肩車　土曜夜市の夕涼み

鬼となり叱った子供の涙ふく　藤井寺市　福元　みのる

金が金産むさりながらさりながら

劇よりも日日のニュースがドラマ的

アンケートあなた幸せですか今

割勘の女性が酒豪とは知らず　和歌山県　寺田　裕美

田舎者このレッテルに徹しきる

摘果する汗はいとわぬ作業帽

さしかける日傘は付かず離れずに

素麺に鰻を買って待ってます　米子市　茂理　高代

あの時に降りて歩けばよかったに

待ちわびて足に命の戻る日を

ナースにも多岐亡羊があるらしい

ギブス取る破顔一笑足までも　高知県　小澤　幸泉

何事もなかったそれが不安です

昼酒の味を覚えた定年期

終章のページを埋める青いペン

黒い雨ああ八月の空に泣く

草いきれふとノモンハン八月よ　岡山市　井上　柳五郎

風鈴がきょうは朝から喋らぬ日

魂を臨死体験から語り

涼求む汗たっぷりで水を撒き　大阪市　上田　柳影

あかるくてそして淋しい万灯火

いい粥を妻へとガスの火を細め

広言を吐いて悪夢をカバーする

反抗の火種を抱いてつつましい　弘前市　小寺　花峯

初恋の味ですりんご噛みしめる

信号機変わって秋の風が舞う

宵宮の明りに下駄が鳴り響く

小言いう娘が妻を飛び越える　岡山県　岩道　博友

半ズボン枯れゆく余生の脚にはく

情熱が欲しいが信心気で嫌味

食べ残し消費税も置かされる

ネクタイを外して頼む事が出来　川西市　松本　ただし

もひとりの自分見据えている白磁

Sサイズ程ですねてる肝っ玉

「どうでっか」そんなやりとり好きやねん

善人の心で走るローカル線

鳥取県　西川和子

青い鳥待って赤い実熟れている
よく熟れた実がてっぺんの枝にある
本心を聞いて気持が楽になり
スティックの音で広場の夜はあける

大阪市　冨岡温子

色褪せた話に出来ぬ原爆忌
大餌を取って低空しか飛べず
寒流に居て暖流の住み心地
寝て起きて怒りの鋒が折れている

加賀市　細呂木魯木

爪染める我が娘十七歳と三ヶ月
壁の絵にバブルの割れる音がする
静と動波乱含めた台風の目
不足など言わず嫁ぐ娘に手を合わせ

鳥取県　津村八重子

四足の靴それぞれの朝に鳴る
痛手にはふれず笑顔で会っただけ
無になれず今日もがんこに生きている
家中のハンドル母の温い手に

豊中市　一瀬福一

叩かれて動く時計に似てる僕
命まで担保になっているローン
信号が獣の道を遮断する
けんかしてレクリエーションと言う夫婦

出雲市　伊藤寿美

盆に来た婿が井戸水汲んで去に
十三回忌甥っ子五人の背が揃い
こぼれ落ちた言葉ひとりで歩き出す
老後の話　帰省子とする孟蘭盆会

倉敷市　井上富子

古希の坂まだ手離せぬ赤い毬
裸おどりの好きな宿屋の男下駄
付加価値をそえる土産の花リボン
後ろ指させばはじける鳳仙花

島根県　高野律子

反核の願いをこめて鐘をつく
宿命に負けるな愛し車椅子
心ない浮世に嘘もまた一つ
椅子一つゆずり当りがみな静か

島根県　佐々木芳正

片隅でコーヒーが冷め恋が冷め
国境を超えた握手をモンゴルで
奇術師の手に白鳩が行儀よい
初盆へカナカナ蟬のタイミング

吹田市　山本希久子

しばらくは句碑と向き合う蟬しぐれ
亡父の声　軌道修正してくれる
沈黙は金と今でも思ってる
お祭りの神がとりもつ縁でした

西宮市　秋元てる

勇み足止めてくれる妻は亡い
塾へ急ぐ子等に宵宮の御神燈
ビラ一枚貰ても礼を言う母で
悪役をひそかに自慢長女たり

藤井寺市　中島志洋

石段で大正昭和の差が開き
又とない機会逃した星月夜
アベックに今宵の月が明るすぎ
火種抱く女に見えぬ京訛り

島根県　石飛水煙

飛びこんで菩薩の胸に苦を捨てん
城下町白さが似合う門構え
黙す娘の掌よりさらさら砂こぼる
悲しみを乗り越え寡婦女捨て

鳥取県　さえきやえ

ブヨがまんえん町長さんはえらかろう
九十五歳年に不足はないけれど
癒えてまた刺身のツマとして生きる
退院のよろこびに縫う夏衣

和歌山県　岩崎瑞穂

諳じたお経心のよりどころ
美しい花の雑草刈りとれぬ
古い文読み返してる妻の留守
ごま摺り機フルに使って今の地位

大阪市　岡田ふみ

久し振り孫も眩しくなりました
若夫婦連れて娘も姑の顔
金賞をもろうた後の絵が画けず
駅の鳩毎日寸劇見てくらす

京都市　渡辺圭坊

普賢岳　仏の山も噴くマグマ
秋立ちぬ朝顔開く渕の色
気晴しに妻が飲み干すかくし酒
水割でカラオケ歌うだけの仲

米子市　木村冨美子

旧習を嫌って嫁が寄りつかぬ
亡父の影踏まないように追い越そう
口ばかりの母さん画いて佳作賞
敵陣のベルをどきどき押している

島根県　藤原鈴江

愛かしらその気になってみるもよし
老春や愛の破片を手放さぬ
花活けて眺めすかしているこころ
煌々と月が照ってる喜寿の秋

和歌山市　北山好笑

泣きたいがやさしい膝が見当たらぬ
力づよい言葉に憎悪見え隠れ
力貸すと入口まではいた味方
生き恥の涙は見せぬかたつむり

鳥取市　武田帆雀

梨一つ文鎮にして兄の部屋
ボリュームを上げて魚屋に敵がある
私が言うたらあかん輪が欠ける
ストレスをほどよく捨てる砂の風

鳥取県　江原とみお

平和ですネ朝顔すぼむ頃起きる
わたくしは売約済です梨娘
柊の垣を作ったのは隣
深酒の実刑をいま受けている

八尾市　片上英一

仮りの世のくぎり一年日日草
妻の字にいつも弱音を吐いてます
妻であり母で女でななかまど
マルクスに埃がたまる桐一葉

八尾市　吉村一風

悔しさをバネにこっそりねじを捲く
声出して熱いあついと言うてみる
ハンドルの遊びなるほどなと想う
平凡に慣れしじみ汁二杯のむ

大阪府　籾山隆

やみくもの皮算用が命とり
疑わず明日があるから預金する
孝行の列の乱れが戻らない
美女で立ち才女で歩き悪女で寝

鳥取県　乾隆風

反魂丹のんでは梨を剝いている
豆電球ぐらいに点る頭です
ほどほどに酔わにゃなるまい般若湯
さと芋が親子の絆暗示する

大和郡山市　坊農柳弘

秋茄子を嫁に焼かせて孫の守り
許す気になったその夜の差し向い
浴衣縫う母から娘へのしつけ糸
禁煙の部屋に灰皿ある不思議

鳥取県　幸家單車

ゆたかさが遠慮と我慢わすれさせ
影法師お前も腰が曲ったな
幸せを拾うルーペを持ち歩く
ライバルに贈った塩が甘かった

守口市　結城君子

大阪弁みんな阿呆にしてしまい
主張かえ世の流れには逆らわず
再会はときどき他人の顔になる
年上はそれを知ってて言わせない

茨木市　堀良江

一匹のおまけに出目金買わされる
折り紙の金魚おねむの覚めぬ間に
声かけて日傘と日傘すれ違い
たっぷりの時間に油断締め切り日

寝屋川市　堀江光子

稜線のはるか澄む日の旅心
地球まで止った心地夏真昼
ポストにも行きつけがある几帳面
わが娘啄木などを読みはじめ

吹田市　井上照子

鶴亀算夏の宿題任される
ボタン押すだけで一人の夕ごはん
カーテンをピンク老いなど忘れちゃえ
億の字は錯覚おこす麻痺もする

鳥取県　上田俊路

定年で泳ぐ浅瀬の自然体
録音と言われて縛れだした舌
さわやかに散った敗者にある美学
不倫ではない遅すぎためぐり合い

岸和田市　芳地狸村

踏んばると少し気になる手術痕
回復に昼寝がよいと教えられ
体力の回復はるか万歩計
お見舞の葉書にこもる温い文字

河内長野市　植村喜代

山一つ丸ごと鳴いて油蟬
公私混同　自分の鬼を可愛がり
ああ涼しいどこかで雨が降っている
泣きそうな空がむしむし攻めてくる

大阪市　松尾柳右子

ノウハウは盗み取れよとコック長
里もたぬ二人が巡る温泉地
毎日のニュース一言火砕流

寝屋川市　平松かすみ

白百合の句碑に白百合活けてあり
ラケットを持てば乙女の頃の感
ニュース流れる親戚居ないけど

和泉市　岡井やすお

地球上今日もどこかで小競合い
名人と言われるようになり無口
乗る客に押し戻されて降りられず

鳥取県　西原艶子

ぴかぴかの車いい服着たくなる
父母の膝思うと無為に生きられぬ
出逢うのが遅かったのも愚痴になり

箕面市　椎江清芳

時々は他人の顔をする夫婦
世の移り流れを変える嫁が来る
平凡な夫婦で終る箸の音

竹原市　石原淑子

口だけで生きてるような御時世で
蝶々も一役かって村おこし
赤トンボ　言葉をもっと大切に

鳥取県　谷口次男

順繰りに子供を叱るそれだけだ
バイトして大きな顔で帰省する
思い出のメロディーの歌手相応に

弘前市　肥後和香子

すすきの穂また憎しみとめぐり逢う
無印の金魚うらやむ熱帯魚
ワクチンがあればと思う恋の熱

大阪市　渡部さと美

休んだら仲間気遣う万歩計
三兄弟仲よく飲んで亡父の盆
悪人のとこにもお金居つかない

倉吉市　渡辺菩句

白い恋人そんな名のチョコレート
口にてのひらの蓋して貝になる
身に危険のない口車なら乗ろう

鳥取県　石尾かつ乃

それぞれに若いセンスで翔ぶ姉妹
賛成の挙手に妥協の手が重い
桑の実が熟れて手かごがなつかしい

鳥取市　美田旋風

峠越えやっと和んだ風に逢う
マネキンの服を脱がせて買ってくる
飽食が子に好き嫌い言わせてる

鳥取県　黒田くに子

欲求不満青いりんごの丸かじり
山彦のかえる峠で梨を食う
悲しみをつつんでくれる池がある

鳥取市　前田一枝

やりくりを読んで頭があがらない
赤信号犬も止って青を待つ
年寄りに服のボタンが多すぎる

大阪市　神保拓生

さらさらと流れる小川もう見えぬ
呆けないと言う人少し呆けている
残り火を消さないようにフルムーン

豊中市　江口明光

遅刻せず休まずのんびり食っている
補てん先のリストに私の名が出ない
渡し過ぎお釣りはめったに戻らない

尼崎市　住谷石舟

履歴書の趣味にパチンコとも書けず
焼香がまだまだ続く多産系
税務署に勤めていると言い出せず

大阪市　橋元美恵

家中の洗濯を干す幸せよ
快い小さな花の裏切りよ
だらしなさ切なさ匂う愛の過去

表沙汰出来ぬ女が不意に来る
相性が良いと言われて凡夫婦
業績が伸び過労死の人柱

奈良市　米田恭昌

週休二日眠りほうける程でない
氷屋の旗がすねてる戻り梅雨
墓そうじ妻よ娘よ語ろうか

鳥取県　乾喜与志

父が逝きそれから家族和を固め
母の顔　瞼に浮かべ盆帰省
子供より車の増えている都会

大阪市　清水利武

星空が少し涼しさくれる窓
風に乗る河内音頭が血を誘う
夾竹桃燃えてあの日の黒い雨

大阪市　町田達子

父ちゃんは夫婦ゲンカで何時も負け
勲章を貰いアノ世の土産出来
証券界　土用の波が押し寄せる

香川県　木村明人

ご無沙汰が梨の催促だけはする
さかさまに寝てて枕が見当らぬ
電話料笑い声にもかかってる

鳥取市　岩原喬水

柿若葉の中に孤独な父の椅子
定年に序列の軛はずす朝
白黒を言えば情けがきしみだす

豊中市　三宅つえ子

大阪文化祭川柳大会

とき　**10月26日**（土）
午前11時開場・午後1時締切
午後2時から披講および表彰

ところ　大阪社会福祉指導センター
（地下鉄谷町線「谷町6丁目」または「谷町9丁目」下車）

兼題
「時事雑詠」　柏原幻四郎選
「凄い」　久保田元紀選
「笛」　谷口光穂選
「指」　友田茶の子選
「他人」　中田たつお選
「澄む」　神谷凡九郎選

席題　当日2題発表
選者　田頭良子・河内月子

出句　兼・席題とも2句（出席者に限る）

会費　1000円（作品集代を含む）

自選集

展示会　素手で帰さぬ車代
バブル株　赤信号はあったはず
ニュースになるほどの脱税うらやまし
食べるだけあれば追求せぬ儲け
万歩計　昨日は東　今日は西

金井文秋

挙式迫り不機嫌になる男親
適当に丸をつけとくアンケート
ビデオでも見ようか妻は里に居る
タイガース惨敗続く暑い夏
蟬時雨　寡婦黙黙と墓掃除

野田素身郎

ブッツンと思考が切れてから孤独
野仏も懺悔話をしてなさる
コスモスと呼びたい人が傍にいる
坊さんのうなじにもしや蚊の跡が
寝そびれて与謝野晶子の歌に泣く

波多野五楽庵

月からの笛にしばらく息止めて
三日月の息もときには荒々し
天の川秋の呼吸を取りもどす
靡きながら逆らいながら芒の息
笛吹きの息といっしょに呼吸する

八木千代

平凡な暮しもお蔭さま感謝
義手義足　政治の貧しさを知る
政局はまたも国民不在にす
平和日本　道義忘れた顔になる
政局のおだやかならず秋の陣

藤井明朗

間伐の梢を渡る夏の月
マネキンの裸を担ぐ模様替え
梅雨あけて水鉄砲を作る父
暇を見てぬくい手紙を書いてます
瓢箪の顔は禅味に富んでいる

久家代志男

ひらかなのような余生を絵に画いて
横を向くひまわりもあり陽が沈む
千円札よお前も見放された仲
登りつめた椅子で味方が見当らぬ
オーイお茶 ハーイお茶 妻が居る

遠山可住

杓子定規で空即是色素っ気なし
思い上がって紙一枚を裏返す
価値観も枡で測ったレイアウト
体裁か中味か思う文芸誌
谿川にストレス流すシンフォニー

野村太茂津

BON DANCE 灯籠流しもあるハワイ
夏雲も塔も動かず蟬しぐれ
濡れ落葉も一つ落ちてギャル親父
朝顔展 朝顔の友に逢うただけ
結跏趺坐くすぐるように蟬しぐれ

松川杜的

敵に塩送り手綱はゆるめない
大海を知らない池の雑魚でいる
美辞麗句につまずきながら祝辞読む
減塩に耐える真夏の汗を拭く
秋風へパンク繕う背を伸ばす

小林由多香

無にかえれ無にかえろうと独り言
顎で呼び顎で答えて通じ合い
持ち時間きっちり流石 名講師
わが足でわが足でなし満員車
出し合うた知恵の袋が軽過ぎて

本田恵二朗

墓参から訛りに変わる盆帰省
一族の絆たしかめ合う盆会
冠木門 巷の噂閉じたまま
ステテコに醤油のしみ夏終る
赤提灯 街の詩人の寄るところ

月原宵明

昼の月 地球の波乱見えている
秋風に揺れているのはイヤリング
コスモスのささやき風のときめきぬ
知恵の輪が解けたまだまだ元気です
夕映えの紅葉へ尼僧は鐘をそえ

藤村〆女

問う恥も答えぬ恥も書道展
寄る顔に総てを描いてクラス会
お父さんのおの字に照れる暮し向き
握手する手に増えて来たこの野郎
さよならのあとで目的言うて去に

大矢十郎

酢加減にもある僕には僕の味
行き付けの薬局がある妻には妻の
占いのいいものだけを信じろと言う
キャンセル待ちの飛行機　台風を孫が来る
裸の王様にフセインが見えてくる

正本水客

大凶のみくじを引いた蝸牛
縁を切る包丁だろうか妻が研ぐ
性善説生きるというはむつかしい
軍艦のような靴がぬいである
踏み台になる平凡な父でよし

岩本雀踊子

億億の金騙したり貰ったり
神妙に二進一退たらんとす
他人の齢などはどうでもいいものを
老愁というのだろうかああ淋し
ここにもぶらぶら年金渡世人

工藤甲吉

道一つへだてた訃報もお付き合い
結論は妻が知ってる傷である
是々と非々男と女認める差
古希の唄えぐる昔を遠ざける
正論を吐くとやっぱり損になる

児島与呂志

妻の茶が通るのど仏を洗い
旅の雲見つめて語り尽くせない
あの峰にかかるわたしの千切れ雲
一軒家仰ぐ都として語り
鮎釣りに絵筆を洗い直さねば

水粉千翁

面倒な話の前に酒が出る
迷惑な話と相手思うてず
投げやりな言葉にきつい棘がある
酔うとすぐ気持ちに余裕出る男
料理本揃えて使うたことがない

辻白渓子

迷惑は見て見ぬ振りをする駐車
本物よりうまい偽筆の腕惜しむ
藪蚊まで嫉いて二人を攻めに来る
皆駐車してたが僕だけ挙げられる
スタミナの温存怠けと受取られ

西田柳宏子

この夏もことなし花の種を採り
判子押して通してもらうＪＲ
一つずつ片付けている悩みごと
たまに逢う人がすこうし痩せている
ジョッギング毎日やっているいのち

小出智子

お便りを頂くばかり夏も過ぎ
することがないわけでなしなまけもの
人さまの句をむしゃむしゃと食べている
ゆるせない人にも妻や友がおり
また会えてすこし元気になってくる

高杉鬼遊

川柳塔鹿野みか月
結成満11周年記念大会

とき **11月10日**（日）午前9時開場
ところ 鹿野町立老人福祉センター「しかの和泉荘」
（JR浜村駅下車バス15分）

兼題と選者（各題2句・11時締切）

「息　子」　橘　高　薫　風選
「民　」　森　中　恵美子選
「薬　」　恒　弘　衛　山選
「青　」　金　築　雨　学選
「煮　る」　渡　辺　独　歩選
「凄　い」　政　岡　日枝子選
「破　る」　門　脇　かずお選
「時　」　森　田　熊　生選

会費 2000円（軽食・発表誌呈）
投句 1000円（**10月31日**締切）
投句先 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279
中原諷人

唐津市文化祭参加
川柳塔唐津9周年大会

とき **11月17日**（日）午前10時開場・11時20分開会
ところ 唐津市東城内「城内閣」
おはなし 西田柳宏子氏

兼題（各題二句）

「袖　」　浜本ちよ選
「泡　」　河内天笑選
「歌　う」　古川日曜選
「C　L」　山口高明選
「カード」　樋渡義一選
「英　雄」　黒川紫香選
「九　」　田口虹汀選

会費 2000円（昼食・大会誌呈）

主催 川柳塔唐津支部

〈大会参加と壱岐・対馬観光ツアー〉

A班　大会参加と唐津観光（1泊2日）　約4万6千円
B班　大会終了後、壱岐対馬観光（2泊3日）約9万円
◎参加申込締切　**10月15日**（紫香・しげお・諷云児へ）

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (10)

橘高薫風

小島六厘坊の人格や川柳での手腕は前号の通りだが、二十二歳で夭逝するだけあって、豪傑肌の反面、友達としての親しみが厚かった。征服欲は酷い人だったが、心の底に涙ぐましい共感を抱かせた人、理知と感情のほかに意志力の強い人で、その反発性は激情と共に柳界の誰彼を敵にして戦ったのは多くの人が知っていよう。とても現在の柳界では、あんな咆哮ぶりは見られない。それだけ大阪の川柳界も知的に磨きがかかったのであろうが、さりとて、あのような太い線を描く意力の人も無くなったのであろうと思う、と木村半文銭は言っている。

頭がでっかくて丸坊主、そして声が大きい。鬼若丸のようであったのだ。句会場の外から子供が真似て「六厘坊チョーダイ」などと笑わせたこともあったらしいが、そんな時は相好を崩して豪傑笑いをしたという。

筆者は、大阪川柳人クラブあたりで六厘坊の顕彰をしてはどうかと思っている。柳誌の『葉柳』や『土団子』その他から六厘坊句集を編み、足跡を記録しておくべきだ。

丸刈のむしろ露骨を嬉しがり　刀三
五分刈りで一葉女史の事も言い　五葉
丸刈で握ったぜにのあたたかさ　路郎

これらは六厘坊忌に発表になった句である。この年の十月号で井上刀三は「殻を葬る」と題して書いている（以下一部転載）。

私は路郎氏の川柳を味わって始めて川柳の尊さを知った。川柳に一身を挺して一生を棒に振るの敢て徒爾でないばかりでなく、寧ろ痛快なことであると知った。路郎氏には本当に教えられ教えられつつある。氏の愛寵を一身に享けて私は勿体ない程恙なく培育されて来た。曽て私は大杉栄の自叙伝を熟読した。あの雄勁な筆致に感涙を禁じ得なかったと同時にすっかり大杉栄が好きになってしまった。

机上の卓論なりとして従来耳を籍さなかった社会主義まで共鳴してしまった。私は今、此処で路郎氏と彼とを比較しようとするのではない。けれども路郎氏の場合もこれと同じことである。路郎氏の風丰に接すると、ある敬虔ななつかしさがこみ上げて来る。

次は、「星は輝けり」黒木莢豆の一部。詩人の魂は如何なる場合も健康でなければならない。想像によって解決してはならない。詩人は澄み渡った渕の如き静かな心眼をもってものの真をみきわめなければならない。詩人は春の百舌鳥の如くなやみに正直でなければならない。秋の雁の如く甘えない心を持たねばならない。己の生命を汲まなければならない。技巧と妥協して安価な混合香水を作ってはならない。染料によって色揚げしてはならない。詩の言葉の一句一句にはかすかな吐息の如きものにも魂の真が宿らねばならない。詩はどこまでも真実でなければならない。真実を離れて詩はない。

次は、三好革郎（これも一部転載）

川柳は即身成仏である。寂も解脱もそんな面倒臭いことは言わない。南無阿弥陀仏といえばそれでよい。生活の声がそのまま川柳である。月給が上った。馘首になった。女給に惚れた。女房に叱られた。友達と遊びに行った。借金取りに責められた。皆それが川柳の題材になる。それだけに川柳はプロレタリアの芸術である。被搾取階級の声である。俳句を保守的といえば、川柳は進歩的である。

以上のように若い作家の執筆が活発だった。

川柳太平記（161）

川柳の群像

宇和川木耳

東野大八

「岸本水府の父は営林署に勤め、若い頃は転々と居所を変えている。生れは鳥羽でも、ここの小学校の中途から松山へ来て、西九条で煙草屋をはじめた関係で、当時煙草（原葉）の産地で有名な水府村（茨城県）から雅号を思いついたといわれる。

大阪の成器商業を卒業後、中央郵便局貯金局に勤めたが、ソロバンが上手でなく、金銭もルーズな方だった。明治42年から西田当百（当時、毎日新聞校正係）に師事。その当百の紹介で大阪新報（朝報？）で七年間記者生活をおくる。当時、当百―水府のリレー紹介で、はじめて伊予の松山から上阪した木耳は水府と机をならべ校正係に就職。木耳は水府扱いの『新報柳壇』の校正をよくさされたものである」（原文のまま、大八宛木耳書簡）

筆者宛の木耳書簡は、おびただしい数にのぼっているが、若き日の水府については長くなるので端折る。木耳は水府より三歳若くて、新聞社の独身生活は、万事水府が兄貴分で、「四国の山ザルのお上りさん」といわれながら木耳は、水府と川柳趣味に生きていく。

木耳は本名宇和川勇雄。明治28年9月21日愛媛県松山市生れ。松山中学校（現松山商業）から慶応大学に入学。水府と新聞社の同僚で大阪暮しのあと、昭和二年頃渡満。満州煙草の卸商外交員となり、奉天・新京・ハルピン等に転任、ハルピン暮しで白系ロシア人の友人からすすめられて、革命後のソ連へ渡ったのは昭和六年ごろ。

「大黒河からブラゴエチェンスクへ渡ったんだが、ブラゴエでアムール河の波止場で、戸籍謄本の下へ五円札をひそませたのが旅券がわりでね、モスクワ、レニングラードと歩き回った」

滞露一年余りで帰国。満州国が誕生して間もない昭和八年ごろから独立。満州煙草の仲買人で手腕を発揮し、大衆タバコ「五バット」を売り出して一財産を作り、奉天に腰を下ろして昭和12年『番傘満州野』を創刊した。

「水府との縁で番傘に入れあげるようになったが、滞露中は暇さえあれば古川柳を読みふけって、結局、伝統川柳は『番傘』ときめたわけだよ。この本は水府の柳誌だからね」

筆者はその折、同じ奉天の在住で、雑誌社の駐在員だった立場もあり、木耳の『番傘満州野』の編集を手伝わさせられ、漫画漫文をさかんに誌上に書きちらしたものだ。

しかし、地元の若手川柳人は、木耳のあまりにも番傘一辺倒ぶりに反発し、筆者を加え七、八名が一挙に同人脱退を宣言した。このため木耳は、その『番傘満州野』と『大連番傘』の合体を意図し、直ちに『満州番傘』発刊に踏み切った。

この両者の合同協議会が実を結んで、昭和

13年8月『満州番傘・奉天—大連合併号』が陽の目をみることになった。これをしおに反番傘系柳誌の『青泥』の主宰者石原青竜刀の呼びかけで、期を同じくして誕生したのが、『川柳大陸』であった。筆者らの脱退組はもちろんこの『大陸ローカル』誌の傘下に加わったことは言うまでもない。

『満州番傘』の発刊に当り、大連側から木耳に呼応したのが『大連番傘』の出口夢詩朗である。木耳・夢詩朗のこのコンビで、同誌は出来上ったという形である。夢詩朗は、終戦時には、青島で軍御用商人として頭角を現し、その時点では資産十億と称される財閥でもあった。要するに大陸の番傘系は、この二人の財力と力量によって敗戦まで強力な実勢を誇ったものである。

「とにかく川柳といえば万事番傘オンリーで、木耳の番傘への傾倒ぶりは排他的なほど強烈だった。そのため、若手に限らず大陸人は根が自由闊達、内地の大阪あたりの一吟社にナメられてたまるか」の意地もあった、と大井正夫は『ふあうすと』のコラムで書いているほどだ。

奉天から上海へ移住した木耳は、戦局の行手を見通したのか、昭和18年秋、兵庫県西宮市の甲陽園の高級住宅地へ、全財産をもって引き揚げてきた。そして終戦。この頃の番傘は、戦後の混乱もあり落ち目で、水府一家も生活に困窮していたようだ。一時期、岸本家の面倒を見ていたようである。

一方、大陸派番傘系の大ボス、夢詩朗も青島から裸一貫で引き揚げてきており、

。丸裸よし二十年若返えり　　夢詩朗

という引揚感慨句をものし、北九州市の陋屋でその日暮しの生活に入っていた。

『番傘』昭和32年6月号誌上から、木耳は「満州柳壇想起片々（礎稿(1)」から大陸柳壇回顧録の大作執筆にとりかかった。しかし、回を追うごとに、番傘社内からこの記事は、今どき無用の長物—との根強い批判と反発が持ち上った。

「戦後十余年も経って満州柳壇でもあるまい。まるでこれは幽霊の足跡をさぐるようなものだ」という番傘本社幹部のつきあげもあって、ついに木耳苦心のこの大作は、十回あまりで掲載中止となった。見兼ねた大井正夫が、旧大陸での交友の縁もあって同稿は『ふあうすと』へ引継がれたが、エンエンとつづくその回顧録に同社も持て余し、山田良行主宰の『きたぐに』『川柳人』へと流れていった。

多年大陸で、番傘一辺倒で物心両面にわたり番傘へ傾倒してきた木耳にとっては、しょせん憤懣の心証でしかなかった。筆者あてのおびただしいその書簡は、わたり歩く木耳の大陸回顧録の悲哀をそのまま、悲痛なまでの番傘批判に終始していったのも成り行きであった。

大陸川柳人同窓会は、昭和40年4月富士山麓の須走富岳荘からスタートし、毎年開かれ、昭和59年10月の高野山麓の第19回の同窓会をもって終幕した。この会の結成は、いわば木耳の大陸回顧録をバックアップすることも重要な裏付けとなっていたのだが、木耳はこの会にわずか一回しか参加していない。この辺に彼の性格的な一面が伏在していたようだ。昭和47年10月11日脳軟化症で死去。享年78、秋覚寿光居士。

二ン月の寒さ佗びしさふり返えり　木耳
青や青　地方事務所が掘りはじめ　〃
カルベスにウォッカ帰還は嫌やという　〃
リルはまだ租界あたりにいる噂　〃
陽は南　仏はじっと向いたまま　〃
コスモスが女世帯へ咲き　〃
島原の妓とだけの十字架ぞ　〃

▼次号は「**出口夢詩朗**」

柳籠裏三篇研究（九丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

150　**ろうかいのお袋やぼてん〳〵**

佐藤＝労咳は肺結核も気鬱病もひっくるめての病名らしく、年頃の娘に多かったことは、多くの川柳によって知られるところ。この病気の原因は欲求不満と考えられ、婚期前の娘は男欲しさからかかるものとの約束があった。

主題句は、愛娘の労咳の原因がそこにあることを知らぬ母親を、娘の恋情を解せぬ野暮なお袋だと評した句なのであろう。恋情といっても特定の男を対象とする恋ではなく、肉体の深所にうずく青春の血のことである。

ろうがいに聞けば誰でもいいと言い　安八礼10

七久保＝賛。労咳などという病気は、春情を催す池草のはえる頃にかかるもの。

生えかかる時ろうがいは出るやまい　明七梅3

西原＝賛。おふくろは駄目。伯父がよし。

さばけたおちき労がいをかたづける　二五4

岡田＝同。

151　**具足師のはつめい子供わきへ出し**

佐藤＝具足師というのは、甲冑類を製造する職人のことで、一名鎧師ともいった。

鎧を着て戦場に出た場合、小用を足すのが不便である。そこで特別な工夫をこらしたので、これは具足師のアイデアだというのではなかろうか。

八木＝「鎧ビツ」の中には、春画が入っている事が多かった。具足師はこの際、修理屋または手入屋と解し、「鎧ビツ」を開けると変なのが出て来る恐れがあるから、子供は脇へ追っ払っておく。そこが、具足師の「はつめい」だというのであろう。

七久保＝八木説の如く、枕本または春画が具足櫃に入っていたので有名。

鈴木＝礎稿、子供は文字どおり「わが子」でよいでしょう。なぜ「わきへ出し」たかは、八木氏以下のご説明のとおり。

岡田＝同。

152　**闇夜に灯火やたら来ル御不如意**

佐藤＝「不如意」は「内緒の不如意」の意で御不勝手と同義の語と見てよいであろうか。

「闇夜」は大晦日の夜の暗示か。

主題句は、貧乏旗本の邸へ、ひっきりなしに掛取の提灯が攻め寄せることを詠んだものと思われる。

八木＝謡曲「高野物狂」にある「逢ひ難き如来の教法に逢ふ事、闇夜の灯」の文句取りだけで、大晦日は必然性が薄い気がする。

七久保＝佐藤氏説のように大晦日の夜の掛取です。

借りのある家へ提灯紋尽し　一

「闇夜の灯」「闇夜の提灯」などの俚諺をかけただけの句で、「闇夜に灯火を失う」などともあり。

西原＝「闇夜の提灯」とは、元来、切望しているものにめぐりあうという意だから、主題句はその逆使用して笑いを提出しているのである。

鈴木＝大晦日の夜の掛取り。

御不勝手お台所は紋尽し　五六4

岡田＝俚諺「闇夜の灯」は、字義どおり救い手が現れる意だが、句はその逆用的面白さが狙い。

153　**車引落馬の供にとつかまり**

佐藤＝「車屋さん、手前の主人が落馬して骨折でもしたらしい。済まぬが医者の所まで乗せてってはくれまいか」

馬びしゃくの水で旦那をよばってる

（これは主人が落馬して気絶したらしい）　玉21

乗るもんじゃないと馬場からびっこ出る　二〇5

七久保＝車などのキシム音に馬が驚いたため主人が弾みで落馬し、供が血相かえて車引に談じ込んでいる図であろう。

青木＝礎稿に賛。太平の御代、主人も馬に乗り慣れぬための落馬か。この供、機転のきく忠義者。側を通った車引こそいい迷惑。

岡田＝この句、車引が落馬を笑ったので、落馬した男のお供につかまった…と解していました。例えば、妾の兄の落馬などの場合。

154　**高尾へは嶋黄金の客弐人**

佐藤＝「嶋黄金」は仏語の「紫磨黄金」の秀句であることは疑いない。

主題句は、その仏語から語調を借りた句案で、嶋は高尾の情人島田重三郎、黄金は陸奥の大守で高尾へしげしげと通う伊達綱宗を暗示しているのであろう。この情客と金に糸目をつけぬ大名客の鞘当が一句の趣向になっている。

嶋へハ行く気だが仙台河岸ハいや　玉11

七久保＝賛。「しま黄金」を用いた句として

くやしさはしま黄金にさしつかへ　天八天1

西原＝賛。嶋田重三郎なる者、いかなるものにや素性を知りたし。

鈴木＝賛。嶋田は小生もただ高尾の情夫とのみで分からず、俗説中の人物でしょう。

岡田＝同。

155　**梅若丸と仮りの名で内を出る**

佐藤＝梅若詣りを口実にするどら息子を梅若丸と洒落て呼んだわけで、家を出るときの殊勝な言分はその場限りのもの、当初より対岸の吉原詣りが目的であったことを諷刺した句なのであろう。

朝帰り梅若丸を親父ぶち　玉20

梅若へ行くとハ啞も殊勝なり　三四3

紀内＝賛。

ぶち殺された命日に息子行き　一九4

帰りには人買いに成る角田川　五32

梅若は仮の名実は遊女なり　安五天1

鈴木＝賛。　**岡田**＝同。

川柳塔社常任理事会（9月2日）

▽平成3年度の路郎賞・川柳塔賞の推薦句が各選考委員から提出され、授賞句を決定。

▽二賞を含む各賞の選考・授賞の方法についてあらためて審議することとする。

▽紫香氏から川柳塔唐津支部大会への参加とツアー計画について提案。

平成三年度 路郎賞

千本を伐り 一本の植樹祭

十和田市 斉藤 劦

斉藤 劦柳歴

昭和58年5月 日本海中部地震の日、雑誌青森農業「川柳道場」工藤甲吉選に初投句
昭和60年8月 川柳塔社誌友
昭和62年1月 川柳塔社同人

〈推選句〉

千本を伐り一本の植樹祭　斉藤 劦

評 このところ女性の川柳が男性を凌いでいるのは、わが川柳塔ばかりではない。風刺とユーモアの作品がインパクトを持っていた過去をなつかしむだけではないが、この両者の味がなくては、川柳はみみずのように得体の知れぬものになってしまいかねない。今年度も、路郎賞は女性の作品が圧倒的と思われたのだが、敢えて、社会風刺・人間風刺の味を持った句を推薦句、準推薦句に推すことにした。私の意図を諒とされたい。

黒川紫香

帰るかと思えば座り直すだけ　崎山 美子
それがしもおぬしも一献 月の下　栗谷 春子
水道がポタポタ「誰か居らんのか」　秋元 てる

路郎賞準優秀作 第一席

ひようたんの駒を
出そうとあせってる

出雲市 吉岡 きみえ

路郎賞準優秀作 第二席

光らない釘が
一番きいている

鳥取県 松下 たつみ

路郎賞候補作品

橘高薫風

風鈴の音がかすかであさきゆめ　吉岡きみえ
太極拳まさに悠久大河だな　渡部さとみ
冗談にしてしまわねば恋になる　吉岡 美房
喧嘩して楽しかったよ嫁ぐ娘よ　橋元 美恵
まんまんと水をたたえている不仲　田中 輝子
躓いて顔を落してきたらしい　西山 幸
白っぽい鳥にならぬようにする　津村八重子
恋文はポストの外に落すべし　八木 千代

〈準推薦句〉

武者凧と思い込んでる奴凧　舟木与根一

おっとりと金魚一匹生きている　春城　年代
病室の時計よっぽどのろまだな　堀江　芳子
補聴器をはずして素顔とりもどし　玉置　重人
四捨五入　四に本心いれてある　奥山美智子

〈準推薦句〉

ロボットのひとつ覚えが侮れぬ　永田　俊子
ふるさとの川に油が浮いている　新家　完司

〈推薦句〉

ひょうたんの駒を出そうとあせってる　吉岡きみえ

西田　柳宏子

おいと呼ぶ視角に妻がいてくれる　川島諷云児
水煙の先から春が降りてくる　江口　度
雑巾をきれいに濯ぐ恩返し　西山　幸
魂が外へ出たいと涕くのなり　谷垣　史好
鯛の値をきいて鰯を買うて去に　原田メイシュン
雑草の強さ雨乞いなどしない　河内　月子
タンポポの踏まれた型で花が咲き　宮崎シマ子
頂上で富士より五尺高くいる　小砂　白汀

〈準推薦句〉

生きてゆく私も蠅も命がけ　小林　妻子

〈推薦句〉

光らない釘が一番きいている　松下たつみ

野村　太茂津

剝き出しの牙は恐れることはない　桜井　千秀
むすんでひらいて恋は沢山することだ　小島　蘭幸
面白くないのに笑う芸がある　三宅　保州
添うてからも好きだと言うたことがない　小池しげお
片足は踏みとどまっている理性　寺田　裕美
中流の見栄で一円拾えない　川島諷云児
黒塗りの椀にゆずれぬ位置がある　寺沢みど里
次に割る茶碗はちゃんと決めてある　菅井とも子
実直に生きた西瓜に種がある　西山　幸

〈推薦句〉

少しずつ隣の屋根が高くなる　政岡日枝子

阿萬　萬的

糊塗ばかり上手になって老いてゆく　堀端　三男
坐りよく河原の石はみな丸い　安藤寿美子
撫でてやる金属疲労のような骨　板東　倫子
日向ぼこ忘れ上手になれそうな　堀江　正朗
温室の中の評論家が吠える　松下たつみ
常識をずらすと今の世が見える　丁坪サワ子
年輪のゆがみ大樹は語らない　竹治ちかし
雷は孤独で太鼓打ちたがる　春城武庫坊

〈準推薦句〉

秋の風なにかの無駄がしたくなり　本間満津子

〈推薦句〉

退屈をする幸せに気がつかぬ　矢野　佳雲

感想　斉藤　劦

人間が好き、農業が好き、自然が大好き、だから農業の教師をしている。子供等の二十一世紀を思う時、天地人の調和、物と心の調和が持論だ。作句もおのずとそこに目が向くがまだまだ未熟者である。思いがけないこの賞が、川柳とは何か、人間とは何かを永遠の課題として探って行く機会を私に与えてくれた。ほんとうに有難いことである。今後とも川柳塔社各位のご指導をお願い致します。

平成三年度 川柳塔賞

桜咲く 放浪癖はまだやまず

八尾市 高杉千歩

高杉千歩柳歴

昭和42年5月 どんぐり句会
平成3年4月 川柳塔社同人

笑い話にするのは少し先になる 片上 英一

〈準推薦句〉

知らない人と言葉を交す一心寺 高田美代子

〈推薦句〉

桜咲く放浪癖はまだやまず 高杉 千歩

川柳塔賞候補作品

宮口笛生

凡人のしあわせたっぷり夢をみる 新井 朋子
みんな我が子ハカリになんぞかけられぬ 野瀬 昌子
中流に汚染をされた妻になる 大橋 政良
和解して酒のピッチが早くなる 児玉 歌子
気兼ねなく貧乏神と住んでいる 三浦 つね
しあわせの一つ料理のうまい妻 上田 柳影
雑魚なりの頭で泳ぐこと覚え 玉置 当代
嫁った娘が時々大根抜きにくる 伊藤 寿美
涙を流すたびに人間らしくなる 大角 幸代

〈推薦句〉

子育てが終って消えた力瘤 高田美代子

小出智子

機械なら耐用年数すぎている 浅子まつゑ
お互いの生活がある交差点 新 正子
赤飯炊く何もないけどおついたち 清水 絹子
買い足して買い足している年賀状 児玉 歌子
煽て甲斐ある爺ちゃんになりきろう 中山おさむ
ひっそりと秋篠寺はそのままに 池田寿美子
バーゲンの妻を本屋で待っている 伊藤 寿美

川柳塔賞準優秀作 第一席

子育てが終って 消えた力瘤

藤井寺市 高田美代子

川柳塔賞準優秀作 第二席

鮒ずしを食べて 近江の息を吐く

大阪市 森崎忠禄

高杉鬼遊

水族館　休館日でも泳いでます　家村　高雄
年寄りを遊ばせといて人不足　大西　文次
打って出てみよう今年は年女　堀畑　靖子
コーヒーで見合いをしたり別れたり　太田　幸枝
試着室　顔も写って見えたはず　高野　不二
警察の前で渋滞ひどくなり　木下　道子
お互いに相手を捨ててきた二人　尾崎　黄紅
一円が足りず千円札を出す　北川　一進

二賞雑感　西尾　栞

ここ二、三年、路郎賞は女性作家で占められていたが、今年の路郎賞は男性作家で、遠く青森県十和田市の方、青森県立三本木農業高校校長住宅内という住所である。お名前は斉藤劦(つとむ)という、仲々尋常でないお名前である。何にしても珍しく諷刺の効いた一句である。

川柳塔賞はやはり女性の方である。今は同人になられた方であるが、作品は誌友時代の作品で、放浪癖と桜、花の季節の浮いた心を遺憾なく表現した妙。この方の句は何時も話題になっている。

ご両人のご健勝とご清吟をお祈りいたします。

〈準推薦句〉

大事な人をいくさなんかで死なせない　萩原　美雪

〈推薦句〉

鮒すしを食べて近江の息を吐く　森崎　忠禄

玉置重人

やっかいないのちをくれた父と母　高田美代子
トーストが焦げる幸せな時間　大角　正道
ベルが鳴ると思いつづけて油断する　三宅つえ子
古簞笥亡母のコントがまだ続く　福原　悦子
空白を埋めると眠り深くなる　桜井　荘次
約束の指にストレスよく溜まる　池　森子
パズル解けて終着駅が近くなる　芦田　絢子
すこしずつ無慈悲となって行く噂　上鈴木春枝
雪しきり仏を飾る花買いに　伊藤　寿美

〈推薦句〉

能面になれぬ鼓動を抱いている　流　奈美子

板尾岳人

赤が好きでんでん虫も赤で描く　森田　文
未来などどうあろうとも柿の種　大西　文次
ひとつなくしたボタンを街へ買いに行く　寺中三枝子
さよならをしたのに帽子そばにある　大角　幸代
時々は妻とワルツを踊ろうか　大峠　可動
珈琲を両手に包み人を恋う　中尾まゆみ
頼りない人だと思う破れ傘　高田美代子

〈準推薦句〉

消しゴムを許してしまうから解けぬ　藤井　高子
かくれんぼ誰もわたしを捜さない　山口三千子

〈推薦句〉

ぎんなんの落ちてつぶれて秋愁や　上田　柳影

感想　高杉千歩

川柳塔賞を頂きありがとうございます。鬼遊受賞から二十三年、川柳と絵との二足の草鞋で、今もなお往きつ戻りつの繰り返し、放浪の定まらない日夜です。人様の一歩が私の千歩と覚悟しています。水煙抄における紫香先生のご指導、また好郎、小松園両先生の柳樽においてのご薫陶のお蔭と感謝申しあげます。

秋天を望めば遙かに遠いこれからの道、皆さまのお力にすがって参りたいと思います。なお一層のお導きをお願いします。

黒川紫香選

何くわぬ顔で根まわし済んでいる
花手桶父母のご機嫌伺いに
責任を終えた夫婦の衣紋かけ
計画に逃げの一手も入れてある
紙コップ軽いジョークを受けている

堺市　宮本かりん

ケ・セラ・セラ天狗の鼻はよく伸びる
病んでいなさる美しいおばあさん
大切なあなたへ電話つながらぬ
やっとこさいも虫ころろ孫ねむり
つまらないことがだんだん重くなる

和歌山市　森　茜

まるっこい文字で脱皮がまだ見えぬ
化粧瓶少しは夢をくれますか
自信とは別にゆったり座ってる
寸評に千のことばが詰めてある
まなうらに亡母が佇む地平線

広島市　流　奈美子

涙腺が切れ一面の海となる
流れ星掬うて夢が適うなら
強情が砕けて父の笛冴える
沈黙の花へたっぷり水をやる
ひとまずは今日を繕う糸を選る

浜田市　中尾まゆみ

泥染めのつむぎの中に母が棲む
使い方ひとつ鋏に裁かれる
折鶴よ手紙を運んでくれないか
傷ついた夜も枕がふたつある
子の眠る浄土に落ちる夕陽です

富山県　高畠五月

手配書が不気味に睨む無人駅
眠くないのに寝かされる保育園
吸いがらが出た子の部屋に立つショック
裏町を夜は表にするネオン
地の果ての動きも生で来る茶の間

松山市　白石春嶺

静岡市　沢田きん

せっかちがひと目で分かる靴の底
もう少し話して居たい下弦月
さよならの声がだんだん遠くなる
それなりに生きて幸福摑んでる
バスが来てちいさな違反してしまう

名古屋市　藤井高子

藍染めが好き亡母憶う刻が好き
それぞれに聞かせてすだく秋の虫
亡き人と語る今宵のこぼれ萩
タイミングずれて潮どき取り逃がす
同姓同名の人のご葬儀見てしまう

大阪市　新井朋子

霧の中過去と未来をかいまみる
湖が映す私の影に酔い
タフじゃなきゃ恋などできぬ女子高生
かげろうの夢を大地が見つめてる
物語　風が吹いたら幕が開く

熊本県　大川幸子

転職もしない野良着があたたかい
私の時間夜の湯舟に気が和む
嘘言わぬ齢にはやはり逆らえぬ
虫のいい事ばかり考える暑いから
砂浜に終った夏の恋を埋め

松山市　宮尾みのり

ときめいて白いカーテン揺れました
飲み水を買う東京が捨てられず
うれしい時かなしい時も彼の胸
流れ着く所で根を張るのは女
すぐ理屈言う両隣空いている

富田林市　池森子

逃げるのが下手で冬の森に居る
ためらってばかりコップの中は嵐
終点で待つのはきっと妻だろう
川の流れを止めて一度だけ狂う
よく化けた後で虚しくなるピエロ

尼崎市　児玉歌子

下書きのエンピツ主義を曲げている
八月のポストは渇き切っている
母がまだ健在妬いている話
煽てるととても始末の悪い酒
諍いの窪み六法全書繰る

尼崎市　尾宮弘治

音楽が好きで遺産は楽器だけ
母の日に母ホンノリと果実酒
梅雨あけて豆腐が美味い京料理
嫁った娘の部屋で寝てみる座してみる
玉垣に亡父を慕う祭り笛

千葉県　上鈴木　春枝

ヤアヤアと自慢を聞かすロが来る
秘密よと女の口が嬉しそう
札一枚多い財布にあるゆとり
市場籠メニューを決めて来た安堵
筆勢も変わらぬ老父の楷書体

久留米市　鶴久　百万両

椅子つかむまではみやこを捨てきれぬ
ひとりの訃男は闇を深くする
妄言多謝火種はすでに消してある
コスモスが咲くと別れた娘を思う
某月某日　鬼籍へ俺の名を見付け

鳥取県　大角　正道

爪を切るたび両親を考える
生きていたらどんなにありがたい親父
停止線越えて止まるとはずかしい
髪の毛が減らないように努力する
もう少し分かってほしいから泣いた

鳥取県　大角　幸代

日記帳いつしか家計簿にかわり
嘘つきの私に長い登り坂
プライドを売って自分史もう書けぬ
涙で書いた地図が少しずつ渇く
悲しみが私をいつも強くする

富山市　松岡　幸子

玄関にすねて出た子の靴がある
燃えつきた男が立っている枯野
すきま風うわさ話を聞きたがる
胸の奥酒がポロリと喋らせる

岐阜市　渡辺　杏村

酔い醒めの小窓から見る秋の月
秋晴れの空を二つに飛行雲
この秋の菊人形は太平記
秋の朝するどい百舌の自己主張

摂津市　木下　道子

コンチキチン高層ビルの谷間より
鶏頭もカンナも恋の真っ盛り
弁当にドリンク剤が添えてある
グーチョキパー順番に出す子煩悩

砂川市　大橋　政良

ストレスで曇るめがねを拭いている
河口まで来て角のない石になる
身内の中でひとり他人の目をしてる
のし袋義理と打算をつめてくる

熊本県　岩切　康子

箱入りの有機野菜を疑わず
初恋の貴方が見える場所に居る
来客が門を出るまで吠えつづけ
猫の事故蛇か鴉が狙うだろ

がむしゃらに歩いた道に悔いはない　尼崎市　的場十四郎
いい夢が欲しい今夜の三面鏡
待遇がよくて森から出られない
裏街の厚い情けに灯もとける　京都市　本荘福子
通ってる医者にベンツが二台ある
サービス品だけで一夏化粧足り
本人はスランプですと言う怠惰
二階から生返事だけ降りて来る　兵庫県　森脇和子
冷蔵庫あけると孫が起きて来る
演技する涙を溜めたつけまつ毛
花の無い部屋で悲しい夢を見る
四人掛け中の一人が太鼓持ち　尼崎市　森安夢之助
郵便夫畠の西瓜ほめて去に
おばあさんの咳で寝不足してる猫
ダイエットしていないのに痩せてくる
鈴つけた鍵が砂場で一人ぼち　松山市　丹下美津子
小利口に動いて足を踏みはずす
夏の句に掛け替え恩師偲ぶ部屋
寡婦の句にいつか涙の句が消える
心ない噂積木の家ゆれる

時どき逢って腹から笑う話する　出雲市　岸桂子
窓開けてヘチマの花を覗かせる
引き金を引くこともなく嫁姑
握りこぶしを開くと忍の字が消える　尼崎市　田中薫
五百羅漢恨んだ顔も風化する
玉葱に悔し涙を見破られ
戦争展泣きに来たのでないけれど
頭文字書いて密かに寄せる思慕　藤井寺市　高田美代子
実直な人で中々笑わない
肩ぐるま少し遠くも見ろという
荒馬に乗ってみようという強気
浮き雲よ私をのせてくれないか　尼崎市　野瀬昌子
亡父眠る島の戦史を読んでいる（硫黄島にて　四句）
想い出を語り合ってる慰霊団
嗚呼亡父よやっときました遙々と
壕の前まだ湯気のぼる骨拾う　尼崎市　山本すみ
懐かしい顔に出くわす葬儀の日
追及が深くて城が崩れ出し
お年頃笑い袋が負けている
殿方も三人寄れば姦しい

周波数合せてみたい人がいる
大都会の夢に疲れた磯育ち
筆まめな人の便りが来ぬ不安
快い刺激が欲しいコンパクト

尼崎市　長浜澄子

少年A反抗している黙秘権
イメージが古里に似て好きな街
悪知恵が一番先に顔を出し
熱心にパズル覚えた三歳児

岡山県　伏見すみれ

一気のみしてゆっくりとマイク取る
デッサンのままで終った子育て記
接点を求めドングリまだ走り
立ち読みで合点したが皆忘れ

広島市　森田文

一言で山をはずしたタイミング
連休に遊びを知らぬ身の置き場
人間の愚かさ武器を手放さず
マニュアルの通りに生きて味がない

熊本市　黒田緑

パン焼き器出端くじいた朝の膳
お得意の嫁の料理が胃にもたれ
おとなりの芝生にもいた青ガエル
冷静を欠いた受話器の傷のあと

富山市　大西桂子

後継いで知らない先祖多過ぎる
空腹になる時がない冷蔵庫
ベレー帽とステッキあれば日が送れ
ぜいたくを突かれて嫁の無言劇

酒田市　永澤裕子

お盆行事嫁に教えて世を渡す
墓碑洗う親しみがわく先祖様
欲しかった余裕ゆっくり爪を切る
もう少しゆとりが欲しい夏椿

島根県　槻谷一葉

本当の事をポツンと聞かされる
海の絵が画きたくなった夏帽子
売り声は竿の長さほど響き
ニュース速報みんな知ってる拍子抜け

大阪市　勢理客トミ子

細腕で小舟を守る束ね髪
ドライフラワー花の命を封じ込め
風紋の中に素足で立ちつくす
庭の花　花屋で値段見て帰り

西宮市　菊池トミエ

眼薬をさして真意が見えてこず
職退いてせみの述懐聞いている
ほほの肉弛んで世事に疎くなる
青春はたしかにあったせみの声

西宮市　岡本道子

尼崎市　山田保蔵

馬券にも損失補てんあればよい
新入生望みも高いが背も高い
ありがたい気遣うもののないくらし
出血サービス　パチンコ　スーパー稼いでる

香川県　永峰伽名子

夏休み財布の中味チト淋し
夏休みいい思い出を持たせたい
亡き姉の忘れ形見も我が子のうち
色即是空つれ添ってから四十余年

寝屋川市　宮崎菜月

ちょっと暇あれば花壇へ屈み込み
齢のせい紫かよう花が好き
海に船　天には雲の通う道
亡父の励ます風が背中より

枚方市　中山おさむ

形容詞要らぬ運動靴を履く
驟雨一過こだわり捨てるなだら坂
歯車を外してからのしたたかさ
超ミニに慣れて今年の夏終る

羽曳野市　芦田絢子

入院の嫁に息子が見直され
円満に収める酒でまたもめる
ハネムーンより羨しフルムーン
ハイビスカスの赤が謀反をそそのかす

熊本県　高野宵草

用件が済めば男は切る電話
特選というのがいちばん解らぬ絵
空き缶を凸凹にする応援歌
長椅子で貧乏ゆすりひとり居る

姫路市　松本一郎

限界は四キロ示す万歩計
言い返す言葉を溜める喉仏
うそーほんと何時まで続く娘の電話
親思いやさしい子ですフルムーン

佐賀市　江口万亀子

数珠片手　仏壇の蟻皆殺す
ドーナツのように目立ったイヤリング
花ほめて種の予約もして帰る
しまい風呂ぼんやり蛙の声を聞く

貝塚市　池田寿美子

それなりにウソは素敵な調味料
先頭を走らないから長持ちす
許されても忘れられない事がある
ちょっと動けば諭吉に羽が生えて行く

尼崎市　井崎ミサ子

さり気ない助言うれしい友を持つ
青信号子犬サッサと渡ってる
新幹線の窓をたたいたすごい雨
娘の話題さけて口笛吹いてみる

尼崎市　鈴木良征

とりあえず座蒲団だけは出してある
酸いも甘いも知ってる父の黙秘権
プライドを捨てた男の回り道
満ち足りて余韻の残るけだるさよ

奈良市　米田芳子

どしゃ降りの釧路空港旅初日
酔い止めで釧路湿原夢の中
三姉妹きどりで娘らと北の旅
朝顔が咲いて植えたを思い出し

東予市　小山悠泉

騙される度女利口になって行く
そっとして欲しい遺族へ来るマイク
ナイターの楽しみを消す雨の音
生き残り賭けて二足の草鞋履く

尼崎市　湊修水

普賢岳思えばなんの三十五度
両花田追うギャルたちも玉の汗
憧れた賢兄いまは鼻につき
センセにもキナ臭いのが居るらしい

青森県　福士トキ

おばあちゃんも夢があります孫と旅
もぎたてのトマトにかぶりつく帰省
故里がまぶたにうつる遠花火
ききょう咲く庭に帰った安心感

寝屋川市　井上すみれ

部屋ごとのテレビそれぞれ世代見る
信州の夏で都会の秋を待つ
霧ヶ峰さすが霧が出入りする
裸足になってふる里たしかめる

尼崎市　明壁敏之

そっくりな双子先生困らせる
長雨にでんでん虫も同居する
風土記が好きで途中下車をする
夕立で街の灯が浮き上がる

尼崎市　吉永伊三郎

公園に宵待草の雨が降る
手を振って保津峡上り下りする
円満に話がついて開く襖
花名刺微笑を添えて差し出され

尼崎市　佐野六浦

君が代を歌う涙の金メダル
円満な家庭へ打てぬ錆びた釘
三部経終り正座へ立てぬ足
ナポレオン瓶へ一輪差した部屋

京都市　小林英子

娘と孫と川の字に寝る里帰り
愛の目で見る世の中は美しい
人情もお湯も溢れる町の風呂
早く来たバスあっけないお別れに

旭川市　朝倉大柏

笑ってるうちに逃げ道ふさがれる
頂上が見えて足並み揃い出し
脇役の肩の軽さもループタイ

新潟県　高野不二

自販機が心のこもらぬ礼を言う
あっさりと別れて帰り長電話
中流の暮しと自分だけ思う

尼崎市　中澤向西

雨空を今日も見上げる妻の愚痴
やさしいがよくも我慢をしたもんだ
褒められてもう一丁頑張ろう

堺市　桜井荘次

補聴器が座り直して聞く話
目立ちたがりやが退屈そうに欠伸する
食欲の秋へ謀叛のダイエット

今治市　渡辺南奉

左利き直すと個性萎縮する
呆けたらあかん赤いネクタイまだ似合う
厳しさが好きで自分を酷使する

大阪市　亀井円女

幸せを山程くれた犬が逝く（愛犬の死　二句）
柩からあふれる程に百合や菊
亡母さんはヘチマコロンが好きでした

大阪市　新井泰子

とりあえず列につながる軽い籠
レシートに花の名ひとつメモをする
花嫁の父一段と寡黙なり

佐賀市　古川一徳

四季のないハウスの花にある吐息
お返しが宅配便でとんでくる
目立たない人で小金は溜めている

熊本市　北川一進

体重計少し気になる針の位置
盛皿の多い方から孫の手が
耳だけはやたらと皮肉入って来

和歌山市　堀畑靖子

これからも縁ないでしょう株ダイヤ
優等生がまた説教をしてくれる
朝起きてすぐに辞表を書いている

米子市　木村はるえ

王様が二人居るのでよく揉める
部屋毎に時計違った時を告げ
反論が出てから会も活気づく

和歌山市　山田博章

いこかもどろか向こうの辻に鬼がいる
流れに足浸せばメダカ追った日々
子の傷の訳は聞かないことにする

東大阪市　安永暁子

なつかしい笑顔が出合う墓参り
帰る足重たい土産苦にならず
相乗りのはずかしうれし人力車（倉敷にて）

池田市　水木博男

あとつぎが無くても籠屋籠を編む
誤算なり辞表すんなり受理されて
惚れているとは書けないが賀状出し

兵庫県　奥野テル

マッチ擦る音だけ静か仏間の灯
軽口をきいたばかりに的にされ
別れ道また逢う辻のお地蔵さん

鳥取県　石谷美恵子

もう逢えぬひとが砂丘の点になる
味のある意見は塩も利いている
住み慣れて村のしきたり苦にならず

米子市　小塩智加恵

ハンバーグ夫が好きとは知らなんだ
お人よしおにぎりいつも丸くなる
日やけした夏帽子なら顔に合う

鳴門市　八木芳水

お墓から父の意見はまた同じ
捨て石がもの言う時をじっと待ち
告白の出来ぬ心で旅に立つ

香川県　田中ふみ

借り住まい壁に耳あり内緒ごと
雰囲気に酔って笑顔のポンポコリン
心地よく音頭にのせて浮かれてる

和歌山市　田中みね

餞の言葉も濡れて娘が嫁ぐ
出任せの口が波風起こさせる
秘め事は苦手な花よ鳳仙花

堺市　船越重子

散歩道秋を見つけた赤とんぼ
からす鳴くなんの合図か気にかかる
亡夫とのかけ橋夢がしてくれる

泉佐野市　真崎浪速子

言訳もすらすらすらと夜の蝶
柱時計に母の歴史を守る音
濡れるのは承知相合傘で行く

河内長野市　大西文次

いつ死んでもよいと言うのが煙草やめ
遺言をする決心が未だつかず
いろいろと気を使うこと多過ぎる

枚方市　濱田良知

欲の皮突っぱり過ぎてツキ逃がす
いい奴と言われ続けていて貧し
結論を急ぎ足許見透かされ

静岡市　片平静代

不仕合わせ続き合掌ばかりする
出不精の夫を連れ出す敬老日
農道へベンツが止まる農繁期

十和田市　阿部喜久江

友という資産ばかりがたんとある
立ち入りの出来ぬ芝生が広げられ
門構え程でないのが暮らし向き

熊本市　遠山夏生

塵を焼く煙サンマを焼く煙
蜩に急き立てられてはや残暑
老い悲し本を開けば眠気差す

和歌山市　山口三千子

本心を聞かされ負けたなと思う
父逝きて実家の空気入れ変り
連れていたひとが視野から離れない

松江市　安食友子

ウインドー税がちらっとかすめたが
つむじ風心の隅に持っている
デスマスク国会だけは睨めつけ

香川県　成重放任

白衣着た天使ドアを足でけり
昨日まで上げ膳据え膳今駅弁
知らぬ振りしても悟った妻の勘

香川県　川崎ひかり

橋一つ出来て故郷の灯が近い
助手席が私の似合いの座り場所
手の平を返したような風に逢う

高槻市　芦田静江

亡母の石積んで化野たそがれる
駐車場のヒマワリ夏を謳歌する
満ち足りて無言が挑むタラバ蟹

島根県　兒玉幸子

夏祭り神楽見たさの肩車
盆が来てお地蔵さんも化粧され
先生も見違える程日焼け顔

島根県　菅田かつ子

つゆ草もわたしも朝の陽活きいきと
ババロアがガラスの器に拗ねてみせ
欲しくないされどバーゲン見逃さず

兵庫県　酒井靖子

私にもこんなに味方居てくれる
脱線へ妬く人もない影法師
愛の輪を教えてくれた雑魚の群

枚方市　森本節子

不意打ちに朝のひとときひよの声
どこへでも犬の行く道お供する
貴船の宮水占いにさんざめく

夏雲に胸躍らせた少年期　唐津市　福島紀一

夏木立　奥に古刹の古い屋根
デッドボール複雑な顔で一塁へ　岡山県　土居ひでの

迎え火へ螢一匹ついて来る
老母の眼が少し癒えたら逢いに行く
孫の掌を交互に握る老母無言　岡山市　中嶋千恵子

一坪の庭にもあった主義主張
かすかだが逢うた記憶をたぐりよせ
片ちびの独楽で狂うてばかりいる　広島県　森川抜智

裸婦の絵も三十五度では暑かろう
いい夏だまたビール券とどいたよ
夕立のさ中弔電打つ電話　茨木市　藤井正雄

年金のくらしは猫の知らぬこと
晩酌のあとのひと寝にある安堵
横顔も撮れと女の自尊心　芦屋市　黒田能子

助手席におしゃべり好きが乗っている
思案する足許にある水溜り
再三の叱咤に踏み出した一歩　藤井寺市　田中孝子

残照を幸せそうに赤トンボ
コスモスの揺れて挽歌の風の音
黄昏の道をいざなう水煙抄　今治市　和田宏

総務課のロッカーネクタイ白と黒
ＯＬの欠伸よっぽどだと思う
裏の部屋電気を灯けて留守にする　八尾市　秦正子

倒産の柱支えたお針箱
粗大ゴミ働き蜂のなれの果て
暑いからなるべくボーとしています　唐津市　浜本治幸

鯛焼きの匂いに財布口を開け
ストレスを吐き出している縄のれん
一休み煙草の量が多過ぎる　鳥取県　浜田民子

如才なく泳ぎ嫉妬の目で見られ
結論がまだ出ぬ梨の皮をむく
街角で人相書きの顔と逢う　出雲市　島重昭

筆乗りのかすれがほしい夫婦愛
締切日キリトリ線が追いかける
業績のめっぽう多い弔辞読む

昼寝する夏は涼しいガード下
隣との不仲は犬も知っている
暑がりの蛇が昼寝の木に登る

大阪市　山北　三三三

思い出は何時も何処かに亡母が居る
また来るよ孫の声だけ耳にある
家計簿の要らぬ世帯へ子は育ち

大阪市　乾　哲静

被災地を見舞う陛下の腕捲り
蛇が居た帰り気を病む過疎の道
静岡の叔母さんと呼ぶ孫があり

静岡市　永倉柳華

耳たぶに残る言葉がほろ苦い
いらだちが煙草の数をもみ消して
たとう紙へにじむ涙にまた咽ぶ

静岡市　宇佐美寿美

確認をすればうるさい人とされ
認められやる気になった子の瞳
肩書がとれて自由な朝の幸

静岡市　増田扶美

国が富みぼろぼろ悪事飛び出した
リンダちゃん困っちゃうなと復活し
ご好意が少し重荷になってくる

静岡市　小木久子

遠慮して同居は早く寝るとする
海へ来て大きな虹に声をあげ
寝不足になってキャンプから帰り

守口市　森川春子

よく叩く先生だった若かった
一つずつ忘れて背中丸くなる
新聞を大きく広げ留守ひとり

香川県　田中スミエ

子の夢に托した親のエゴイズム
女房の一言放射能より恐い
手術痕　手柄のように見せ回り

広島市　中村要

しじみ汁帰省の子等に懐かしく
柿の実がことんと屋根に転がって
同じ柄着ている人がエレベーター

松江市　佐野木みえ

米寿をめざして励む八十路坂
貴花田相撲ファンの層を変え
弱音入れ暑中見舞の顔を出し

熊本県　増田一乗

台風一過ひと目盛りだけ暑さ下げ
笑い袋妻がさげてて家平和
珍しい花へ散歩の時間くい

今治市　越智青園

鳥取県　小西五十鈴

文化とはガラスの鍋で煮炊きする
寝て待ってみたが果報は向いて来ず
眠れぬ夜衛星放送みてすごす

鳥取県　山本正光

妻はよき日曜大工の弟子となり
一人寝に同居の猫が鼻なめた
雨垂れは小言並べて落ちつづけ

豊中市　松岡久留美

喜寿迎え時の流れをふり返る
捨て犬の目が哀しみを投げてくる
五葉の松登城の武士の夢の跡

岡山県　富坂志重

夕暮の公園ブランコ子供にゆずりうけ
苦しみも悲しみもそっと米とぐ母
虫干しで亡夫の七回忌しのぶ

伊丹市　小熊江美

ポーズしても老女かくせぬ三面鏡
マイホーム個室あるのは子供達
電車中叱りたい子が居て困る

香川県　工藤吟笑

薬にも毒にもならず八十の春
民宿で同じ訛りが相寝する
口下手で背の格好が親ゆずり

奈良市　井上大

貴花田過熱人気に潰されず
悪いことまでも大きな大企業
選手よりファンが燃えてるタイガース

今治市　渡邊伊津志

生活のリズムになった口喧嘩
甚平を着た爺さんは愛想良し
御近所の通夜に風鈴みな外す

静岡市　大石たき

憂さ晴らしうまい物でも食べましょう
死にたいと言って三度の飯を食べ
久し振り亡夫に逢える夢の中

（前月分）　寝屋川市　北岡波留吉

弱音など吐かぬとわかる父の靴
風向きが変り財布しまっとく
夫をとりこに飲み明かしてる里の父

芦屋市　根来敬

シナリオを書き終えるのもあと少し
古傷がたまったままの自分史で
難点があってそこそこ顔がきき

大阪市　今西静子

京ことばぎくりと痛いことを言う
待ち人の来ず受付が落着かず
連日の暑さに犬も無表情

犬連れて犬の目で見る市場籠　京都市　山海友熙

逢えぬのに逢いたい辰巳橋通る

上る下るを嫁に教える京都弁　和歌山市　木村親跡

半分に分けた遺産がまたこじれ

湯上がりのかすか匂いに振りかえる

化けて出るつもりだ遺書は書かないぞ　松江市　松浦登志子

熟通い少年野球は人不足

家事すませ出かけてしまえばオホホのホ

娘ぐ娘に正座で話すこともなし　岡山県　福原辰江

力んでも女の知恵の空回り

ちょっとだけ足して母のかくし味

一杯のコーヒー話のつきぬ二人　鳥取県　鈴木公弘

鉛筆と昼寝している夏休み

友だちが戻って弾む盆おどり

目でサイン出して祭りの輪を抜ける　米子市　中井ゆき

さよならをした子の顔がぼけて消え

まっすぐな気性で時々孤独ぐせ

大吉は面映いので結んどく

残り火をどう生きようか辞書を繰る　兵庫県　西井つや子

適当に散らかっている温かさ

もう一度ふり向いて欲しい息子の背　岡山県　牧野秀香

不動明王滝に打たれて法を説き

風鈴の音色やすらぐ昼の夢

スダレ越し朝の輝き流れ入る　姫路市　谷清柳

せめてもの情けと肩を叩かれる

夏はみな美人に見えるサングラス

夏ばての夫へかば焼きまむし酒　富田林市　山原昭水

先生に会って背筋が伸びました

国語辞典鞄に入れて出勤し

テントウ虫手のひらにのせ幸せだ　相生市　中塚礎石

上人の話は地獄へは行かぬ

旅に出す鞄に家の鍵を入れ

バス待ちでバブル経済耳にする　吹田市　西岡豊

老いの趣味初心貫く鬼となる

第二部の奇想天外度胆抜く

路地裏で半端同士のいい笑顔

病院に待つ身の長い吐息です
ネジ巻きの時計が疲れた音で鳴り
閉め際に行けば役所はしぶい顔

島根県　武島ちよえ

伸びたなと児の爪を切る午後の父
深々と婿殿に礼する老父
涼しくて物足らぬ日の甲子園

大阪市　吉川哲夫

枢にはマージャン牌をと笑わせる
大袈裟にわざと咳する風邪の夫
夕立後美味しい風が顔撫でる

姫路市　福本好花

無器用な夫と照る日も曇る日も
どこまでも嘘を通してほしかった
洗い髪匂う女と茶をすすり

鳥取県　中西智恵子

久々に帰郷家族と窓の月
しとしとと一人も居ない停留所
お互いに笑い話の過去がある

松江市　浦辺静江

躾糸切れて乱れる裾さばき
老いてまだチャン付で呼ぶ町内会
ライバルへ返したジョークの裏に棘

神戸市　岩田信義

仏前で愚痴れば亡妻が笑うだろ
長生きをしすぎたなんて老いの嘘
虫籠の中に明るくお月様

唐津市　入江喜久亭

悪玉はすぐ名も顔も覚えられ
巡り来たあの日も矢張り暑かった
句作りと釣りと麻雀呆けられず

唐津市　野田旭恒

老後と死後の話になる姉妹
絵葉書の文字が楽しさ伝えくる
夏ですねどこかで花火上ってる

唐津市　山口ふさ子

仏壇からほのかに匂うまくわ瓜
いい昼寝でした時計が二時を打つ
通院のバス駅名をみなおぼえ

島根県　今川三津江

声高になる年寄りの電話口
ワンカップでよい顔になる老い集う
風鈴のゆっくり揺れて秋のぞく

静岡市　中西雅

咲く花の笑顔包んでいる蕾
核家族困った時は故郷の母
家康の遺訓頷く歳となり

静岡市　大村正雄

思慕ひとつ胸に抱いて墓洗う　岡山県　福原悦子

風船の軽さに託す夢がある　岡山県　大石あすなろ

大吉と出るまでみくじ引くつもり
むすび目がちょっとほどけて仲直り　鳥取県　谷口百合子

肌を刺す冷い月と語り合う
丸い月親子についてきたキャンプ　岡山県　後安ふさえ

苔寺の味わい一入梅雨の時期
伊勢志摩の海女と写して旅土産　富山市　島ひかる

薬にも毒にも変わる母の愛
木杓子とちびたすりこぎ母の味　静岡市　浅子まつゑ

サンプルで足りる年寄り化粧品
階段の手すりどこでも頼りにし　静岡市　柳沢たま

精一杯生きて悔いなき八十七
一言が多くて溝を深くする　大阪市　武田昌三

東の間の香水匂うエレベーター
下克上土俵に若い波寄せる　東京都　山口新子

一日を終えたら座る四畳半
スケジュール表覗いてからが胸騒ぎ　羽曳野市　徳山みつこ

投げた球息子にまっすぐ届かない
合鍵にちょっときしみのきた夫婦　東大阪市　大平太一郎

逝く友にただ黙黙と休肝日
囲まれてビールが旨い夏まつり　鳥取県　美浦美代子

秒読みになっても勝つと信じてる
一ランク落す受験で親が泣き　鳥取県　山内芳江

忘れたい事があるから酔いに行く
気の長い話漢方薬を飲む　宇部市　中村三良

良い記事はなぜか小さく載せたがる
逃げ道を決めて度胸がついてくる　鳥取市　中居武士

年輪がもの言う芸の渋さあり
洗うにもこれが一枚後がない　橿原市　西本保夫

飲まぬのにワイングラスが二つある
年金の暮しで上司面をされ

よく喋る妻でニュースを聞きそびれ　静岡市　青柳金吾

雑草を繁らせ億という田圃　西宮市　平田香子

乾杯を煮え湯と思う時もある
踊る足もつれ淋しい古希近し　岡山県　江口有一朗

体験という宝物に陽を当てる
諦める前にも一度考える　和歌山県　三原三究

妥協せぬつもりが妥協して帰り
熱心な一人が会を引き締める　大阪市　清水絹子

料理本片手に嫁の焼きなすび
もう一度子育てしたい紙おしめ　兵庫県　北川とみ子

母の忌に素直に泣けぬ鬼がいる
ふりすぎの尻尾に油断してしまう　兵庫県　倉垣恵美

冷奴つるりつるりと胃に落ちる
神さまのいたずらにする日はうらら　鳥取県　今本早苗

真直ぐに歩いて転ぶこともある
平凡に平凡に生き幸せだ　豊中市　井上直次

主流からそれたおかげで楽に生き
若返ろうちょっと高価な化粧品　泉南市　坂根流水

親と子がこうも似るのか恐ろしい
一人旅　気楽のようで気をつかい　出雲市　富田蘭水

心までかびくさくなる夏低温
しあわせに落とすポストの大安日　八尾市　向井しづ子

電照菊のように鈴虫鳴く七月
周辺のうねりが寄せて老いた吾　和歌山市　吉田武治

カルチャーへ退屈の虫置いてくる
口下手をおじぎぺこぺこ切り抜ける　池田市　木村一笛

嬉々としてチビッ子走る蟬時雨
この道は歴史が匂う城下町　池田市　岡本吉太郎

宅配で母子のきずないつまでも
妻無口何かあるなとどきどきと　羽曳野市　山本たけし

あれこれと器用な父は欲知らず
ただごとでないど五日も拗ねた妻

近頃の金の話は億ばかり　大阪市　川原章久

泥の手をかざす視線に夏つばめ　鳥取市　加藤二代

水虫に生まれお好きな人に棲む

一粒の愛を育てる女です　寝屋川市　豊福路子

うわさしているとき届くお中元

疑惑もつ子の行く末が案じられ　八戸市　島田昭治

屁理くつをならべて孫の反抗期

ゴマ摺りが裏で上司を馬鹿よばわり　島根県　福間博利

毛糸あむうちにストレスすうっと消え

強奪の三億今なら小銭だね　唐津市　山門幸夫

梅雨上り点滴帰りの妻を待つ

夜来香ビルマの戦友が偲ばれる　豊中市　田中道胤

鍵掛けて砦にこもる反抗期

秋田小町名前に惚れて買うお米　箕面市　岩津ようじ

身に覚えない人ばかり補てん受け

明日は死ぬ蟬もいように蟬時雨　富田林市　浦田トシエ

六十を過ぎても恋しい故郷よ

ああお盆読経の声の高らかに　藤井寺市　菊地繁男

ホーマーにコップのビール溢れ出し

膝の猫そっと下ろしてひそひそと　大阪市　平手露芳

淀川の水で垢抜け何でやねん

故郷は何処やとトンボに聞いてみる　神戸市　木村貴代子

雨の中恩師の訃報ぬれて来る

浴衣縫う母の手許をせかせる目　鳥取市　谷口侑里

里帰りパンクする程米もらう

ボリュームをおとし二人で踊りましょ　大阪市　森崎忠禄

それにしても良く膨れてた株の泡

その昔闇屋今様大商社　東大阪市　松山隆

汗の玉峠のラムネ青い味

初対面　互いに訛り親しめる　姫路市　福島姫女

馬の目の優しさに乗る山の馬車

未来への架け橋ロマン満載し（ベイブリッジ）

寝屋川市　坂上高栄
道成寺絵説きに聞き入る蟬の声
ばあちゃんもまんざらでない知恵袋

岡山県　後安江山
泥沼に生きて美しハスの花
親と子の触れ合い楽し夏休み

姫路市　服部一典
樟脳を効かせたつもり娘の晴着
初デート白いパラソルくるくると

姫路市　山崎治夢
ゼンマイを巻かれたように街動く
あのバスが行き着く里の女想う

豊中市　みきわきみ
LPのロシア民謡出してきく
趣味多彩師にめぐまれて物ずきで

香川県　植田チカエ
風鈴の音も聞えて盆提灯
急死の母に叫ぶがごとく手を合わせ

寝屋川市　太田俊子
秘めごとを胸にしっかり袋帯
破りすてた書の一片が手に残る

兵庫県　中野とよ子
年輪がもの言う年で一人いる
やすらぎを求め念仏あげている

鳥取県　近藤秋星
面白いようにすらすら嘘が言え
小便がよく出るようになって秋

大阪市　尾崎黄紅
医者は延命策患者は金策
ある破局シャツに口紅付いていた

島根県　松本聖子
初盆の蝶々あれは亡姉かしら
ゴミ袋破れ家庭を覗かれる

寝屋川市　北岡波留吉
運転手が責任重い縄電車
素顔見せやっと財布の紐ゆるめ

岡山県　杉本伊久栄
生きている証美味しい缶ビール
大正の母で意見も食違い

米子市　服部朗子
柔らかいタッチに老母が満たされる
まろやかな遺墨何時でも逢える亡母

明石市　小川酔月
七色の夢をみていた若い頃
思い出の旅にしました初夏の風

静岡市　三浦つね
乱筆を何時も知ってる筆の先
日銭追う暮らしに今日も憎い雨

白足袋は冠婚葬祭だけの用　泉佐野市　大工静子

道づれを約せし筈がほっとかれ　大阪市　家村高雄

叩かれて値ぶみされてる西瓜市

バスツアー男一人で息苦し　和歌山県　上岡正直

男だけ粗大ゴミとバカにされ

草刈のあとの匂いに草の精　大阪市　小糸昭子

牛啼いて待ちくたびれるギャル御輿

ウインドに他人の顔が行き過ぎる　島根県　岩田三和

時としてエンジンブレーキきかす役

お祭によばれ家宝の皿ならぶ　富田林市　加藤みつえ

つゆは明けたがまあ暑いこと暑いこと

こう暑くては街路樹も水ほしかろに　池田市　林すて

喜んで若い夫婦は外国へ

面倒な事も気軽にお人好し　唐津市　野崎ハル

明日は晴精一杯に生きる今日

法被着て御輿かついだお祭り子

梅雨明けて満艦飾の団地街　唐津市　山門幸夫

クール便谷川岳のロースハム

正札のままで疲れる女です　兵庫県　玉田三重

口元が仕事よりもよく動く

玉弾く音懐かしい算盤塾　大阪市　喜多佐津乃

成人の子叱るに父の名は有効

◈ジュニアの部

一年生持ってあげたいランドセル　香川県　小四　田中菜実子

一円もたまればゆめとなる時が

富田林市民文化祭

とき　**11月3日**(祝)午前11時開場

ところ　富田林市スバルホール
(近鉄南大阪線川西駅下車すぐ)

兼題　「時代」「あこがれ」「素敵」「プラス」「顔色」
選者は、当日出席者の中から決めさせていただきます。
(各題2句・席題なし)

締切　午後1時(欠席投句拝辞)

会費　無料(軽食を用意します)

主催
富田林市教育委員会

後援
富柳会

—同人吟

秀句鑑賞

—9月号から

奥田　みつ子

川柳の範囲は広い。いろいろな表現、傾向があるからこそ面白いと思っている。今回はユーモラスな句に焦点を当ててみた。

気がねして中座の席に忘れもの

高橋　千万子

場景が目に浮かぶ。周りの人々の迷惑にならぬよう、そっと座をはずしたのに、大事な物を置いてきてしまった。今更、取りに帰るわけにゆかず、かと言って…。

どんぐりに目鼻がついている仲間
極楽のキャンセル待ちでまだ死ねぬ

舟渡　杏花

「どんぐりの背くらべ」に目鼻がついているという、何とも楽しい表現に拍手。こんな嬉しい仲間に囲まれておれば、ますます、元気に若々しく、長生きできることは確か。また、極楽のキャンセル待ちがあるとは知らなかったが、これは大いに利用したいもの。

したいこと有りすぎ今日は病院へ

田中　紀美代

したいことたくさんあってまず昼寝

松本　文子

あれもこれも、したいことばかり。でもそのためには、まず健康でなければ…。健康診断も必要、英気を養うためには、睡眠も充分にとらなければならない。

婆さんと呼ぶ初恋と暮らしてる
初物の風邪もあなたへさし上げる

新　正子

このお二人の睦まじさ、お若い正子さんを婆さんとは、なんと失礼なと思うのは他人。初恋のままゴールインした二人なら、婆さんも愛称に。だから風邪でも、初物ならば、まずあなたへさし上げたくなる。

冷奴きょうもお相手つかまつる

福井　桂香

同じ冷奴でも、「お相手つかまつる」となれば、今日も明日も明後日でも平気なのだ。冷奴としても本望だろう。

病んでいる学術名が立派すぎ

吉田　あずき

単なる風邪、腰痛などと思っていたら、カルテには長々と、むずかしい病名が書いてある。誇らしいような、怖いような。

茹でられてグラムになった蛸の足

寺田　裕美

これは主婦でなければ作れない句。蛸のイメージと、グラムとは程遠い。けれど、実際スーパーなどではグラム売りされている。そこはかとないペーソスさえ漂う。

小綺麗に咲かしています姥桜

松本　今日子

展覧会、音楽会、レストラン、観光地、どこへ行っても美しい熟女たちが溢れている。平和だな、楽しそうだなと思いつつ、時には内心忸怩たるものも。

綿飴を食べると顔が口になる

相馬　一花

綿飴はおちょぼ口では食べられない。「顔が口になる」の表現に惹かれる。

不覚にも夫婦喧嘩を妻に勝ち

野村　静雄

まさに「不覚にも」である。後の怖さを忘れていたわけではないが、つい理屈を言ってやりこめてしまった。ああ！

終電が去り山の駅山に溶け

薗田　獏沓

最後にユーモラスな句ではないが、山の鉄道を職場とする人の詩情溢れる佳吟。ともにじっくりと味わいたい。

—水煙抄

秀句鑑賞

—9月号から

片上明水

素足から土の温もりもろて来る

円増純子

自然界からさえも温もりを頂くことが次第に減ってゆく時代で寂しい限り。でも自然界から受ける温情には差別がなくて、すべてのものを温かく包んでくれます。地元の関係で四国八十八ヶ所札所を折々回りますが、巡礼の途次に触れる温情が有難くて続けています。

同じ夢見て幸せに暮らしてる

大角幸代

ご夫婦で同じ夢を抱かれるご家庭は全体の約一割とか。共通の夢を持たれることよりもおふたりが夢の実現に協力されることが、より日々の家庭生活を充実される因となり、幸福の花が大きく咲くのだと思います。

編隊が健在里の赤トンボ

白石春嶺

編隊で想い出すのは、散兵壕に伏した頭上をB29やグラマンが堂々の編隊を組んで過ぎると、その後を日の丸機がただ一機で追っていく光景である。

全国名水百選入選の水清く、自然に恵まれ、果てしない青空のわたしのまちも、近頃はすっかり赤トンボの編隊にはお目にかかれなくなりましたが、作者の里の赤トンボの編隊は美しい住人の心根が育てたものだと敬服しています。

満ち潮を見ている欲のない背中

大橋政良

背中はその人柄を物語るとか、他人のチャンスを平気で横取りするご時世に、自身の足許まで来た絶好のチャンスには目もくれず、「どなたでも、チャンスがご入用の方はどうぞ」と、こんな大物に一度逢ってみたい感じです。

少々は酒もたしなむ良い羊

藤井高子

人生相談欄ではお目にかかれぬ素晴らしいご伴侶。私の世代には男に三つの道楽がありまして、その一つが酒ですが、そのお酒もたしなまれる程度とか、世間にはわたしのような者が殆どだと思っていましたが、こんな理想的なお方もいらっしゃることを知りました。私にとっては気の付くのが遅すぎました。

ロボットにある筈がない恋心

大川幸子

昔、同じ職場にロボットが顔負けする仕事虫の男が居ました。私達は彼を変人だと思い込んでいたところ、いつの間にか社内の羨望の的の美女と猛烈な恋をして、アレヨアレヨと言ってる間に結婚しました。ロボット的な人間を決して侮るべからず。

雨しきり雨の遊びを考える

足立由美子

ご時世がなんでも儲け主義とかに移り、個々の日常生活も小さな規格の枠型のようなものにはめ込まれての行動の繰返しに慣らされてしまった観がします。

でも、雨の日にちゃんと野球観戦ができる時代、新しい生活に即したご自身のプログラムを考えられることが是非とも必要ですね。

女にはなれても母になり切れず

岸桂子

私も「男にはなれても父になり切れず」そのように思うんです。男の歩む輪と父の歩む輪が回転の途中でよく絡むんです。絡むとすぐに元に戻らぬので閉口します。

でも、女性の方だって同じことですが、人間は本能的には一人で何役もの役割を果たす能力を神さまが与えてくれているようです。

銀河系

河内天笑選

投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へ

米子市　政岡　日枝子

蛇口から飛び散る虹の小人たち
逃げられないでまたふりだしの花時計
今はポカンとストレスの袋干す

名古屋市　藤井　高子

まあるい月の下ではかない世を想う
過労死の蟻は合図もなく果てぬ
カットグラスへ程よくそそぐ美辞麗句

鳥取県　乾　隆風

秋なすび　私も曲がるかも知れぬ
煩悩を包む晴着が干してある

米子市　八木　千代

たましいの地図を貫く川がある
絶えだえの息で夕顔咲こうとする

鳥取県　土橋　はるお

ロボットに頭ごなしにされ出した
おにぎり包んだ新聞を読んでいる

藤井寺市　高田　美代子

自分には厳しい人でお人好し
花束のわたしはいつもかすみ草

兵庫県　遠山　可住

価値観のちがいハラハラ見てるだけ
抜擢をされてライバルからはずす

鳥取県　新家　完司

金払いの悪い男は早く死ぬ
あぶく銭使い切るまで落ちつかず

十和田市　阿部　進

工場が人手求めて移転する
情報の海に人間おぼれかけ

和歌山市　山口　三千子

化けの皮剥げそう尻が落ちつかず
不発弾捨てたら気楽かも知れず

倉吉市　渡辺　菩句

思い出いっぱいでアルバム重すぎる
目を天に向けてどこ吹く風の面

西宮市　西口　いわゑ

ワープロの文字も見捨てたものでない
積乱雲掘るると天女の城がある

米子市　沢田　千春

笑い袋ふえるとからだ軽くなる
ふんわりと私をのせる茜雲

寝屋川市　堀江　光子

満員の待合室にある孤独
この上は部品を換える他ないか

鳥取市　小谷　美っ千

人生の峠に腰を据えている
夕映えの赤トンボから秋もらう

弘前市　肥後　和香子

貴花田熱い視線も邪魔になり
真実は裏と表に一つずつ

西宮市　林　はつ絵

だし抜けに飢えが襲って樹がゆれる
少年の手紙　キリンの子が駆ける

熊本市　遠山　夏生

ここも又第二故郷となる異動
いつからか海より山を好む避暑

米子市　中井　ゆき

パトカーが先頭にいる神妙さ
新兵器人を助けることはせぬ

藤井寺市　菊地　繁男

折角のピアスへ主人振り向かず
いい月夜忘れた唄を思い出す

唐津市　仁部　四郎

魂の国へ還るか赤トンボ
秋よ秋ハンドバッグの文庫本

尼崎市　春城　年代

ままごとの茣蓙に招ばれた赤トンボ
理不尽な若さへ黙る手も覚え

大阪市　神夏磯　典子

正直に喋って波乱巻き起こし
地底まで届け八月の鎮魂歌

今治市　渡邊　伊津志
噴水の表も裏も人を待ち

大阪市　岡田　ふみ
善人が怒るとあとがひつこうて

唐津市　中村　弘
せっかちに白黒つけて狭く生き

鳥取県　江原　とみお
よう太ってはる魚屋のおかみさん

尼崎市　明壁　敏之
ネクタイを外すとぼくの顔になる

唐津市　山口　ふさ子
人の情こころ澄ますとよく聴こえ

岡山県　福原　辰江
血の絆今日は言いたいことを言う

和歌山市　山川　克子
からませた指にもいつか秋がくる

大阪市　藤田　頂留子
堅物によけいなことは言わんこと

奈良市　米田　恭昌
思案してとどのつまりがケセラセラ

倉吉市　奥谷　弘朗
うまいもの食べに行く日を決めてある

竹原市　信本　博子
愛されて飛べなくなった青い鳥

唐津市　野崎　ハル
明けた窓そこから限りなき宇宙

遺句　橋本市　岸本　木魚
おとうちゃんうちにも欲しい補てんやな

川西市　松本　ただし
ルリ色の嘘が飛び交う雑居ビル

和歌山市　田中　輝子
どうしても一足す一が解けぬ日よ

青森市　工藤　甲吉
雨二日分を洗濯機はうなり

鳥取市　春木　圭一郎
少しずつ花の思い出増えてゆく

鳥取県　石谷　美恵子
ジューと音させて夕陽が海へ落ち

千葉県　上鈴木　春枝
約束の日を軸にするカレンダー

西宮市　瀬尾　六郎太
オンザロックを楽しんだろか氷室跡

米子市　林　瑞枝
人を助けて危うく難を逃れたり

桜井市　岩本　雀踊子
過労死という死にざまをしたピエロ

尼崎市　春城　武庫坊
結び目を解くと奈落が待っている

岡山県　富坂　志重
素直さに負けて心のとげを抜く

唐津市　入江　喜久亭
老いらくの恋にめざめて髪を染め

寝屋川市　稲葉　冬葉
花活けて花の素顔に抱かれよう

鳥取市　武田　帆雀
焼鳥の匂いが好きな紙封筒

砂川市　大橋　政良
銃口を自分に向ける刹那主義

八尾市　山下　美津留
釣るはずの株にやっぱり釣られてた

和歌山市　福本　英子
他人さまに退けをとらない怠けぐせ

和歌山市　桜井　千秀
笑えないジョークが胸につき刺さる

京都市　松川　杜的
楽団の一人は楽譜めくる役

有田市　生馬　芙美子
夏バテへひと切れ赤い唐辛子

有田市　松井　かなめ
言葉のはしに一寸本音がうかがえる

和歌山市　後藤　正子
気がかりなボタンを忘れたりしない

鳥取県　土橋　螢
終着駅が近くなる怖くなる

兵庫県　奥野　テル
頼りない言葉に念を押す握手

寝屋川市　岸野　あやめ
三Kを買って出たとは阿呆やなあ

西宮市　奥田　みつ子
熟年の恋の炎は白くなる

黒石市　相馬　一花
化粧して逝くのでエンマどぎまぎし

岡山県　山本　玉恵
六道の辻で未練がまだ断てぬ

広島市　中村　要
玄関を出ると娘は他人めき

鳥取市　谷口　百合子
誠実な夫と居ると肩が凝る

米子市　白根　ふみ
おばあちゃんを大きく描いたクレヨン画

羽曳野市　芦田　絢子
不整脈ひとりの夜が怖くなる

羽曳野市　田中　透太
泣き癖がつかないうちに別れよう

岡山県　小林　妻子
子供との絵がくい違いばかりする

静岡市　柳沢　たま
米寿まだお洒落な祖母のイヤリング

鳥取県　西川　和子
青い月ボクを詩人にしてくれる

岡山県　土居　ひでの
血の色に咲いて哀しい花魁草

大阪市　今西　静子
極楽にいると信じている木魚

米子市　石垣　花子
ピカソの絵あなた本気でほめますか

大阪府　籾山　隆
割り勘を暗算してる隅の席

八尾市　片上　英一
夏の宵スターダストを聴くグラス

鳥取県　西原　艶子
恋という形の行をしています

藤井寺市　中島　志洋
ロンドンの霧吹き払う触れ太鼓

広島市　田村　新造
ふるさとの局小包で虫を売り

羽曳野市　徳山　みつこ
STARTへ束の間の握手でないように

姫路市　大原　葉香
青空の広さ落書きしたくなる

大阪市　桝本　露児
海を見るふと快感がつき上がる

岡山県　江口　有一朗
ワープロを指に教えて惚け防止

和歌山市　牛尾　緑良
吊り皮につるす男の余命表

大阪府　深日　白光子
待合政治信じたくない言葉です

米子市　茂理　高代
一病をもらい人生変えてみる

米子市　林　荒介
水替えて一つ一つと計を洗う

羽曳野市　吉川　寿美
流れ弾に当って人間臭くなり

芦屋市　根来　敬
価値観の差で何となくケリがつき

岡山県　池田　半仙
消費税小銭が財布膨らます

兵庫県　酒井　靖子
残り火の気力で練っている構図

鳥取県　谷口　次男
カラカラに乾いた胸に水をやる

和歌山市　古久保　和子
頭全部叩いてスイカ一つ買う

鳥取県　田村　喜美子
きのこ雲十二の夏を忘れない

高知県　小澤　幸泉
なにごともなく暮れていく終戦日

鳥取県　上田　俊路
人形の目から女の業こぼれ

豊中市　田中　正坊
おもひでぽろぽろ八月十五日

鳥取市　美田　旋風
孝行もゆっくり出来る長寿国

大阪市　松尾　柳右子
山の頂　煩悩一時休止する

西宮市　門谷　たず子
揺れ止まぬ橋を渡って逢いにゆく

鳥取市　鈴木　公弘
飲み屋から残暑見舞と請求書

箕面市　岩津　ようじ
故郷の水スーパーで売られてる

広島市　流　奈美子
標的の面がまぶしいほど光る

今治市　矢野　佳雲
苦労人この明るさは何だろう

寝屋川市　太田　俊子
冷ややかに時代見つめて食う茶漬

仙台市　川村映輝
風車　風が止ってから意識

奈良市　井上大
大乃国綱の重さに土俵割り

唐津市　筒井朴竜
赤シャツで気張る六十路の朝を駆け

唐津市　山口高明
野蒜摘む娘に早足の雨が来る

岡山県　矢内寿恵子
シナリオが狂う旅路の幾曲り

米子市　金山夕子
あなたは偉いわたしは不良やめられぬ

豊中市　江口明光
青い目はみんな日本のカメラ持つ

八戸市　島田昭治
物欲に勝る何かを知りたくて

和歌山市　堀端三男
塩漬けが陽の目見るまで生きてやろ

和歌山市　山田高夫
五人旅一人半端な指定席

鳥取県　奥谷彩子
いつか帰る村には父の樹が繁る

高知市　北川竹萌
ビール酌み時を忘れた里訛り

守口市　結城君子
老杉を分けて貴船は木の電車

吹田市　山本希久子
祭の灯消えればもとの母ひとり

米子市　田中亜弥
下手ですが貴女が踊るなら踊る

鳥取市　林露杖
曝書して嗚呼青春の古日記

大阪市　川原章久
目刺焼く昼ガランとした魚市場

海南市　三宅保州
へそくりの額を拭くのはやめてくれ

鳥取市　美浦美代子
思い出の亡母は若くて年とらぬ

大阪市　井上白峰
サーブ権握り夫の尻叩く

静岡市　渥美弧秀
愛憎を重ね寡黙な老夫婦

姫路市　福島姫女
大物はどこかでみんな悪企み

姫路市　丁坪サワ子
ファッションの眼鏡で少しだけ美人

宝塚市　丸山よし津
名も知らぬ果物並ぶミナト神戸

岸和田市　島崎冨志子
冷たいもの平気になって総入歯

東大阪市　大平太一郎
八十路越え百を目指して万歩計

大阪市　渡部さと美
女の魔性で男立派に立ち直る

米子市　新正子
おにゃんこにしびれた僕も適齢期

兵庫県　北川とみ子
やみくもに話したい日の旅の宿

和歌山市　青枝鉄治
転勤を先に知ってたバーのママ

高槻市　川島諷云児
まだ夢に出てくる女が一人居る

鳥取市　岩原喬水
砂丘には悔いのひとつが埋めてある

香川県　木村明人
世の中のアホーを寄せる阿波踊り

大阪市　亀井円女
減俸で済ます積りか橋本さん

和歌山市　堀畑靖子
この辺で止そう働き蜂の役

今治市　渡辺南奉
ありがとう妻へ一度も言うてない

鳥取市　近藤秋星
あの時の心の振り子今も揺れ

倉吉市　最上和枝
我が砂丘草原などにさせまいぞ

姫路市　山崎治夢
七十の手習い余命表を無視

夜市川柳募集

第5回「泡」　八木　千代　10月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2－9－2
河内天笑方　堺川柳会

女性コーナー

黄香の花

小出智子選

ほっとしたのか満月が欠けていく　米子市　政岡日枝子
咲ききらぬ花を仏にさしあげる　鳥取県　西原　艶子
ぶら下って生きているのがよくわかる
通せんぼしたい更年期が来ます　和歌山市　堀畑　靖子
子をおんぶしてた私が懐かしい
夕立の方へ走って行く電車　河内長野市　植村　喜代
文机このさみしさは書くまじく　鳥取市　小谷美っ千
立秋へしりとり歌が続かない　和歌山市　西山　幸
金庫番から傾いたままの首　和歌山市　福本　英子
腹部ゆたかな裸婦とわたしの違いなど　尼崎市　春城　年代
米櫃もみたし入院覚悟する　堺市　小西　小雪
月見草　母娘は違うこと想う　大阪市　西出　楓楽
こうのとり救う植林始まりぬ　米子市　林　瑞枝
ずっしりと桃老木も逞しい　米子市　寺沢みど里
遠回しの話をはかる鯨尺　寝屋川市　太田とし子
秋の風わたしの連れにならないか　鳥取県　さえきやえ
躓いた道を忘れる筈がない　島根県　松本　文子
エスカレーター駆け上る癖まだ抜けず　堺市　桜沢あかり
生きすぎぬようにお百度ふんでいる　寝屋川市　豊福　路子

糸すじがまとわりついたままで　秋
尽日を花に埋もれて暮したし　和歌山市　桜井　千秀
亡夫の忌過ぎ去るものは美しい　和歌山市　福井　桂香
想い出に浸り迂回をしてしまう　大阪市　稲本　凡子
役どころ心得て来る里の母　和歌山市　後藤　正子
猫眠る風が通って行くのでしょう　堺市　高橋千万子
傘立てで亡父の傘がいばってる　茨木市　堀　良江
絹糸に似るしがらみがふっきれず　米子市　石垣　花子
秋風に思わせぶりな手紙書く　寝屋川市　堀江　光子
やさしい文字で冷たいことを書いてくる　和歌山市　木本　朱夏
やっと荷を一つ下ろした蟬しぐれ　西宮市　林　はつ絵
よう出来た嫁と他人が言うてくれ　和歌山市　山口三千子
風鈴がチリンと鳴っただけのこと　羽曳野市　吉川　寿美
別名を寡婦でステップ踏むことに　松原市　佐藤　奏月
シャンデリアの下で過去ばかり追う　兵庫県　倉垣　恵美
生真面目にしおり抱いてる亡父の本　八尾市　宮西　弥生
反省が白い炎となってくる　堺市　宮本かりん
どう見ても孫より美人孫の友　西宮市　奥田みつ子
最初から近道などは教えない　寝屋川市　岸野あやめ
夕焼けがきれいこの町離れない　出雲市　園山多賀子
仁丹の粒でごまかす偏頭痛　松江市　竹内すみ子
人形と瞳が合ってから立ち直る　藤井寺市　高田美代子
魂をミラーボールに吸い取られ　倉吉市　淡路ゆり子
いびられた姑の軽さに涙する　竹原市　信本　博子
それからの笛も太鼓も秋を待つ　姫路市　丁坪サワ子
　和歌山市　山川　克子

村長は紋付き過疎へ嫁が来る　鳥取県　小西五十鈴
秒読みへ嫁す娘の寝顔いとおしむ　和歌山市　田中　みね
風下で幸せごっこして居ます　岡山県　山本　玉恵
見送れば良かった月が美しい　鳥取市　前田　一枝
別れ住み優しい夫だと気付く　京都市　山海　友熙
バランスを一寸崩せば楽になる　出雲市　石倉芙佐子
病む友と庭の無花果待っている　米子市　金山　夕子
午睡から覚めれば老母の居る景色　和歌山市　古久保和子
帰省せぬ子にゆらぎだす母心　大阪市　板東　倫子
しあわせはちいさ目でいい一人の灯　兵庫県　奥野　テル
下駄の音律義にたてて父の夏　堺　市　山本　半銭
古世帯なにか間に合う物が有る　大阪市　本間満津子
お祈りをすませてバラの芽がひらく　米子市　新　正子
夕立が暑さを消して通りすぎ　大阪市　樋口シマ子
忘れたい過去夾竹桃が狂い咲く　大阪市　町田　達子
俄雨わたしのこころ裁かれる　富田林市　片岡智恵子
伝説をコロコロ変える総入歯　松江市　安食　友子
ふり返りもせずにあなたが潔い　西宮市　門谷たず子
降りかかる火の粉を払う手が足らぬ　米子市　中井　ゆき
周波合いました結婚しましょうか　寝屋川市　平松かすみ
しのび寄る老いを断ち切る夢一つ　兵庫県　酒井　靖子
一輪の菊がにっこりして迎え　富田林市　池　森子
川床料理蝶も蛾もきて賑やかに　守口市　結城　君子
遅蒔きの春が巡って来た指輪　宝塚市　丸山よし津
試供品だった効き目早すぎる　和歌山市　田中　輝子

鶏頭が咲く命日へ赤く咲く　名古屋市　藤井　高子
有頂天の自分を鏡写さない　大阪市　神夏磯典子
朝顔に詫びる二泊の水しぶき　大阪市　津守　柳伸
死ぬときに残す言葉は「ありがとう」　倉敷市　小野　克枝
天の目を軽くかわして花どろぼう　弘前市　肥後和香子
寝ていると心に鬼が住み易し　米子市　茂理　高代
恍惚の母と思えぬわらべ唄　姫路市　中塚　遊峰
ぬいぐるみ一杯ためて居る孤独　有田市　生馬芙美子
夕べから語り尽きない月見草　岡山県　松本　元江
願い事三度唱えて流れ星　枚方市　森本　節子
共通の話題引出す初対面　貝塚市　池田寿美子
庭に花咲かせてくれる嫁がいる　青森県　福士　トキ
結局は夫に花を持たせてる　大阪市　亀井　円女
無駄ばかり重ね人生無駄でなし　唐津市　浜本　ちよ
お守りを付けてペダルが軽くなる　鳥取市　谷口百合子

ゴシックの**一句**、満月が欠けるという現象を捉えて、人の暮しの推移を想像させる。一つのことに打ち込んでほっとして見る月が欠けていた。作者の心を、欠けてゆく満月と摩替えて、軽く、そして深い一句にされた。

例外は別として、誰でもそんなに異なった生き方をしている訳ではありません。平凡な暮しの中でちょっとだけキラリッとした句にするために、折角の着想なのですから大切に推敲していただきたいと思います。巧い句より作者の息吹が感じられる句を大事に思いました。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1－18－10　小出智子

赤い

新正子選

赤いシャツ着ている方が男です　抜智
長男がさがしあぐねる赤い糸　重人
献血の赤い心の列に入る　高栄
掌をかざせば老いの血も赤し　あめ
赤潮が海の危険を警告し　次男
逢えるかも知れぬ予感に赤を着る　鉄治
大ジョッキ赤い気焔がよく響く　石舟
赤紙で悲しい軍靴もう履かぬ　彩子
赤紙を手にした夫と丸くいる　智加恵
反省を繰り返してる赤い鼻　志洋
老妻が着ろと言うので赤を着る　蕗児
近頃やけに赤い服着る妻不安　みね
赤い血を少し残して定年日　四郎
終章を飾る私に欲しい赤　辰江
老眼鏡　誂えに来た赤い靴　千歩
赤い爪言いたいことは言いますわ　薫
赤い実を食べてまっかな鳥になる　文子
赤い靴似合う媼になりました　枯梢
赤色でニューで私の通勤車　虹汀
足速に横目で通る赤い羽根　愛論
夢多き女には赤がよく似合い　ふさ子
梅干の赤さに滲む母の愛　清芳
赤い靴　一歩一歩を踏みしめる　裕美
赤い靴履くとスキップしたくなる　保州
ブランコにひとりぼっちの赤い靴　高夫
パリまでひとりで行った赤い靴　しげお
赤飯を炊いて長女の旅祝う　公弘
赤い目の母は黙って皿洗う　艶子
日の丸の赤がだんだんあせてくる　杏村
戦場の赤い夕陽よ青春よ　治幸
赤い涙を拭くハンカチは別に持つ　雄々
開発の杭とは知らぬ赤トンボ　ただし
信号が赤で止って深呼吸　紀一
友の訃へひときわ赫い曼珠沙華　寿美
赤鬼の仮面の裏が濡れている　雀踊子
柿衛門の赤が画廊で生きている　博子
気づまりを西瓜の赤に救われる　あずき
佳

六法に真っ赤な嘘も書いてある　はるお
赤い夕陽の真ん中にある老母の顔　ひでの
信号の赤がわたしを落ち着かす　いわゑ
妻の墓と遊んでくれる赤とんぼ　道胤
パレットに青春を呼ぶ赤もある　豊
人

図星だと思う頬っぺが赤いから　妻子
地

惜別の尾灯へ独り佇ちつくす　白光子
天

自分史を飾る表紙は赤にする　川島諷云児
軸

シェーンカムバック　夕陽は何度聞いたやら　南奉

時代

米田恭昌選

甲種合格自慢を笑うのも時代　千歩
シックスポケット時代にそっぱ向いている　信義
世を拗ねて時代の流れを溯る　ひでの
四十余年の時代を語る原爆忌　あずき
新入りが先に休暇を取る時代　良江
筋立ては同じそれでも時代劇　妻子
敗けいくさそんな時代も背負うてる　富喜子
許された墓参一つの時代越す　保州
礼節を時代錯誤という時代　あやめ
薄情を本音の時代と言いかえる　有一朗
平成の時代の波も荒れ模様　大柏
新時代乗り継ぐ辞書を買い替える　可住
夢いくつ孫の時代へ樹を植える　枯梢
時代ですの一言老いはうなだれる　悠泉
大黒柱の艶に老舗が支えられ　度
ああ平和　鳩もからすも増えつづけ　玉恵
神様も時代に合うた札を売る　希久子
遺跡から時代を超えた息づかい　石舟
ループタイ時代の流れなど追わぬ　和子
よい時代でしたと白寿のはなし好き　しげお
蔵の鍵　父の時代を守りぬく　俊路
時代屋の店で私の過去漁る

飽食の時代も母はよう肥えず　シマ子
嫁姑時代錯誤の中に住む　理瑛
爺の気骨　時代遅れと言わせない　朴竜
時代劇の悪代官は今もいる　姫女
貧乏は忘れたとてもよい時代　螢
時代錯誤をアルファベットに論される　虹汀
モノクロに阪東妻三郎生きている　杜的
かき氷古い時代の味がする　紀一
時代劇老父にテレビの指定席　重人
語り部が時代の影を置いてゆく　ただし
時代遅れのこころごろごろして困る　艶子
見得を切る時代がかった老父である　彩子
四世代生きた答がまだだせぬ　雀踊子
時代考証ウチにもあった長火鉢　たず子
拝金の時代の付けが裁かれる　三男

佳

キナ臭い時代を生きた老いの自負　高夫
戦場へ時代を戻す軍歌集　章
悪人が滅びる時代劇が好き　正子
時代屋でゆっくり刻をまき戻す　寿美
月を踏む時代に頼る伊勢暦　正敏

人

若い血が時代を変える村おこし　清芳

地

少年の時代に返る祭り笛　諷云児

天

月に棲んだ時代を兎なつかしみ　小西雄々

軸

時代劇の好きな父娘で仲が良い

貯める

山本希久子選

貯めているそうな身寄りがないそうな　南奉
貯めたのに少うし足して買うてやり　佳雲
百歳までの飲み代だけは貯めておく　圭一郎
貯めるだけ貯めて女は猫と住み　高明
旅の金貯めるとバイト辞めてゆき　鉄治
したたかに貯めてしたたかに生きている　愛論
縁の無い貯める話を聞いている　重昭
何喰わぬ顔で小金を貯めている　保州
どう言われても私は貯める主義　妻子
汗水を流した貯金胸を張る　武治
貯めこんでストレスがまた一つ増え　信義
へそくりを貯めると肩が凝ってくる　螢
逞しく貯めて女のネオン川　千歩
よう貯めてはった噂の野辺送り　可住
朝市の稼ぎ余生へコツコツと　章
子に孫に貯める祖父母の小さい金　一進
小金貯めておんな一人という構え　たず子
貯めるのが趣味なんと淋しい人だろう　結実
長女次女三女がいます貯めてます　重人
女一人小綺麗に生き貯めている　よし津
もうかりまっかあきませんなと貯めている　通彦
ポックリ寺の経費はボツボツ貯めている　玉恵
貯めているらしいとあの手この手来る　やすお
あの世へは持ってゆけぬが貯めておこ　紀一
貯めるのが好きで老母の小さい背な　ひでの
虹抱いて娘一途に貯め始め　芳水
月掛けの満期に妻の旅プラン　白峰
貯めたとて六文で足る渡し賃　(松)隆
阪神と遭って貯金をまた増やし　新造
折角に貯めたお金だ使えない　シマ子
満期日を知って壊れる冷蔵庫　正子
気が付いた時に言葉の貯蓄する　達子
母さんのへそくりたかが知れている　諷云児
お地蔵さんの掌に一円が貯めてある　和子
貯める壺底が割れてるとも知らず　夢酔
男など頼りにならぬ金を貯め　石舟
疑わず明日があるから貯金する　(緞)隆

佳

ほどほどに貯めて世渡りリズミカル　多賀子
貯める程ないのに金利気にかかり　広
人並みの顔少しだけ貯めてます　洛酔
貯まらないはず妻がカードを持っている　薫
貯まってもないのに腹が出て困る　ちかし

人

コツコツと貯め甘言にひっかかり　白光子

地

貯めすぎた頃から軌道くるいだす　雄々

天

楢山へ行くには重い程に貯め　矢内寿恵子

軸

ままならぬものに貯金とダイエット

初歩教室

題 ― 匿名

辻　白渓子

今月の題「匿名」は、着想の範囲が狭く、作りにくかったようで、匿名による投書と寄付が多かったようです。また、中には一句、二句の方が数名あり、残念でした。やはり初歩教室の意味から、ぜひとも三句は提出してほしいと思います。

恋文を匿名で出したことがある　好花
（恋人の手紙と匿名でも分かり）
名乗る程の金額でなし匿名に　治夢
（匿名の寄付は小さく隅に載り）
匿名で妻をほめたい投書欄　洋
（匿名で妻をほめたいことがある）
匿名で左手書きの脅迫状　晋
（匿名の手紙犯人だと思う）
匿名で美談に残る多額寄付　ふみ
（匿名にしたら美談になった記事）
匿名を見破りたいと覗く人　三重
（見知らない人匿名で寄付をする）

匿名の投書はどれも無責任　章久
（匿名の投書に司会興味持ち）
匿名では一切投書しない主義　円女
（匿名の手紙は書いたことがない）
匿名の手紙があばく大事件　みつこ
（匿名の手紙が決め手になる捜査）
寄付金を匿名にする布施心　隆
（匿名にする寄付金はたかが知れ）
匿名と言うて司会者名まで読み　春風
（匿名にしても司会がすぐ喋る）
匿名で出せば言い度い事が言え　志重
（匿名にすれば遠慮のない意見）
匿名の好きなお方がいて困る　敬
（匿名が好きであちこち投書する）
匿名で送った手紙返される　一枝
（匿名で出し匿名で返事来る）
匿名の封書届いてひと揉めす　姫女
（匿名の封書を妻に疑われ）
匿名で施設へ寄付をする女　静子
（施設への寄付匿名にした女）
気ざな記事匿名と言う億の寄付　金吾
（億という寄付匿名を怪しまれ）
別居から匿名で一封祝結婚　繁男
（匿名の結婚祝いなどはない）
抵抗があるから匿名にして呉れと　秀香
（匿名で出して仕返しかわしとく）

匿名の力を借りたペンの先　はる子
（匿名にするペン先の字が奇麗）
匿名が意表をついてしゃべり出す　マサエ
（匿名の寄付を漏らしたのは身内）
匿名の手紙くせ字で名が知られ　君江
（くせのある字で匿名がすぐに知れ）
匿名で事件を知らす一一〇番　幸枝
（匿名の一一〇番は事件です）
匿名を条件にして投書する　義男
（匿名の投書を司会漏らしかけ）
匿名で考えつかぬお中元　幟
（匿名で届く中元などは無い）
匿名の相談事のいたいたし　しづ子
（匿名の相談テレビ取り上げる）
声の欄同じ思いの匿名氏　一乗
（匿名の投書が同じ事を言う）
匿名で善意の寄付が届けられ　和枝
（匿名の寄付は善意が籠ってる）
赤裸々な秘話匿名にするラジオ　博章
（匿名の秘話をラジオが採り上げる）
匿名にすることも無しこの平和　すみれ
（匿名の寄付が届いている平和）
匿名の電話警察も動き出す　保夫
（匿名の電話へ警察すぐ動く）
匿名でする程預金まだ増えぬ　芳水
（溜まったら寄付匿名でするつもり）

匿名で出しても返事くれる友　ふさ子
（匿名で返事寄越してくれた友）
匿名で拝めば神に届くかな　ちかこ
（匿名で拝み迷惑してる神）
嘘混り匿名にして週刊誌　高雄
（匿名の記事が載ってる週刊誌）
匿名の電話娘が靴をはく　とし病
（匿名の電話娘にだけ分かり）
名を伏せた妻の善意に上乗せし　辰男
（匿名の寄付を負けずに妻もする）
匿名の文堂々の意見のべ　昭治
（匿名の意見理屈に叶ってる）
匿名の手紙が胸につきささる　彩子
（ワープロで来た匿名の脅迫状）
分相応の額募金して名を隠す　和子
（匿名の寄付家計簿にひびかない）
匿名の浄財嬉し普賢岳　幸夫
（匿名の寄付が救うた普賢岳）
匿名で悪口雑言批判され　タミ
（匿名でするから批判手きびしい）
匿名で書く恋文の人いづこ　万寿男
（匿名にした恋文が戻らない）
匿名と聞いてペン先よく走る　ひかり
（匿名にするペン先がよく滑る）
教師への苦情はすべて匿名で　春子
（匿名で教師の不満投書され）

匿名にしとこ私に照れがある　絢子
（恥ずかしいから匿名にする弱気）
匿名がばれてさんざん嫌味聞く　侑里
（匿名の投書がばれて妻と揉め）
よく出来た文で匿名やめにする　哲矢
（匿名を思い直した文の出来）
匿名で溜飲下げる気の弱さ　晋
（匿名であばき溜飲下げている）
匿名で贈りつづける義援金　清柳
（匿名で綺麗に届けた義援金）
心無い匿名葉書を反故にする　富喜子
（匿名で届く葉書はたかが知れ）
匿名の多額の寄付は祖父でした　喜代子
（高額の寄付匿名で祖父がする）
実名が出せぬ投書の無責任　明吉
（匿名の投書に責任などはない）
匿名の投書が波紋沸き立たす　高栄
（匿名の投書話題にするテレビ）
正義観匿名で先づ自己顕示　太一郎
（匿名の投書に正義が溢れてる）
匿名の祭りの寄付は有名人　暁子
（匿名で名士が寄付をする祭）
匿名の手紙で授けられた知恵　春枝
（匿名の手紙が助けた社のピンチ）
匿名の暑中見舞がくる暑さ　隆雄
（匿名の暑中見舞に涼しい絵）

匿名で嫁に手紙でするしつけ　友熙
（匿名で躾をしたい嫁と住む）
匿名で被災地見守る輪に入る　方子
（匿名で仲間と被災地を救う）
匿名で出した投書にほくそ笑み　好花
（匿名の投書見ていたように書く）
いやがらせ匿名電話が気にかかる　ふみ
（匿名の電話夜中にくる不安）
匿名が誰かと推理かしましい　みつこ
（匿名が身内らしいという噂）
匿名を隠れ蓑として中傷し　繁男
（好き勝手書いて匿名ことが足る）

参考句

匿名でカンニン袋掃除する　杏村

着想・表現の良い句

匿名の寄付へ紙面の温い記事　洋
匿名の投書で警察動き出す　高栄
匿名で人を指すとは卑怯だな　絢子
匿名のバルブはじけて針筵　幸夫
匿名の人へ好意の借りが出来　芳水

私の句

匿名の善意集まる赤い羽根　白渓子

◇

題「**和　解**」　**10月15日**締切（12月号発表）

宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻　白渓子

本社　九月句会

九月六日(金)午後五時半
メンズファッションセンター

九月に入っても一向に衰えぬ暑さの中、九十三名の出席で開会、その前に今般、上梓の佐藤奏月さんの句集『草千里』の紹介が、河内天笑氏から行われた。

お話は阿萬萬的氏で『ふあうすと』の椙元紋太氏が、昭和五年に発刊された『わだち』の随筆を取り上げて紹介された。当時、『番傘』の岸本水府氏、『川柳塔』の前身である『川柳雑誌』の麻生路郎氏、椙元紋太氏は関西川柳界の三つの柱であった。それぞれの人となりや川柳への姿勢から、水府氏、路郎師、紋太はんとまわりから呼ばれたという。

今ではこれらの先人たちを知る柳人も少くなってきたので、今回は好々爺の風貌で、「川柳は人間、句は排池物、句の良し悪しを決めるのは他人」と、他の二人の指導者とはひと味違った川柳観を持つ紋太氏の紹介が重点的にされ、興味深く聴いた。

初出席は豊中市から田中道胤氏。月間賞は八尾市の宮崎シマ子さん。

(進行—奏月)(受付—天笑・月子)
(清記—楓楽)(記録—射月芳・みつ子)

席題「走る」　池森子選

各国の金へマラソン沸いている　笛生
完走が出来れば立派だと教え　年代
走らねばならぬ後ろがつかえてる　透太
追いかける老化が怖いから走る　文秋
一と走り行って来いよと邪魔を出し　覚然坊
身のうちの野心　走れとそそのかす　楓楽
救急車　街をつめたくして走る　雅文
もはや秋　少し真面目に走らねば　みつ子
共稼ぎ繋ぐ女の走り書き　吐来
無我夢中　走る暮しで子は育ち　光代
坊さんもわたしも走るにわか雨　月子
走らねばあなたの背なを見失う　たず子
田舎道走ると母に叶わない　千秀
それからは走るのやめた蝸牛　蕗児
走り過ぎたと思う傷あと痛む夜　萬的
走ったら間に合う走ることにする　笛生
先頭を走り通した靴の紐　しげお
丸腰の父を助けて走りだす　太茂津
先走る暦に秋が出遅れて　柳弘
走り続けようわたくしになるために　幸
落後者をかぼうて走ることにする　悦郎
前向いて走る肩の荷おろすまで　芳子
帯ゆるめおんな一気に走り出す　寿子
追い風の吹いてるうちは走らねば　透太
薬が効いている間に百里ほど走る　智子
年金はうちの家計を走り抜け　美房
私の地図に書いてない道走る　愛論
幻を見つけた影が走り出す　天笑
ホーキングの理論でリンゴ走り出す　元紀
娘のために走る親馬鹿だとしても　年代
妻のためもう一走りする余生　吐来
佳
むなしさが走る昨日の悔い一つ　美幸
稲妻が走る心を見透かされ　典子
思惑があるので二番目を走る　(福)英子
三分を走って悔いを噛み殺す　冬葉
走っても走っても昨日のままだった　白兎
人
駄洒落ばかりで軽い男の走り過ぎ　萬的
地
あかね雲今日も午後から小走りに　元紀
天
寂しさを逃がれるために突っ走る　奏月
軸
火の玉となって闇夜を走る恋　森子

兼題「削る」　田中透太選

無器用な父が削った竹とんぼ　志洋
添削がきつく私を見失う　ダン吉
鉛筆を削る野心を尖らせる　多賀子
添うてから女の夢が削られる　信義
晩酌を削る話がまたも出る　温子
子育てにいのち削った芋の蔓　公一

極道な息子に命削られる　　颯云児
身を削る思いで埋めた原稿紙　　憲太郎
悲しみを削るナイフは拭き切れぬ　　寿子
偏差値に子供の夢が削られる　　吸江
削られた山は寝首をかきに来る　　雅文
削った筈の影がこっそりついてくる　　智子
削られて鬼も人間臭くなる　　いわゑ
鉛筆をとことん削る落ち目の日　　年代
妥協癖　鉛筆ばかりとがらせる　　千歩
ひと言を削るとイエスがノーとなる　　吸江
空港の島を見ながら山削る　　蕗児
削られた言葉の中にある余韻　　楓楽
吊革に削ったいのちぶら下がる　　隆
山削るもう山彦は失語症　　しげお
過労死をする程神経削らない　　栞
身を削りビタミン剤を飲んでいる　　はつ絵
愛がある間は女　身を削る　　典子
文章に削れる個所がない弔詞　　白渓子
行間を削ると本音見えてくる　　凡子
鉛筆を上手に削るおばあちゃん　　紫香
カルチャーに通う分なら削らない　　月子
島に橋かかって人情削られる　　寿美
懺悔した鬼が削った摩崖仏　　射月芳
亡父の樹を削ると見える礼智信　　たず子
少年を削って暮れる春の川　　元紀

佳

天しんらんまん人の言葉を削らない　　英壬子
私を削るえんぴつ削ってる　　いわゑ
小遣いを削ると家で飲む夫　　月子
地の底を削っておろかさに出逢う　　森子
鉛筆を削る音から秋になる　　元紀

人

削れるとこはみんな削って印を押す　　度

地

骨身削って一本の樹を育て　　奏月

天

山削り情けがすこしずつ乾く　　薫

軸

ライバルとしのぎを削る登り坂　　透太

兼題「香水」　河内月子選

免税店で先ず香水を買うている　　笛生
香水もあります男性化粧品　　雀踊子
香水をとうに忘れた寡婦の意地　　芳水
香水と汗のまじった終電車　　年代
香水に自己陶酔をしています　　芳子
家にない香水だから揉めている　　昭子
香水をときに女は武器とする　　典子
香水を捨てる峠を越えるため　　奏月
汗っかき腋へ香水念を入れ　　利武
身綺麗に老いて香水離さない　　凡子
引き出しの奥の香水そっと撫で　　光代
香水の一滴　嘘も混ぜてある　　(松)文子
香水が微かに匂うお人柄　　憲太郎
香水より匂い袋が似合う母　　公一
香水と遠い記憶の中にいる　　いわゑ
擦れ違いざま香水値踏みするおんな　　三男
香水をふり過ぎ愛に飢えている　　楓楽
香水に誘われパリに着きました　　東雲
男除けの香水振って街に出る　　颯云児
待ち呆けだった香水無駄になる　　幸
香水がどない言うたら良いんやろ　　凡九郎
香水に凝ってパリから直輸入　　雅文
香水が匂う飲み屋の請求書　　保州
香水ブンブンあなたを好きになれません　　はつ絵
ふんぎりがついて香水買い替える　　しげお
香水に縁が無かった母の艶　　典子
ニナリッチもシャネルも秋の恋を追う　　元紀
香水に縁なき母のごつい指　　吉太郎
エレベーター甘い香りと乗り合わせ　　薫
耳たぶの香水が聞く内緒ごと　　千秀
薬とは別の匂いのあるナース　　シマ子

佳

香水の名前をあてて嫌がられ　　度
モンローの着た香水にあこがれる　　美房
香水を撒いてマンネリから抜ける　　歌子
香水が楽しい夢をくれました　　いわゑ
横顔は淋しくシャネル5が匂う　　みつ子

人

香水を肌身離さぬ訳がある　　公一

地

恋をした数の香水瓶を持つ　　楓楽

天

ジャスミンもシャネルも及ばない若さ　　保州

輔

香水をたらり男を釣りに出る　　月子

兼題「効く」　小池しげお選

無医村育ち母の呪い効いて来る　雀踊子
特効薬でしたあなたの愛の鞭　㈱文子
有効に使って欲しい金をやる　敬
よく効いた風邪の薬は酒でした　抜智
DXもダダンも効いた気にさせる　元紀
賞め言葉効いたか本を読んでいる　度
変化球　効いたか椅子がきしみ出し　憲太郎
信じれば猿の腰かけ効いてくる　はつ絵
ストレスに効く一合は欠かせない　正坊
悪友の意見じわじわ効いて来る　〆女
効く効くと精力剤におだてられ　㈱英子
アレに効く薬探しているのだが　太茂津
いつの時代も効めあるのが鼻薬　文秋
姑の漢方薬が効いてきた　螢
医者が言うようにはすぐに効いてこず　白渓子
やたらには言わぬ小言が効いてくる　太茂津
効かなんだらしい薬が変ってる　ただし
トリカブトそろそろ効いてくる頃だ　鬼遊
くすりよりよく効く父の平手打ち　颯云児
よく効くと暗示をかけて飲むくすり　凡子
一喝が効いて小猫もよりつかぬ　奏月
鼻ぐすり効いた自分を跳ね返す　典子
熱燗が僕に一番効く薬　路児
チチンプイ　ママのまじないすぐに効く　満津子
あの時に一番効いた母の灸　公一
売薬が効いて通院阿呆らしい　二南
握らせた万円札が効いてくる　幸
スパイスが効いたか余所見しなくなる　歌子
スパイスの効いた小言に矢が刺さる　ただし
肥料よう効いてホウレン草の青　笛生
効用はどうあれ母の化粧水　月子
佳
やわらかい言葉が効いたお説教　美代子
じんわりと母の涙が効いてくる　寿美
一言が効いたか後はおとなしい　柳影
つり棚にまだ効いていた亡父の釘　たず子
じんわりと父の助言が効いてくる　歌子
人
万病に効きます僕のワンカップ　ダン吉
地
鼻薬そろそろ効いてくる頃だ　度
天
すぐに効く薬は妻が持っている　芳子
軸
癌によう効く神様の百度石　しげお

兼題「鎖」　金井文秋選

悪縁か妻との鎖はずれない　あいき
愛と呼ぶ君の鎖を所望する　㈱正子
人間の鎖　戦車に立ち向う　㈱文子
目に見えぬ鎖で妻に縛られる　颯云児
形見には太い鎖のウオルサム　隆
ストレスを溜めて飼犬鎖咬む　愛論
信じ合う夫婦に鎖いりません　颯云児
ポケベルと言う名の鎖でつながれる　恭昌
からゆきさんの涙　鎖の音がする　雀踊子
修験者の命あずけている鎖　勝美
連鎖反応　底なし沼のバブル風　千歩
別れる話　金のくさりが切れそうで　満津子
象の脚　鎖悲しい音をたて　杜的
妻のもつ手綱　鎖より強い　柳宏子
単身赴任　無口になったドアチェーン　芳子
足の鎖の重さに馴れて生きる象　たず子
情と言う鎖で島を離れない　冬葉
若者をつなぐ鎖が過疎にない　雅文
にんげんを信用できぬドアチェーン　正坊
檻を出て猿に自由のない鎖　覚然坊
つながれた鎖気にする弱い象　勝晴
鎖とも時には思う血の絆　楓楽
冤罪の鎖が解けた青い空　公一
人間の鎖　戦車を通さない　奏月
目に見えぬ鎖でつなぐ腐れ縁　志洋
しあわせな犬で鎖に甘んじる　幸
天の鎖にあなたとならば繋がれる　光代
鎖ほどくようにネクタイ外してる　いわゑ
本家から鉄の鎖がゆるみだす　美房
父の靴に家族の鎖がついている　〆女
ペレストロイカ鎖の軋む音がする　寿美
佳
民主化へ鎖を切ったロシア人　柳弘
ドアチェーン女ひとりの味方する　典子
定年になると鎖が懐かしい　射月芳
世紀末　赤い鎖が錆びはじめ　薫
ドアチェーン夫の声を聴くまでは　鬼遊
人

その笑顔わたしを繋ぐ鎖かも　みつ子
地
死んでまだローンの鎖外れない　一二三
天
くさり編みほのかな愛を編みはじめ　凡子
軸
その気になれば足の鎖も切れる象　文秋

兼題「簡単」　西尾栞選

簡単に出来るグルメが人気です　(新)正子
簡単に蜥蜴は尻尾切りたがる　(松)文子
簡単に約束したがるママの指　雀踊子
簡単に死ねない深い罪がある　勝美
簡単に妻をやめると言いだした　螢
簡単に命を値踏みする保険　保州
簡単には語れぬ男に過去がある　萬的
簡単に痩せます薬が命とり　千歩
簡単に言えばお金で済む話　杜的
コロンブスはたまごを割っただけのこと　元紀
ひと一人こうもたやすいトリカブト　鬼遊
簡単に覚え左へすぐぬける　千歩
簡単に減量と申しましても秋　冬葉
簡単にお答えします妻の罪　英壬子
簡単に出た結論の落とし穴　信義
簡単に言えば好きだということさ　透太
返事だけよっしゃよっしゃとすぐに請け　一二三
ジーパンで外国までも行ってくる　凡子
簡単に脱ぐのも乳房自信ある　東雲
レーニンの像　簡単に倒される　奏月
簡単な事から落ちた蟻地獄　ただし
簡単な妥協の裏にある打算　千秀
簡単なオペとみんなは言うけれど　柳伸
簡単な膳にも妻の味がある　みつ子
簡単に乗ると危ないお買得　達子
簡単に書けぬ今夜の日記帳　冬葉
簡単に別れなはれと言う他人　諷云児
簡単に父の帽子と逢える秋　岳人
簡単なことがわからぬ町役場　年代
簡単にハワイで式を挙げてくる　凡子
簡単におわる証人喚問さ　奏月
佳
簡単に行かぬソ連の跡始末　美房
簡単な文字ほど困る筆運び　狸村
簡単に夏から秋へ消えた恋　歌子
簡単に負けて阪神アトがない　眉水
簡単に石屋のテコで石動く　しげお
人
以下同文すこし簡単すぎないか　幸
地
簡単な一タス一が二にならず　笛生
天

簡単に心変りの紅をひく　シマ子

軸
あっちむいてホいというように簡単にゆかぬ　栞

あっちむいてホイとは

佐藤奏月さんから句集発刊を記念して金一封を拝受しました。　**川柳塔社**

佐藤奏月川柳句集

草千里

9月1日発行
B6判・92頁
頒価 800円

序文／橘高薫風

発行所　川柳塔社
大阪市阿倍野区三明町2－10－16
☎（06）629－6914

寝屋川市民川柳大会

とき　11月3日(祝)　正午開場
ところ　寝屋川市立総合センター
兼題　「やわらかい」　里　小路選
「指　輪」　小川　速水選
「枕　」　山本　礫選
「塔　」　小出　智子選
「命　」　梶川勇次郎選
「文　化」　橘高　薫風選
会費　1000円

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原稿用紙に清記をお願いします。　編集部

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

夫より子が辛辣な意見いう　スミ子
餌づけした鳥で私と会話する　節子
亀の産卵　星の雫が磯うめる　静江
七つの子鳴いていますよ峠越え　稲子
眼を閉じて水の流れを聞く地蔵　恵美子
扇風機も家族に入れて梅雨夫婦　万寿男
野地蔵に遠慮をしない鳥の糞　如水
サービスはせぬが珈琲うまい店　正坊
船場育ち暖簾を守った五ッ玉　〃女
咳払い子に見せられぬ本を閉じ　春風
一件落着厚い調書も閉じられる　紫香
父と子の画架へ静かな山の湖　萬的
夕やけ小やけ鳥に帰る森がない　杜的
政治家の都合でゆれる第九条　芳子
くり返し律儀に閉じる自動ドア　英子
丑三つどきカラオケ喫茶にいる私　栄子
飛ぶ鳥を落した鬼の咳払い　しげお
落柿舎の蓑笠しきりに梅雨を呼ぶ　栄
燕の不安去年の家がビルになり　武庫坊
籠を出た小鳥自由が辛くなる　年代
言い分の通らぬ足が重くなる　二南
朝シャンで夜中の罪を洗うとく　波留吉
せきの数だけ夜中の姑思う　冬葉
手品師の鳩に自由の空がよい　諷云児

岸和田川柳会　芳地狸村報

面影はどこかと探すクラス会　恵空
我が家の面影もなし火砕流　こう
面影にそっと苦衷を打ちあける　白光子
面影が母のダイヤの中に住む　狸村
白砂青松　面影変えたプルの爪　甘平
謝りに行くのにおんな化粧する　勝晴
左遷地にもどっこい光る駒がある　すみえ
異動期をしおに別れてゆく二人　一弥
核満載うつつ抜かせぬ地球です　ダン吉
仕事より趣味にうつつで平社員　通彦
愛深くうつつを抜かす赤いばら　ひで
その罠が見抜けずうつつでいる女　萬的
お得用ですよと単細胞の妻のせる　浪速子
遺伝だと納得できる子の音痴　さよ子
小さい幸　得心の行く旅に出る　武助
損をして得取る話馬鹿にされ　柳宏子
風通す浴衣が過去を喋りだす　昌子
根気あるうちに石段積んでおく　和子
夢幾つ抱いて選んだ娘の浴衣　綾子
夢ひとつ抱いた根気で続いてる　アサ
水滴のこの一粒が岩動く　正直
成功の陰に隠れたある根気　英子
古浴衣タンスの中で出番待つ　達子
好きな酒祝辞すむまで手をつけず　保志
浴衣がけすっきり夏の夕涼み　千代子
石の上三年どころかすぐにやめ　喜市
嫁取りは辛抱づよく根気よく　永年
浴衣には線香花火がよく似合い　幸子
遊びには根気やる気のある子供　紳一郎
何しても根気続かぬこの暑さ　千鶴子
まな板のくぼみに母の根気知る　春子
どこ押せばあんな祝辞が湧いて出る　悦男
母さんの根気夜なべで編み上げる　瑞穂
自分売る祝辞にはずむ金の嵩　与呂志

川柳クラブわたの花　片上英一報

つゆ晴れの空へ朝顔手をのばし　シマ子
故郷の空で星くず集めとく　美津留
流れ星祈った恋をいつくれる　一風
日本晴れ富士のお山も久し振り　友甫
夢追うて大空高いあげ雲雀　弘直
くうくうくう人にも苦あり空の鳩　明子
肝移植臨調待てぬ医者の腕　龍襄
腕まくり力んでみたが空振りだ　龍
勝ち力士薄着をまとう力こぶ　幸枝
案外にきかせる妻の北酒場　しげる
安産の電話の声がよく弾み　トシエ

まどろみにベル恨めしい不眠症　正子
お土産はテレホンカードと決めている　芙美子
何時までも子離れしない電話口　初子
口たらず電話の傍に家内おり　泰成
かえるコールすませ飲み屋で根を生やし　一雄
使わないテレホンカード買いあさり　丈夫
遠隔地電話料が気にかかり　俊子
ねころんだままで聞いてる長電話　みき子
電話ボックス背のびしてまでわるさする　暁子
鬼のるす今夜ゆっくり長電話　ますみ
留守番電話一人喋りが味気ない　弥生
糸電話想いのほどを話し合う　しのぶ
長電話親のこごともうわのそら　朝子
長電話はずむ話に水をさす　君江
留守番の機械に話すことでない　春子
当節はバカと電話も使いよう　英一
吊革にゆとりができる夏休み　隆章
八月が疼く炎を生き延びて　鬼遊
奢られた味噌らーめんが胃にたまり　

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

思春期の森に油断が置いてある　志重
梅雨晴晴れ間蝶も楽しい舞をみせ　山人
闇の夜の螢の乱舞恋やさし　秀香
催促をされてにっこりした写真　吟平
伊勢志摩の海女と写して旅土産　ふさえ
軍服の遺影平和な世を知らず　さわゑ
逢うて見て見合い写真と違いすぎ　邦人
根性と稽古の光る殊勲賞　江山
孫は野球祖父は相撲に熱を入れ　伊久栄
いい喉の相撲甚句が盛り上げる　半仙
髷おろす力士の顔にある涙　甫正
大物食い小兵の技がよく切れる　恒心
よく響く男にB面などはない　賛平
藤島旋風親方きびしい目を細め　すみれ

川柳後楽吟社　従野　健一報

満点の男に感動編がない　草風
倖せはこんな俺でも妬いてくれ　浄美
銀婚へラストダンスの夫婦坂　青銅
わがままが勝手なときに距離を置く　たけ志
電柱へシッコもなさる血統書　美智子
泉のほとりに人待ち顔の女像佇つ　義親
梅雨晴れが痛みをすこし和らげる　金吾
万歩計ひと回りして陽が上る　吟平
作業衣で働く貴男の汗が好き　桃風
堪忍袋いたわりストレス溜めている　哲郎
妥協点求めぬ短気の捨てゼリフ　進
真剣に生きて生傷絶えません　拓治
メリットが無い人病室でよく喋り　博友
胸の奥ひとつ白旗かくし持つ　柳五郎
病院と仲良く付き合う術を知り　玉水
貯えた知恵を小出しに生き延びる　正秀
女房が呑気で短気落ちつける　佐加恵
腹心も秘書も本音をまだ知らず　秋月
余裕などないが菩薩の瞳を信じ　健一
昨晩の喧嘩が煙る朝の膳　鮫虎狼
橋本の出番をつぶす証券界　照路

川柳東大阪　森下　愛論報

梅雨晴晴れ間緑に濡れる花手桶　辰蔵
幽霊の消えた廊下が濡れている　文秋
老優の濡れ場で見せる芸の幅　雅士
忙中のわずかのひまの花作り　美子
平成の縁切り寺が暇になる　湖風
暇な店化粧くずれが持て余す　章久
暇できた頃は手足になまけぐせ　頂留子
一生を馬鹿で通してきた利口　愛論
水子への罪は一生消え去らぬ　晋吾
ハンカチを拾って一生添いとげる　度
我儘な一生だったが芸残す　猪太郎
万引きに私服ひるまぬタイミング　喜風

佳句地十選（8月号から）　河井庸佑選

辛抱の袋だんだん重くなる　凡子
清濁を合せ飲み干す肚が出来　浄美
風上を歩いてくれた母がいる　ひさ子
夕立に心の迷い試される　幸代
盃を黙ってほしている野心　俊路
点と線　赴任の父を結んでる　てまり
三猿を通した母の座りだこ　芳子
言過ぎた火はいつまでも燃えている　博史
躓きへ意外な人の手が温い　楓楽
心得を変えて余生をうめてゆく　チカエ

タイミング良すぎる妻と五十年　孤舟
タイミング悪い私は婿養子　雀踊子
今宵から人妻となる契り酒　覚然坊
思い出が死角の女を化粧する　隆
海の好きな女に猫がつきまとう　作二郎
ぐうたらな友には惜しいいい女　白屯

おっぱこ川柳会（7月）　木村　明人報

倖せは夫婦ゲンカの出来る人　明人
ビール腹になっても変らぬ靴の文　放任
くいしばる歯が頼りない総入歯　ひかり
絶えだえの重症見舞言葉なく　伽名子
目が覚める程にかまれた蚊をつぶす　チカエ
やさしいよ私の自漫パパとママ　小四菜実子
何もかも捨てて病と付き合う気　マサエ
大声は強い女と誤解され　よしみ
坂越えたチラシによばれ足がとぶ　ふみ
紫陽花の色さえわたる今日の雨　正雪
ライバルを意識しながら釣をする　いさむ
フライパン世界の文化をふりかける　スミエ
世の中は結局強いものが勝ち　迷貫
重箱の隅で暮らす処世術　吟笑
心配で安全ピンを持ち歩く　かおり
一寸した真心だけがうれしくて　白柳子
銭金で済ませぬ壁に突き当たり　迷観子

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

蕎麦食べている間も孫の背が伸びる　實
そば弁当うずら卵がちょんと付き　はてなこ
宴会のお膳の隅でそばが待ち　一光
年越しのそば一杯に足りた汗　風樹
ざるそばに真夏の味が盛ってある　善保
かけそばを肴にコップ酒をのみ　喜久江
本物の蕎麦が食べたい檜箸　一花
再婚の見合い蕎麦屋で実を結ぶ　つとむ
ソバの花咲かせてソバ屋客をよび　凡凡子
ワンコ蕎麦喧嘩のように食いまくり　昭治
一匹の蠅がいてまだ来ない蕎麦　叶
ソバ作り祖母から秘伝教えられ　進
与野党が仲よく蕎麦を食べている　五楽庵
凶作にうちかつそばの白い花　井蛙
失恋の胸をもりそばよく通し　隆利
君の背でしっかり蟬になってます　和香子
人生の半分ほどは飲んだくれ　甲吉

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

売り食いのできるあいだはまだましだ　幸江
売る心今日の朝市　ボランティア　保子
ふれあい市温い心を売っている　富恵
魚売るおばさん待っていたのは猫　節子
努力が実り大輪の花咲かす　弘子
賛成多数ギロチンの音がする　公弘
叩き売りじいさんつけてさあなんぼ　覚
生き抜ける方へ賛成権むける　諷人
顔ぶれ見てから賛成の手をあげる　くに子
花も実もあるふる里は捨て切れず　智恵子
夏を売る海は太陽待っている　久枝
握手した手に賛成の情つたう　信江
仮の世は露の命と妥協する　幸枝
足老いて宮の石段高くなり　喜与志
七夕に露をあつめた願いごと　静江
もろ肌を脱いで助けてくれる友　八重子
幸せを売る胴元になる道だ　しげる
雨あがり無数の露にみる真珠　かつ乃
実っても頭下がらぬこともある　汲香
九回の裏を信じているお酒　明美
投売りの野菜山程買ってきた　睦子
触れあえば肌から肌へ通うもの　みさ江
揺れるだけで賛成しないイヤリング　三千代
言葉尻売って喧嘩の仕掛人　みさ子
鮮やかな木の実七変化で熟れる　きみ子
生きてきた智恵を押売りしたくなる　和子
山を売る話に妻が前に出る　隆風
天守閣で大きな息をすってきた　とみお
肌濡らす汗にちいさな恥を知る　螢

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

靴みんな起って座って手術中　欣之
慌てると忠実でない靴になる　美幸
片減りの靴　過労死を知っている　甘平
靴の中に砂がたまっている不倫　白洋
脱ぎ捨てた靴に躾かれる　柳宏子
靴脱ぐと古い靴下気がひける　雅士
肥えすぎた囲へ寄ってこない鮎　一高
とても素敵な男を釣ったのは疑似餌　律子
弁天様を釣ったつもりの鬼がわら　正子
釣るはずの証券やっぱり釣られてた　美津留

ほめられた竿がビールを追加する　とみを
釣り竿にトンボがとまる日の長さ　勝美
島原の海に泳げぬ夏休み　春子
主婦業も土日は休みたいものだ　宏子
火砕流ふと故郷の休火山　章
はかどりの様子ながめて茶が入る　しんじ
宵宮からきっちり休む祭り好き　頂留子
エネルギー小出しに休む父の職　喜風
休ませる耳にときどきシューベルト　柳伸
踊り子の浴衣日焼けを匂わせる　作二郎
一日の疲れ浴衣のままねむり　覚然坊
浴衣しまう夏の思い出しまいこむ　隆
盆踊り浴衣に恋の罪きせる　一風
盆踊り浴衣に汗がまといつき　しげる
寝たふりの金魚もすくう夜店の灯　かつみ
夏の午後金魚もひるねネコものび　朝子
金魚ぶつぶつ耳をすませば京なまり　度
少女全快　金魚の水が跳ねあがる　夕花

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

この足でわが家半分支えてる　聖子
辛かった事は語らぬ足の裏　ちよえ
自然食たべてタバコを吸うている　智重子
地に足がなかなかつかぬ夏の雲　はるみ
歯車を狂わす一言飲み込もう　歳栄
視野せまい女がひとり揺れている　民子
八十の足音聞こえぬふりをして　鈴江
足音が聞こえてほっと午前様　かつ子
コシヒカリ噛んでかんで噛みしめて　ヒデ子
ハクションで入れ歯が飛んだ日の孤独　芳枝
老いしかなステーキハウス横に見て　悦良
充電をしたい足だが暇がない　博利
曲線はきらいなぼくの足跡よ　清泉
虎の尾もふんで来ました足の裏　白汀

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

新札のボーナス数えて手が踊る　純子
お見合も数え切れない程やりました　保子
年齢だけは数えきれぬ程生きてきた　八重子
数多く咲いているから二三本　松子
鉛筆の数ほどマスメ埋められぬ　花子
改めて御恩の数をペン先に　朗子
野あざみを数えてバスのすれちがい　寿々子
煩悩の数を減らして行くつもり　恵子
数々の恩をいつの日かえすやら　玲子
相剋を重ねて数に流される　荒介
マイナスの数字へ沈むまいとする　千代
負けた数忘れて虹を見て生きる　瑞枝
石持った数ほど愛が満ちていく　日枝子
叱られた数だけ君に恩がある　正子

三幸川柳教室　三宅　保州報

世の移り並ぶと老舗も模様替え　由梨
あれからは手の鳴る方へ並んでる　好笑
顔のない紳士が並ぶ終電車　茜
序列もう始まっている三歳児　精子
カード占い孤独が溜まる夜の底　朱夏
底辺に並ぶ小石のしたたかさ　(松)幸子
箸袋並んで昔話する　芙美子
建ち並ぶビルをにらんだ鬼瓦　町子
いたずらに摘まず大きな実を結ぶ　純子
塾の道いたずらしたい水たまり　(上)幸子
いたずらもしてきた道で幅がある　博章
神さまのいたずらひょんなとこで遇い　千秀
平凡な日々がいたずらさせたがる　正雄
いたずらがことの起りであいた幕　瞳子
一よりも五を一番とする評価　親跡
知る人ぞ知って市井に生きている　和子
育て上げ評価は良しとしておこう　利子
喋らねば評価がもっと高いのに　かなめ
天才は五段階からおっこちる　桂香
欠点も個性があると評価され　鉄治
栄養価などは誇らない鰯　百合子
矢面に立って真価を問われたい　保州
愛されていれば減点パパでいい　和貴
過大評価だったと気づく倦怠期　靖子
歓びに時計止めたくなってくる　当代
その時は女でいたい人に会う　みね
束の間の幸せに酔う万華鏡　三千子
時々は疼くこころの古い傷　高夫
あとがきのペンへ時間が攻めてくる　公子
先生を評価している生徒の目　一郎

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

核の世に雲仙の火は何時までぞ　義美
友器用葉書の土瓶敷素敵　ちよ
海水着夕立の中立ちつくし　紀一

親友が支えてくれた苦渋の日　ふさ子
人生に悔いありこれが人の道　治幸
迎え火に亡妻帰りしか香揺れる　喜久亭
尻に火がついてゴルビーサミットへ　幸夫
赤シャツで気張る六十路の朝を駈け　朴竜
はじめでのボーナス地球買うつもり　四郎
不倫だと騒がれている名コンビ　虹汀
気がつかぬ振りして友に利用さる　弘
造型の妙赤い湯玉が迸る　旭恒
九官鳥怒られる子の名を覚え　ハル
何時の日か夢に見ていたマイホーム　高明
知覧茶に若い血潮の情けつぐ　タミ
出稼ぎの汗は汚職を知らぬ金　正敏

川柳ささやま社　遠山　可住報

茜雲明日へ残して幕降ろす　とよ子
楢山へ縫うております旅仕度　エキオ
やけくそにハッパがかかる蟬の声　恵美
一枚を脱いでとせがむ玉の汗　美智子
ひき抜いた野蕗が夜の膳飾る　貞子
どの子へも母の針目は変らない　冨美
衣脱ぐ尼僧の軽い物思い　和子
あげ足を隅の無口に拾われる　ヒサ子
あげ足の癖でねっから出世せず　百合子
てのひらのぬくみ見抜いた迷い鳩　とみ子
いさぎよくかぶとを脱いで老いの日日　つや子
脱水機過去をキッパリ絞り切る　テル
一肌を脱いで男は修羅を踏む　越山
骨を抜く爪を真っ赤に塗り上げる　文平
抜け殻の胸で勲章が光る　可住

京都塔の会　松川　杜的報

ぞんざいな口で何でもしてくれる　紫香
パートより社員ぞんざいに扱われ　求芽
糠に釘　卒寿の耳はまだ明治　芳子
一目惚れ小糠三合捨てました　英子
糠袋　明治の母はまだ達者　正坊
糖漬けのこの味ホント母の味　ミサ子
糠床はいま絶好の茄子のいろ　年代
糠漬けの茄子へ古釘入れる母　萬的
くじ当り糠喜びの桁ちがい　栄
深酒へ妻の小言も糠に釘　諷云児
ないやろなあ降って湧くよなええ話　キク子
しとど降る雨に流れぬ悔いがある　武庫坊
人魚姫ある日ジーパン穿きたくて　杜的
蒼い月　童話の人魚に悲話がある　〆女
人を恋うかたちで人魚髪を梳く　白渓子
ライン川遺る調べのローレライ　圭坊
うたた寝の夢に札束降ってくる　三求
降る話あるうちが花適齢期　巨詩
火の雨を降らし若狭井春に溶け　ただし
白衣着た人魚の化身伊勢の海女　倫子
何をしに来たか忘れて笑い出す　てる
紫陽花の雫手にする花の寺　達子
ポツポツと雨の音して眼がさめる　水客

川柳たけはら　森井　菁居報

海山が私をよんでるから行こう　小四千枝
雨上がり虹と遊んでいる私　小六史子
スクラムを組んだ羊のいい笑顔　蘭幸
セールスにバーの高さは限り無し　菁居
忘れ物歳のせいとは淋しいね　喜久恵
平和遠し戦どこかで続きおり　夏喜
長崎よ天災の責め誰がみる　ヤスエ
溜息を吸うてもらえる風がない　麻代
乗り換えてオゾンの匂う駅に着く　浪子
鯉のぼり降ろすとカープ弱くなる　勲
ダムの底神楽ばやしが聞こえそう　愛子
苦しみをまぎらす宵の一行詩　栄恵
よい人とよい話聞く月あかり　喜美子
くちなしの香り漂う亡母の忌や　一枝
梅雨明けか朝のコーヒーがうまい　清水
これからは風と渡ろう丸木橋　房子
母さんは来んでもいいと土曜市　比呂子
カラオケのここにも愁い溜めたひと　ふさ枝
ストレスが逃げてはくれぬ一人酒　一路
せせらぎのホタルは子らの声が好き　笑子
不眠症ウインブルドンに救われる　淑子
二百年モーツアルトはまだ生きる　伸子
犬連れてさまになってる影法師　令子
晩学の妻を侮ってはならぬ　静風
いい時代に青春だった私たち　真理子
末っ子が自転車に乗るただ嬉し　白狐
のれん吊すと風が涼しく見えてくる　貞子
森林公園の蝶の死骸が悲しいね　千代美
父の日に届いたシャツが風を切る　蝸牛
みんな無になれば争いごとはない　年子

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

柘榴の朱　なお煩悩の数知れず　みつ子
煩悩に無縁の襁褓高く干す　富喜子
煩悩が邪魔して善人にはなれず　白渓子
六根清浄煩悩一つずつ消して行く　杜的
煩悩を癒やす写経がすすまない　英子
煩悩を遁れるために汗をかく　道胤
網棚へ汚職のニュース捨てて行く　よし津
末摘花と鶴彬が居る書棚　武庫坊
藤棚の下にもあった指定席　芳子
心変わり知らぬボトルが棚の隅　園歩
本棚の隅に私の過去が棲む　正とし
カチ割を頭にのせて応援歌　トミエ
冷蔵庫満たして主婦の旅仕度　光代
鱧ちりの白さ冷やして客に出す　しげお
苦労して手にした椅子が冷たくて　諷云児
木から落ちた猿に冷たい世間の眼　圭坊
ショベルカー土掘る音と蟬の声　春蘭
結論を急いで墓穴掘っている　透太
太陽の真下に穴掘るヘルメット　〆女
カブト虫のお墓を作る土を掘る　静子
そよそよと昼寝を誘う憎い風　キク子
土用干しもこの頃しない古箪笥　江美
妻の留守絞ったままのシャツを干し　能子
朝顔が種をはらんで季は動く　香子
逢いたいと言わずにメモの乱れ文字　正一
仏壇を母が拝むと皆拝む　たず子
わたくしを一番知っている手帳　いわる

老眼鏡　説明書からチャレンジし　はつ絵
落し穴掘って自分で確かめる　紫香

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

弁当に心の中を見抜かれる　太泡
手抜きしてホカホカ弁当老い二人　静江
太陽と一緒に食べる弁当箱　桂子
手のひらにのる弁当でダイエット　登志子
珍プレー　ルール忘れて草野球　長三
夕焼けに染まって帰る草野珠　静恵
残照のホテルで約束とり付ける　重昭
人妻がきれいにうつるホテルの灯　義良
ラブホテル出るとき仮面踏んづける　友子
ホテルから会議が踊る舞台裏　小鹿
ホテルの灯一つ二つと夢包む　房子
ホテルにはなじめぬ母の旅疲れ　きみえ
誰だろう星に名前をつけたのは　一葉
満天の星が迎える母の里　邦代
星までは届かぬ愚痴の熱帯夜　かおる
空も星も変らぬ私が老いただけ　清子
天の川梨もメロンも糖度増す　雄々
星一つ散ってドラマに幕が下り　満江
望郷に情けの渇く北斗星　多賀子
ご苦労とかかし寝かせる宵の星　芳枝
星の降る夜半に真竹は身ごもりぬ　与根一
バラバラの家族一つにするビール　文子
雑巾を絞りつづけている家族　寿美子
耳栓をした年寄りが居る家族　たつみ
貧しさを気にせぬ家族の笑い声　米子

家族とはいいな西瓜をかぶりつく　みえ
猫だって家族だ米を二升炊く　きみ子
いつしかに妻と二人の核家族　清志
いい家族だったとつぶめ旅立ちぬ　妻子
婿養子はもうあきらめている家族　叮紅

川柳化粧櫓　植村客遊子報

仏様だしの観光バス旅行　岳詩
二人の娘　亡夫一番のプレゼント　輝月
息子と二人三脚だから跳べぬ川　遊峰
子に尽す背なを観音様とみる　サワ子
外孫も来て浴衣着る夏まつり　大鷹
ハイレグをまとい娘のまぶしすぎ　葉香
サングラスはずして里の橋渡る　礎石
家計簿に穴はあくまい大ジョッキ　悲子
償いもその位なら折れておく　三青
夏祭り子供の気持さそう店　はる女
快気祝見舞に貰ろた紅を引く　春蘭
ご隠居がやたらに動き嫁困る　美代
父の癖声出して読むカタカナ語　嘉
教養講座そろそろ舟こぐ右左　茂章
クーラーの効きすぎ六腑が痛み出す　姫女
枝豆へ殻が山なす塩加減　はる子
芸なしに一つだけあるお人好し　好花
早い事準備するなと墓を建て　三重
ミニ穿いた大トラも居るビアガーデン　一典
嫁姑呉越同居で睦まじく　治夢
点滴のおかげで命またつなぎ　遊峰
老体は食べてる割に力抜け　永楽

お見舞にメロン持ってくことに決め　客遊子

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

北へ南へ飛んでエアコン要らぬ鳥　さつき
極楽行きの切符売れないうちに買い　とめ子
青春の切符　鈍行苦にならず　天　雀
ふるさと便いわし料理のメモ入れる　よしえ
北の窓開けて幸せ待っている　ひさ子
北風が酒と刺身をうまくする　秋　人
魚屋の横で動かぬ猫がいる　勝　美
明日は行く仔牛の綺麗な眸に出合う　和　枝
親のくれた名で終らない出世魚　玲　子
北壁をなめたらあかん牙がある　かつみ
あの世まで鈍行切符でがまんする　康　志
センセイは日本全国顔キップ　石花菜
牛の背に揺られて嫁ぐ杉木立　瑞　枝
うどん食って別れただけの絆です　とみお
北国へ棲んで覚えた手酌酒　雄　々
絆だと思うポストも電線も　荒　介
しあわせにすると約束した絆　螢
北の果てにも酒を飲ませる店がある　完　司
柊を植えて魔除けの北の門　独　歩

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

孫自慢いつも天狗になってはる　正　子
あの方でさえ天狗にするこの話　ミサ子
天狗今日　自分の鼻が邪魔になり　杜　的
天狗より強い女が街にいる　武庫坊
大天狗小天狗そろった趣味の会　勇次郎
人を見下し天狗と名乗る敗残者　正　一
ネクタイをゆるめてからの艶話　園　歩
ノーネクタイ二度の勤めにある気楽　敏　之
ネクタイをしめ肩書の顔になる　英　子
ネクタイの好みをさりげなくさぐる　年　代
日本の風土美わし四季を着る　〆　女
義理人情砂漠化すすんでいる風土　薫
風土料理　旨味を決める匙加減　六　浦
大都会の夢に疲れた磯育ち　澄　子
風土記に読めぬ神々おわします　紫　香
雪国の風土に生きた竹人形　芳　子
桐下駄のぬくみ忘れた足の裏　文　夫
気味悪いほど熱心に来る誘い　敬
病院のどんぶりめしに回復す　静　夢
補てん付きの馬はいぬかと下見馬場　キク子
関節がヒリヒリ痛い明日は雨　保　蔵
広島忌男は古希の保険証　伊三郎
もう過去は振り返るまい遠花火　歌　子
替え玉に頼る貧しいものを見る　定　人
ブラックコーヒーさめていました喋り好き　萬　的

川柳藤井寺　高田美代子報

説教をあくびで返す中学生　作　秀
あくびして女一人の夜が長い　ケイ子
欠伸するかたちに開く哲学書　森　子
熱帯夜猫もあくびをしたがらず　透　太
芝居見てうな丼食べて五十銭　三　郎
観てる目が皆懸命な紙芝居　ときお
杉良の芝居見たさの針仕事　政　代
花ちゃんと夫婦になれる村芝居　たかし
六方を踏んで弁慶逃げ腰か　宗　一
緞帳の奥で主役の打ち合わせ　てつお
父だけが知らぬ芝居をする母娘　婦美枝
悪役のなり手に困る村芝居　志　洋
村芝居かつらが飛んだハプニング　利　武
出番待つ幽霊楽屋でうどん食べ　智　久
筋書きの通りにのって来る問合い　与呂志
ひと芝居打って姿を晦ませる　一　屯
距離おいて裸のままにおつきあい　寿美子
裸一貫　男の美学かも知れぬ　淑　子
裸から出発だからやり直す　三　男
騙される心配いらぬ裸です　昭　子
丸裸になってやっと明日が見え　吸　江
人は皆裸で生れ逝く裸　キミ子
丸裸飛び込む母の海がある　悦　子
保証人裸にされた判一つ　修　六
泥舟に札束積んだ大狸　繁　男
じゅげむじゅげむ親はどこまで心配性　トミ子
おじぎ上手な帽子なかなか手強いぞ　寿　美
企みの氷を浮かすジンフィーズ　治　子
ポックリと死にたい人のなが話　しげお
覗くのをびっくり箱が待っている　美　房

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

いい汗を拭くと明日が見えてくる　石　舟
釈明に冷汗ながす時の人　修　水
優勝の顔に流れる玉の汗　十四郎
七人の敵に流した汗をふく　勇次郎

日曜大工造った棚がすぐ落ちる　六浦
大掃除棚のへそくりのぞかれる　向西
棚浚え掘り出し物を見付けだす　敏之
猫だけが棚のへそくり知っている　すみ
出港へ神棚の灯が点される　歌子
好景気　先輩越した初任給　いわお
待遇が良過ぎ戸惑う自動ドア　江美
待遇が良いのか孫が帰らない　昌子
僕の待遇おにぎりでこと足りる　夢之助
待遇を赤の他人が評価する　〆女
待遇も女中も悪い豪華宿　紫香
娘まで二日酔いして梅雨も晴れ　義嗣
塾にゆく子に遊ぼうという電話　弘治
悪い夢見たのかネマキビッショリと　保蔵
前向いて生きてる人の目がきれい　ミサ子
周波数合わせてみたい人がいる　澄子

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

日焼けした顔で病いを寄せつけぬ　多可志
胸底でもえて絵皿に焼きつける　静生
押さえてる煙　秋刀魚が吸って焼け　行男
手紙みな焼いて一つのけじめつけ　由多香
茶毘に付す父の火つける手が重い　暁
焼きもちが昂じ茶碗が飛び跳ねる　よしお
野山焼き緑の鼓動燃えさせる　一枝
晩学に泳ぎを変えて若返る　俊路
荒波を泳げぬ稚魚が妥協する　政子
泳ぐより美人の肌と酒がいい　友夫
人生を斜めに泳ぐへそ曲がり　喬水
泳ぎ疲れて辿り着く母の胸　艶子
スイスイと泳いで野望抱いている　山人
酸欠の夫婦に泳ぐ海がない　洋々
ナツメロをボリューム下げて聞き惚れる　輪多朗
反戦をボリュームあげて叫びたい　砂山花
ボリュームの針振り切った愛の鞭　帆雀
ボリュームの割に満足感がない　侑里
ボリュームが女の年をおしかくす　享
逆転のヒットボリューム上げて聴く　圭一郎
ボリュームを上げてお世辞を言ってくる　旋風
ボリュームは妻におとっていて男　粗粒

城北川柳会　吐田　公一報

均等法　職場の花に髭が生え　秀夫
古簞笥　女の業が離れない　春蘭
仏前にお酒供えて偲ぶ夕　久留美
持ちつけぬ金で夜道が歩けない　ふみ
相愛なら墓も一緒に入りたい　八重子
いい人と相席になり旅楽し　寿美礼
古本屋　明治の顔で出してくる　静歩
持ち方を変えたバットがよく当る　典子
負けて勝つ姑で波風立たぬ家庭　千世子
どん尻も首席も同じ大学出　白峰
一度でも女難の相といわれたい　史風
中傷に負けぬ信念持つ女　温子
持ち金を時々しらべ長い旅　新一郎
スペアキー持って女は揺れている　公一
ハプニング加えて楽し旅の宿　佐津乃
持って死ぬつもりはないがケチで居る　倫子
尻馬に乗って拍手をしてしまう　ただし
通りゃんせ子供に返る地蔵盆　昭子
帳尻が合っているので油断する　満津子
底ついた思案へ神の鈴を振る　達子
わだかまり捨てた時浮く母の影　静子
万歩計今日八千歩よしとする　登美子
スタートはどん尻ゴールでトップ切り　右近

南海川柳会　飯田　悦郎報

しゃべりながらこんな遠くへ来てしまい　眉水
地の果てても近いと思う恋心　度
耳が遠いのに悪口聞いていた　文秋
当りくじ遠い知人も寄って来る　恭昌
遊びなら遠いなどと仰言らず　柳宏子
失恋を笑い話にさせる過去　柳伸
背伸びした暮し銀行知っている　信博
銀行のランクのうちにない預金　恒明
銀行の不正億でも桁外れ　二南
市場への距離考える家探し　庸佑
医者へ行くついでに市場頼まれる　三男
市場籠値引きタイムを見のがさず　真柳
朝市の意気がとけあう国訛り　憲太郎
飽食の猫が市場の裏に棲む　美幸
阿波踊り電気仕掛になるショック　泰
ショック後こおろぎ変な声で鳴き　覚然坊
ショックにもならず日毎の億単位　しんじ
信楽のショックぼちぼち忘れられ　美津留
銀行がだまされている桁違いのショック　作二郎
配置替えされた隣は鬼課長　志華子

配置替え長所を伸ばすことになり　東雲
若者の意見が生きた配置がえ　花仔
配置替えしてから出来たわだかまり　勝美
配置替え思案している棒グラフ　重人
配置する笑顔にあった蟻地獄　悦郎

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

見送った尾灯が胸を締めつける　白峰
電話では叱った母が金送る　喬水
忘れ物送り届けてよろこばれ　みほの
人生の旅へ神楽で送り出し　佳女
金送れだけが親への子の便り　善政
送り火に煩悩の闇深くなる　杜的
野辺送り山の鳥も泣いている　野草
子に送る老母にうれしい四季がある　妻子
送られて着いた楢山俺一人　みをき
送り賃より安い蕗を子に届け　柳風
子に送る荷物に詰める母の愛　ひさ子
送り物に金釘流のメモがあり　信子
カルチャーの妻を送迎しています　節子
一人ずつ送って母の池渇れる　幸子
年中の行事となって梨送る　玲子
精出して作った薯を娘に送る　喜与志
Vサイン送る彼女が好きになる　きみ子
出征の兵を送った駅がない　幸枝
子に送るために耕し種を蒔く　勝見
中元を送り何かと期待する　雄々
送られて送って峠道にくる　静歩
仕合せを見送る側にいつもいる　とみお
その愛を拒んで送る男なり　螢
真心を送ることだけ考える　弘朗

聴障川柳　井上　富子報

閻魔様の日曜地獄は通り抜け　柳香
リズム体操骨も鳴ってる日曜日　八恵子
日曜は忙しいよと和尚言う　みつる
鍵っ子のわがままを聞く日曜日　たみ
日曜は私の日よと憚らず　真女
日曜大工パパの腕とは思えない　末子
スムースに村内行事は日曜日　文古
子供より親が楽しむ日曜日　通風
正直な鏡は日曜知っている　三香
人生は無休と笑う日曜日　静子
家の嫁日曜ごとに大掃除　健太郎
日曜の大空に舞う父子凧　富子

南大阪川柳会　金井　文秋報

一句切りついたら急に腹が減り　柳宏子
一句切りさて鉛筆を削ろうか　萬的
不始末は辞表で軽く句切りつけ　トミ子
一枚の葉書で句切りつけられる　千楫
市場かご句切りのつかぬ立話　文江
カーテンで句切りをつけた子供部屋　凡子
子が拗ねるやがて金魚を手づかみに　作二郎
少しうしろを歩いて拗ねているのかな　智子
拗ねさえすれば何か貰える孫の知恵　文秋
拗ねて掃く箒はゴミをまき散らし　勝美
拗ねるのも可愛いと言われた昔　冬葉
拗ねる子をさとしてきかす祖母のひざ　シマ子
金槌が拗ねると釘が曲るなり　覚然坊
もろ肌を脱ぐと太鼓の音さえる　奏月
五歳の理屈　兜を脱いだのは大人　寿美
両足を揃えて脱ぐと褒められる　柳伸
靴脱いで土のやさしさいっぱいに　直子
医の倫理乱れて受ける世の批判　章久
真に受ける人でジョークがやりにくい　頂留子
盃を受ければ義理に縛られる　悟郎
受けた恩まだ返せない花手桶　雀踊子
よう受けて一つ覚えの芸にする　公一
受け答えもう出来てますませた孫　岩信
スランプの綱が耐えてる土俵入り　章
つらいとも言えず男は朝を出る　美幸
二軍落ち越さねばならぬつらい汗　憲太郎
絵馬褪せてつらい噂を聞いている　重人
暗闇のつらさを抜けてきた笑顔　度
つらいとは言わず男は酒に酔い　シメ子
シベリアのつらさほどにはまだ遭わぬ　新造

翠洋会　井上　照子報

心音は確かもうすぐ母になる　照子
七夕にひらひらひらと紙こより　宣司
来月に扶養家族が一人増え　兼治郎
ニコニコと来月分まで遣う孫　蛙
和紙人形もの言いたげなおちょぼ口　ひろ子
再生紙作りジューサーふいにする　綾子
化粧する少女へ母の目がきつい　拓生
音が無いどうにか生きているらしい　東雲

包装紙で値ぶみしているうそさむさ　宏子
ばあちゃんにも少女があった写真帖　絹子
来月の筈の督促状が来る　すすむ
少女期に戻る白百合おみなえし　千歩
俄雨馳け出す少女におんな見る　恭昌
着せていくほどに息づく紙人形　良江
反抗期少女の夢はひとり旅　正雄
来月は思い出となる夏帽子　透太
盆過ぎて再び唸り出す道路　春子
思春期よセーラー服を忘れない　英一
貧しきは恥にはあらず紙風船　正坊
留守番はご主人らしいのこの音　光子
遠花火少女に戻るすべもなし　楓楽
ハートチョコ少女はおとこ意識する　しげお
石けんの匂いをさせて少女来る　みつ子
来月が満期の貯金ないかいな　登志実
もう誰も預金証書を信じない　鬼遊

むらくも川柳会　藤井明朗報

思い切り子を遊ばせる里帰り　秀子
おろかにも億円軽がるもてあそぶ　林蔵
人の気も知らず遊んでいるマグマ　義良
遊ぶ子の背にたわむれる夏の蝶　よし子
親と子が遊ぶ花火と笑い声　カツ子
子供らの遊びつかれていい寝顔　百代
そうめんに助けられてる猛暑です　一葉
湧き水で冷しそうめん故里の味　ヤス子
かけこんで冷しそうめんに出る元気　はる代
来客へまずそうめんで涼を呼ぶ　常子

この暑さ冷しそうめん喉が鳴る　千里
シャンプーの泡いっぱいで綺麗好き　仲子
神ほとけ願い届かぬ水の泡　島子
ジョッキの泡へあわてた口が伸び　早苗
非行児に愛の手のべるママポリス　峰雪
愛情があって明るい子に育ち　幸子
今日もまた平和な里に鍬洗う　三津江
四季の花愛する母に明日がある　昌子
愛されて愛する事をふと忘れ　ゆき子
その時はきつい言葉も母の愛　愛子
愛燦々どの子も受けた母の膝　翠晶
迷う子へ涙で諭す愛の鞭　克子
野仏に遊び場もらう群雀　幸夫
平和まだゆれ動く世界地図　明朗

富柳会（7月）　池森子報

八起き目はきっと笑顔で立ち上がる　しげお
片想いもてた話を聞くつらさ　(伊)勇
ときめきの笑顔を独り占めにする　透太
お達者な証拠艶聞気にしない　(田)勇
煙突は男　言い訳などしない　美房
母さんの笑顔で店の繁盛記　昭水
路地裏の育ち笑顔を絶やさない　文次
倒産へ煙突までがしょぼくれる　智久
艶聞の主は和服でレモンティー　トシエ
内づらも外づらもよい笑顔妻　花子
立ち話主婦の話題はスキャンダル　二三子
亡母の笑顔がとっても温い三部経　荘次
ぼた山と煙突俺の青春譜　柳太

艶聞も何もなくても老いがくる　生子
母の日のポスト笑顔で待っている　花梢
タラップに余韻のこしていく笑顔　維久子
菜種梅雨笑顔が似合う紅生姜　岳人
話し相手も少なくなった煙突よ　森子

富柳会（8月）　池森子報

移り香を消せぬ男の終電車　澄子
録音で知ったわたしの音のズレ　郁郎
美人でも隠しもってる鬼の面　昭水
お母さんふと口にする夕まぐれ　(伊)勇
豆まいて心の鬼をたたき出す　トシエ
ベレー帽の似合う男と苦労する　荘次
お母さんもったいないと残り食べ　花子
価値観が違う男と厚い壁　生子
鬼の首取ったところで夢がさめ　二三子
鳴きすぎてうぐいす音痴になっている　智久
惚れて惚れて惚れて男の美学持つ　一二三
ますらおの最後の叫びお母さん　(田)勇
来た道が見えるところにお母さん　透太
モナリザの謎で男が眠れない　美房
その中の音痴につれていかれそう　花梢
男にはとても打てない長い釘　岳人
鬼一〇〇匹飼って女の真っ盛り　森子

静岡川柳塔同好会　永倉僕川報

減塩をメモに残して妻の旅　弧秀
今度こそ真の幸福摑みたい　猛
荒波を乗り切って来た人の味　正雄

誤解する情熱消えた老いの坂　金吾
苦の荷物　幸福駅でおろします　たま
波静か不平不満のないわが家　たき
乱筆を何時も知ってる筆の先　つね
せっかちがひと目で分かる靴の底　きん
責任があるからここは譲れない　まつゑ
幸福と思えば感謝湧いてくる　静代
家族愛うすれて老いを嘆かせる　久子
肩寄せてまだ仮縫いのお付き合い　柳華

川柳塔わかやま（7月）　牛尾　緑良報

日に一度喜ぶ言葉添えてあげ　アサ
土壇場で神が横向くこともある　栄美子
主治医には畳で死ぬと言ってある　保州
喜びはひとりになると身に沁みる　由紀子
栄転のよろこび靴がリズムとる　淳太郎
喜びの朝も化粧は控えめに　克子
喜びは貴方の世界越えられず　金魚
喜びを分かち合えないのはおんな　三男
喜びへ仮面あっさり捨ててある　輝子
お隣のなさけ喜ぶ過疎の老母　登志代
苦労する喜び知っている両手　紀久子
喜びは最初に熟れた実の赤さ　公子
さりげなくおんな横顔盗ませる　信秋
横に寝る妻にすまない夢を見る　鉄治
堅物も粋な横顔持っていた　信子
横町で拾った噂尾鰭つき　瑞穂
横向いた心みどりに論される　武治
ゆきずりの横顔亡母に生き写し　白光子
投げ出して話がはずむ畳の間　豊太
四帖半ここが私の指定席　稚代
畳恋しや異郷の空に浮かぶ雲　光代
横になる一畳だけが儂の城　呑天
古畳祖父のたつきの香を残す　守
畳べり気にせず踏んで現代っ子　紀美女
新築にいぐさの香りしきつめて　純子
錠前を人間不信の音でかけ　武雄
年輪へ用心深くなる瞳　精子
不用心なところもあっていい女　三枝子
用心をせよとウインクの釘を刺す　和子
用心をしすぎて明日へ進めない　君枝

川柳塔わかやま（8月）　牛尾　緑良報

男坂一度は力む夢を追う　アサ
留守詫びる花が一輪活けてある　好笑
涙腺のよわい女に惚れている　稚代
この椅子に座ると力む鬼になる　信秋
力み過ぎ弾んだ毬を見失う　紀美女
巣立たせて鍬の力みを少し抜く　(福)和子
力量の程に背いた崖っぷち　綾子
うぶ声は秤の上で天を蹴り　静代
吃水線こえて力んでみたくなる　輝子
がむしゃらに力む男を憎まれぬ　登志代
ちょっと留守しているように思う亡父　保州
留守ですと新聞受けが言い触らす　鉄治
相槌もちぐはぐ心留守らしい　光代
休日は居留守と決めている二人　由紀子
女三人寄ると手元が留守になる　高夫
泣きに来て留守でよかった母の膝　豊太
あるところにある大金と思う汗　裕美
大金を積んでも還らない自然　正博
大金に人の弱さを見抜かれる　紀久子
大金がないので悪魔顔出さぬ　信子
大金が出来古里に遠く居る　千寿子
大金が真面目過ぎると煙たがり　武治
大金に食傷気味の夢を見た　和成
涙腺の向うに脆い壁がある　寿子
涙腺が冷めるとおんな光りだす　栄美子
涙腺の乾き潤す君の愛　精子
涙腺へ心くばりも無い取材　白光子
涙腺が脆くて鬼になりきれず　克子
大金をこぼした手だけ罪になる　緑良
大金を埋めると穴が深くなる　幸

川柳ねやがわ（7月）　高田　博泉報

移転先わからぬ程に濡れて梅雨　あやめ
天皇も茶の間も拍手　貴花田　白水
すじ書きはいらないペンギンの笑顔　英壬子
再会の涙テレビでもらい泣き　藍子
ふれあいの町で金魚が売れ残り　冬葉
この次が知りたい亡き子の日記帳　高栄
今いちど逢うて告げたいことがある　光子
すじ書きはもう読んでいる父の笑み　時弘
私にはもう登れないみかんの木　シマ子
父の日に父にお愛想して出かけ　君子
父の日に子達に再婚許される　波留吉
父の日に上原謙をふと思う　良三

何げなく袖ふれおうてからの縁　庸佑
筋書のコピー時々朱を入れる　雅文
もう一度めぐり逢いたし螢の夜　菜月
電灯に恋して咲いた月見草　あいき
地獄そろそろ満員になる頃か　度
騙されてやろうすじ書き読めている　速水
ふれあいへ老いの残り火ほてり出す　一鬼
渋滞の暇にこの地価考える　一笑
貼り紙のことは知らない子猫ちゃん　かすみ
ふれあいの場面と違う楽屋裏　覚然坊
キリトリ線少し迷った傷がある　吉之助
神さまの貼り紙ならば信じよう　国公
ふれあいを忘れ激論してしまい　一途
すじ書きの余生へ妻が床につき　章
掃除ゆき届いて独身怪しまれ　柳宏子
素晴らしいゴールを思いつづけよう　礫
裁かれてからの涙は本物か　紫香
雲仙に真向うて立つ父の眉　薫風

川柳ねやがわ（8月）　高田　博泉報

夕方になって元気なのも困る　速水
雨しとど古代を語るなまこ壁　かすみ
宮仕え自説を曲げるのも仕事　一途
涼を呼ぶ民宿からのかめーる　三千子
ビアガーデン提灯の灯がパッとつき　あやめ
流れ星心のレンズ揺れ動く　英壬子
後輩よ破れ破るなわが記録　勇太郎
敵として闘志の湧かぬ顔してる　えいめい
通勤の車の流れ止める事故　三郎
裸婦像の前の長居ははばかれる　高栄
金の要る話は聞いておくだけに　覚然坊
門限を破れば木戸に待つ寮母　一鬼
相槌は打つが所詮は他人ごと　欣史子
常識を破り若さの新機軸　時弘
流されて仏になった丸い石　権太
夏休み東京生れの孫が来る　シマ子
校則を破って心開いた日　一芳
裸になれば都合付けると言ったはず　波留吉
炎天下いつもの道の遠いこと　光子
よしず張る向うもビール飲んでいる　まさお
父が破れた柱のキズの背くらべ　章
裸体画を貰い掛け場のない我が家　小路
流れ星いまさら燃ゆる愛でなし　雅文
心まで裸になれず花が散る　菜月
洗ったら息子は女湯に居ない　頂留子
沈黙を破る勇気の手を挙げる　藍子
夕方に来てお茶漬でよいと言う　冬葉
一区切りついたざわめき茶を急かす　柳宏子
自画像を破るゴッホの焦躁期　半蔵門
ひとつずつ釣銭くれるおばあちゃん　紫香

川柳大阪（7月）　高須賀金太報

ストレスが磯の香りにとける夏　司
ついて行くだけの歩幅が汗になる　比呂志
生き字引下座にすわる箸枕　亮太
カルチャーへパートへ母さん忙しい　柳弘
これ以上痩せると骨がシャツ着そう　雅巣
看護婦の顔で注射器太く見え　川童
もう少し生きたら何かありそうで　与呂志
なにもかも白と言うから疑われ　重人
俺の影おれの心は知らんだろ　洛酔
よし詰んだはやる気抑え指す王手　虎酔吟
言い分は抑えて示談印を押す　一歩
抑えてる傷うずきだす酒の席　美津留
付き合いも会費納める義理の仲　権八
会費分キッチリ呑んで座をぬける　酔舟
ささやかな会費が趣味の輪を広げ　鉄心
少額の会費は使途を見極めず　三吉
友情をつなぎ延ばしてゆく会費　我勝
ええ店や味もええけど値もええわ　末坊
金婚の舌が馴染んだ妻の味　本蔭棒
アンタには判らんとこが味なんや　凡九郎
三行半このごろ妻が書くそうな　金太

川柳大阪（8月）　高須賀金太報

人の情欠かせぬ義理ののし袋　亮太
イヤリング外せば素直になる女　柳弘
甘いかと西瓜にとる日聞いてみる　鉄心
定年へ金にならない役ばかり　敏
病院の待合室は喫煙所　与呂志
山一つまた新空港に持って行き　川童
円満な鬼になったか茶をすする　美津留
傷心をステップにして今がある　我勝
修正はしない自画像胸を張る　雅巣
母太るもったいないを口ぐせに　しげお
やじろべえたまには片手落ちもあり　洛酔
プライドを少し残して膝を折る　希久志

譲れない線を大事にしています　重人
収まったらしいとりあえず乾杯　天平
私さえ我慢をすれば収まるさ　末坊
泊まり明け頬がゆるんだ解放感　権八
仕事から解放されてボケはじめ　一歩
解放感　夜空を仰ぐ立ち小便　三吉
ふところの深さに泣いた投げタオル　司
呆けたよに見えて老父の深いよみ　本蔭棒
深い疵やっぱり死んでなかったワ　凡九郎
休日は妻から解放されてるか　金太

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

八角時計　明治の音がまだ残る　杜的
八つ当り棚のダルマが落ちてくる　きく子
しょぼくれた服が八卦の灯をみてる　蕗児
置き手紙お八つを添えて母は留守　〆女
ふる里はまだまだ恐い村八分　吉太郎
これがまあおうどんですか江戸の味　薫
すき焼で甘辛騒動父と母　一笛
横綱の仕切りのようにひき蛙　器水
一雨を鳴いて呼びこむ雨蛙　悟郎
蛙には申し訳ない休耕田　登代子
蛙とび競争心のない蛙　芳子
のんびりとお昼寝もする里帰り　(小)英子
一坪の土いじりして気が和む　富子
黒い服若さが匂うう化粧　つえ子
金魚掬い孫も器用に紙濡らす　明吉
天高し孫ちょこちょことついてくる　ただし
お盆です夫婦喧嘩も休みます　博史
無いものは金と仕事で暇ばかり　三千男
バス停に日陰をくれる桜の木　(玉)英子
大文字過ぎると秋がしのぶ京　圭坊
石けりの路地も今ではビルの谷　とく子
跳び込んだ蛙が浮いて来て睨む　明光
バスツアーのんびりがいて待たされる　慶子
お齢でしょのんびりせよと妻が言う　登志実
握る手がロマンス生んだハイキング　福一
すっぽん鍋　女の箸を割ってやる　しげお
コーヒーのムードに合わぬ話する　白渓子
近寄った分だけ跳ねる青蛙　紫香
八人目の敵は自分の胸にいる　武庫坊
顔ぶれを見て作戦を練り直す　正坊

川柳高知　川竹　松風報

看病のつかれそのまま黒を着る　佳風
泡立て器米を研いでる赤い爪　菊野
七色の顔を今夜もつつむ泡　千恵子
航跡の泡に未練がまだ募る　朱坊
代筆が大胆に書くラブレター　春枝
真夜中のベルへ心音跳ね上がる　さち
卒寿なお発剌として電話口　とみ子
生ビール泡半分の大ジョッキ　功
泡ひげを付けて女も生ビール　憲一
指輪にも昔話が秘めてある　春童
遊び球いくつか持って夫婦独楽　有佳
敷く気ではないが林道蛇がのび　竹萌
昼下り看護つかれが眠くなり　松風
母さんの看護安心して眠る　圭風

おっぱこ川柳会（8月）　松村迷観子報

法の目が金の流れを追って行く　迷観子
突き破る壁があるからまた走る　マサエ
時季外れ買物上手主婦の知恵　ふみ
離すまいヤット握ったサーブ権　ひかり
補塡策それが裏目の株屋さん　迷貫
四億円トイレの壁は大理石　放任
セミの声聞けば聞く程暑くなる　小四菜実子
輪をくぐり健康祈る夏越の夜　よしみ
壁にでも聞いて貰おか一人言　いさむ
まだ生きる心算か医者へ日参し　明人
幾重もの壁をくずしたボスネズミ　吟笑
耳貸さぬ夫が部屋を引き上げる　スミエ
壁越えた隣の桃に手が伸びる　正雪
弘法のアヤマリ苦労の末気付き　伽名子
風鈴の音も聞こえる盆提灯　チカエ
台風が過ぎて風鈴歌い出す　かおり

▼おねがい▲　今月号には前月分と一緒に2か月分を送ってこられた句会が五つもありました。今回に限ってそのまま掲載しましたが、先にお知らせしたように紙数の関係もあり、今後は1か月分だけにしたいと存じますので、各句会におかれましてはご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。（**編集部**）

佐藤奏月句集

草千里

宮園　射月芳

思いがけずと言ってははなはだ失礼ではあるが、奏月さんが句集を発刊された。同人の一人として心からお慶び申しあげ、喝采をしたいと思います。

正直な所、私は奏月さんの生い立ちや現在の事も殆ど存じておりません。ですから私の感想は、あるいは見当外れかも知れません。

これより先は天国ですか草千里

私は学生時代を熊本で送り、阿蘇山には高下駄で登った事もあるので、句集名になってる〝草千里〟はとても懐かしく、そんなご縁で拙文も顧みず、ペンを執った次第です。

奏月さんに対する私の感じを一言で言えばこの句集の表紙の色のような人だと思います。一見近よりにくい感じもあるが、話してみると結構茶目っ気もあるし、ナイーブで抒情的な感性の持ち主である事がよく分かります。

坊さんの隣の席で落着かぬ
お化けだと知らず握手をしてしまう
冬のいちごも冬のトマトも高慢な
その反面、負けず嫌いで芯の強さも感じます。

負けそうになるから化粧するのです
鉛筆が倒れた方へ意地を張り
困ったことに私の勘が冴えている

肥後の国は人も知る火の国〝肥後もっこす〟といえば〝土佐のいごっそ〟と同じく頑固者の事です。火のような情熱を胸に秘めながら、頑固な所もあるのかもしれません。

思いつめるとますます深い落し穴
でんでん虫角ひっこめてから頑固

さらに熱心な教育ママであった痕跡も見受けられます。

完敗の息子とにぎりめしを食う
子のこととなると一歩も譲らない
茜空ふいに息子にあいたくなる
ぬり絵の好きな娘も嫁に行きました
娘の家のピアノはすでに他人めく
ただ、私がすこし気になるのは
履歴書を一度も書いたことがない

という事です。新聞の求人欄を目を皿にして探し、履歴書を何十枚も握りつぶされてきた私から見ると、何不自由なく自分とは別の世界を歩いて来られた人のように思えます。

挫折を知らない人にある本人も気付かない一種の冷たさと、裏切りに対して脆い面がありはしないか。だから

残雪は遠くで見ればあたたかき
人形でいれば幸せだったのに
のままで居れば良かったのに、世間の冷たい目に晒された時に
わたくしを置き去りにして潮が引く
うなされていますあなたの一言に
人形の熱が続いて眠れない

のようになりはしないかという恐れが私の杞憂に過ぎなければ幸いです。ともあれ

病人を励まし過ぎて叱られる

私が入院した時に、重たい本を抱えて見舞いに来てくれた心やさしい奏月さん、好作家の奏月さん、時には

恩のある人と意見がくいちがう

ことがあっても、あとがきにも書いておられるように、この十年の習作を踏み台に自信を持って逞しい、そして寛容を失わず、さらなる発展をされるよう陰ながら声援を送ります。いろいろと見当外れのことをあげつらって、ご免なさい。最後に

飯粒をぽろぽろこぼす母の闇

米寿を迎えられたご母堂のご健勝とご長命を心からお祈り申しあげます。

吹田市民川柳大会

と　き　**10月27日**（日）　開場午前11時
締切午後零時半
ところ　吹田市文化会館メイシアター
（阪急吹田駅前）
おはなし　古下　俊作氏
宿　題（各題２句）
「控え目」　西川　景子選
「一　度」　志水浩一郎選
「間違い」　長江　時子選
「こける」　西田柳宏子選
「原　因」　永田　帆船選
「拝　む」　梶川雄次郎選
席　題　１題 当日発表 竹森　雀舎選
会　費　1000円（参加賞・句会誌呈）
懇親会　3000円（希望者のみ）

主催　吹田市教育委員会
文化団体協議会
吹　田　川　柳　会

第41回岸和田市文化祭
市民川柳大会

と　き　**10月27日**（日）正午・締切14時
ところ　岸和田市市民会館地下会議室
おはなし　河内　天笑
席　題　当日１題発表　福浦　勝晴選
兼　題　「機　転」　河内　月子選
「ヒント」　久保田元紀選
「案　外」　小出　智子選
「お世辞」　阿萬　萬的選
「演　技」　野村太茂津選
「貫　禄」　橘高　薫風選
○兼・席題とも２句
（出句は出席者に限る）
会　費　700円（大会誌・参加賞呈）

主　催
岸和田川柳会

枚方市文化祭協賛
第１回 枚方市民川柳大会

と　き　**10月27日**（日）　13時
ところ　枚方市立青少年センター
（京阪・枚方公園駅西（パーク）と反対側へ徒歩３分）
おはなし　「まんだ」代表　長生　俊良氏
宿　題　「　菊　」　磯野いさむ選
「　丘　」　北沢　双舟選
「　宿　」　山本　翠公選
「団　地」　中田たつお選
「渡し舟」　上田　斗六選
「沿　線」　高杉　鬼遊選
「集　い」　岩井　三窓選
各題２句　席題なし
締切　14時　〈投句拝辞〉
会　費　500円（作品集呈）

主　催
枚方くらわんか川柳会

第33回豊中市民川柳大会

と　き　**11月23日**（祝）正午開場
ところ　豊中市立中央公民館１階集会室
（阪急宝塚線曽根駅東200ｍ）
おはなし　片岡つとむ氏
席　題　（当日発表）　友田茶の子選
宿　題　「　影　」　岩井　三窓選
「　逆　」　春城武庫坊選
「　雲　」　片岡　湖風選
「　岸　」　田頭　良子選
「　傷　」　黒川　紫香選
「　朝　」　坂本　晴美選
「　耳　」　住田英比古選
締　切　午後１時（各題２句）
会　費　1000円（記念品・発表誌進呈）

主　催
豊　中　川　柳　会

第38回八尾市民文化祭

川　柳　大　会

と　き　**10月13日**（日）正午
ところ　八尾文化会館4F　第1会議室
（近鉄八尾駅下車
西武デパート東隣）
会　費　1000円（作品集・鉢植花呈）
宿　題
「　市　」　土田　欣之選
「　唄　」　小出　智子選
「　恋　」　前川千津子選
「　僧　」　大路　美幸選
「　花　」　古川　一高選
「　兵　」　梶川雄次郎選
「　水　」　西尾　栞選
締　切　午後1時（各題2句提出）
懇親宴　3000円（希望者のみ）

主　催
八尾市・八尾市教育委員会
八尾市文化祭実行委員会

第18回堺まつり協賛

堺市民川柳大会

と　き　**10月16日**（水）　正午
ところ　堺総合福祉会館大広間
題の選者（（雅号アイウエオ順）
「野　菜」　西川　景子選
「　皿　」　墨　作二郎選
「予　感」　木本　朱夏選
「　船　」　中井　彗梢選
「家　族」　野村太茂津選
「恵　み」　河内　天笑選
「突　然」　池　森子選
「　力　」　梶川雄次郎選
締　切　午後2時
（各題2句・席題なし）
会　費　1,000円
連絡先　河内天笑方　堺川柳会
(0722)78－4706

東大阪市文化祭参加

第19回 市民川柳大会

と　き　**10月20日**（日）
正午開場・締切午後1時
ところ　東大阪市立社会教育センター
（近鉄布施駅北へ5分）
宿　題（各題2句・出席者に限る）
「　港　」　高橋　白兎選
「　橋　」　石川　勝選
「天　女」　西川　景子選
「一　流」　波部　白洋選
「　道　」　半井　甘平選
「こころ」　池田　南岳選
「ゲスト」　西田柳宏子選
席　題　当日発表　竹内　良伸選
会　費　1000円

主　催
東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

第42回 西宮市民文化祭協賛

川　柳　大　会

と　き　**10月20日**（日）正午受付
ところ　西宮市立勤労会館1階ホール
会　費　600円（作品集郵送）
宿題・選者（各題2句）
「　愛　」　和田　光代選
「　欲　」　倉田　正一選
「横　顔」　萩原金之助選
「迷　う」　黒川　紫香選
「　指　」　小松原爽介選
「　掟　」　藤本静港子選
「笑　う」　石井　冬魚選
◎席題なし・締切13時30分
賞　各題　天・地・人呈
投　句　**10月5日**締切
投句料（62円切手×5枚）投句は、1枚の紙に各題2句を連記してください。
宛先〒662 西宮市城山12-8 水無瀬冨久恵宛
共催　西宮川柳同好会　北口川柳会　学文川柳
浜甲川柳同好会　枝川川柳会

柳界展望

編集部

★平成3年度の茗人賞、同準賞は次の3氏に決った。

■**茗人賞**

赤トンボ父の墓から離れない　政岡日枝子

■**準　賞**

禁猟区　野鳥は漢字読んでいる　浦部　葉子

赤ばかりちびたクレヨン花が好き　権代　康女

★第15回茗人忌川柳大会は**8月25日**、105人が参加して鳥取市のホテル・ニューいなばで開かれた。大会の天位句は次のとおり。

幕おろす日まで男は夢を見る　吉岡　美房

噛めそうな物から母の膳が減る　岩崎みさ江

程々の気づかいあって三世代　矢内寿恵子

釣竿へ模策の糸が長すぎる　矢内寿恵子

ふるさとの海の匂いのする髪だ　八木　千代

昨日より上手に掘れたのでしょうか　中原　諷人

居眠りのし易い椅子を父にやる　江原とみお

★第43回西日本川柳大会が**9月1日**、岡山県久米南町中央公民館で開かれ、本社関係で次の6氏が各賞を受賞した。

河内月子（県会議長賞）▽河内天笑（県教育長賞）▽八木千代（久米南教育長賞）▽宮本かりん（NHK岡山放送局長賞）▽新家完司（山陽放送賞）▽土橋螢（NTT支局長賞）

なお、宮本かりんさんは課題「踊る」で天に入選。

馬鹿踊り的に近づくつもりだな

★第45回青森県川柳大会は**9月1日**に開かれ、次の川柳塔あおもりの会員が上位句に入選した。

露天風呂　秋がひとひら舞い落ちる　加藤　彩人

ワクチンがあればと思う恋の熱　肥後和香子

片足をかけて男の意地を見せ　小寺　花峯

窓際に粘りの薄い席がある　相馬　一花

天を見てごらん泣かない星がある　波多野五楽庵

ふり向けば秋一筋の白い道　工藤　甲吉

★竹原川柳会創立35周年・『竹の子』第2集発刊・山内静水追悼川柳大会は**9月8日**、竹原市大広苑で276人が参加して盛大に開かれ、本社同人の河内天笑・園山多賀子・保西岳詩・新家完司・松川杜的の各氏が三才に入選した。大会における天位句は次のとおり。

新しいページ消しゴム使うまい　白井未都子

旧道はお伽話が落ちている　金沢　入道

真実を拾う両手の爪を切る　平山　繁夫

きばりなはれ出世払いにしときます　山の内さち枝

雨あがり祖先の墓は美しい　竹井ヤスエ

蟬しぐれ未完の章のほとけたち　西尾　栞

★第14回ますかっと川柳大会は**12月1日**午前10時から岡山市中央公民館で開く。兼題と選者は、真＝小野真備雄▽流＝山口流木▽秋＝土居哲秋▽行＝永井行平▽松＝松原典子（各題2句・欠席投句拝辞）。会費1000円。川柳岡山社主催。

★第10回鳥取県没句川柳供養大会は**12月8日**、鳥取共済5階ホールで川柳ふうもん吟社の主催により開く。兼題は「敗者復活吟」（今年没になった句）と没・仁王・めちゃくちゃ・ママ・張る・効く・学生。参加費1500円、精進落し2000円、投句1000円。

★日本川柳協会は広瀬反省事務局長の辞任に伴う後任として山本翠公常任理事を決定した。

▽**句集刊行**△

■佐藤奏月さん（本社理事・松原市）は9月1日付で川柳句集『草千里』（B6判・94頁）を川柳塔社から刊行した。

▽**訃　報**△

■平賀紅寿氏（日本川柳協会顧問・滋賀県）は8月22日逝去、95歳。

▽**訂　正**△

■**8月号**＝P91下段「佳句地十選」1句目「不器用をあらためて知る妻の留守」の作者は**礎石**の誤り。

■**9月号**＝P43下段11行目の（竹田花代子…）→（竹内花代子）

10月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 退屈・切る・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 弁解・食欲・花	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 甘える・相性・網・与える	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 虫・鮮やか・つかむ・自由吟	**西宮市高木センター**　阪急西宮北口駅北出口から歩8分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)　正午から 方角・釘・でたらめ・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1－7－7－905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
富柳会	17日(木)午後1時から 義理・聞く・近所	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4－1　池森子
南海 川柳会	18日(金)午後6時から 芸術・土地・証言・体験	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(土)午後6時から 平・明・栄・連	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	20日(日)　正午から 準備・裏・ほめる・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 十・学ぶ・じっくり・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後1時から 籤・へんこつ・シャツ・(辛抱)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
京都 塔の会	28日(月)午後1時から 尾・払う・選手	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1　松川杜的 句会費 350円　投句料 62円切手3枚

※八尾市民川柳会は13日(日)第38回八尾市民文化祭川柳大会
※堺川柳会は16日(水)第18回堺まつり協賛堺市民川柳大会
※川柳東大阪は20日(日)東大阪市文化祭参加第19回市民川柳大会
※岸和田川柳会は27日(日)第41回岸和田市文化祭市民川柳大会

編集後記

★本誌の編集を担当していると、既知・未知の方からお便りをいただくことが多い。個人宛のものもあれば編集部宛のものが転送されてくることもある。質問的な内容もあるし、提言や意見もある。私の判断で対応できるケースもあるし、そうでない場合もあるが、できるだけ返事は差し上げるように心がけている。

★編集部から依頼した原稿については、時期のズレはあっても必ず掲載することとしているが、それ以外の投稿は内容を検討した上で採否を決めさせていただいている。百ページそこそこの雑誌だが、作品以外に読みごたえのある文章も載せて多彩な内容を盛りたいので、どしどし投稿をお願いしたい。ただし、限られた紙面なので、できるだけ簡潔にまとめることと掲載に関してはお任せ願いたい。

★同人の岩佐ダン吉氏から「柳会の運営を多くの同人で」というご提言が寄せられた。各地の句会の運営がごく限られた人でやられ、参加者はお客さんとなっている―という事実を指摘されている。句会によって多少、状況は異なるが、私が関係しているいくつかの句会もやはり数人のスタッフで運営しており、ご提言の方向は目ざすにしても一朝一夕にはいかないというのが実情ではないだろうか。

★秋の川柳大会のトップを切った茗人忌川柳大会に参加した。これから十一月にかけて市・県・ブロック・全国の川柳大会がいっせいに開かれる。読者各位のご健吟をお祈りする。（正）

○国鉄がJRと変って久しいが、サービス、設備の面でどんどんよくなってゆくことについては、ご同慶の至りである。

○もちろん大阪の顔である大阪駅の変貌ぶりも目覚しく、しょっちゅう改装工事中のかこいがしてあり、不自由を強いられるが、完成をするたびにより便利に、よりハイカラになってゆく。

○先日、中央改札口のほぼ向いあたりに「ギャレ改札」なる改札口があるのが目についた。左右にアールデコ風の素敵なパネルの飾りがついている。いったい何だろうと気になったが、急いでいたし、覗くのもいささか気おくれがして、ふり返りながらそのまま通り過ぎた。けれど、どうも気にかかって仕方がない。そこで某日、思い切って大阪駅へ電話をして尋ねた。

○「ギャレ」とは、小荷物取扱所あとに作られた野外活動用品の店の名で、約八十店舗が集められているという。その店の利用者の便宜をはかるための改札なのだそうだ。それにしても、誰にでも一目瞭然の表示は出来ないものだろうか。

○意味のよくわからない言葉を、ムードだけで有難がることは、せめて川柳界ではやめたいものだ。（ふ）

●先々月「君、川柳は情熱だよ」と故静水さんが路郎師に言われたという言葉をお借りしたが、勿論情熱だけでは人間の陶冶も作品の向上もない。情熱を動力源として常日頃から学習し研鑽を積まねばならない。川柳の社会化とは要するに立派な生きた作品を数多く世に送り広める事であろう。

●隗より始めよ、頑張らねばとは思うのであるが、生来の無精と非才に加え、明日の米を購うための雑事に追われて集中力も拡散し、句会に行っても当然ながら全没か、せいぜい一、二句である。けれどもいつかはきっと、という気持だけは持ち続けたい。

●私は病弱な妻と二人暮しである。妻はもし葬式に川柳の人が来ても顔も知らないし、体も思うようにならず大変だから、死ぬのは自分より後にしてほしいという。しかし私に出来る事は程々にも足りぬ銭を持って帰るだけで、毎日を妻の世話になり、妻に養われているようなものなので、希望を叶えてあげられず、はなはだ勝手で申し訳ないが、自分より一日でも長生きしてほしいと祈っている。

この原稿を検分した妻は、〝嘘ばっかし〟と何とも言えぬ目で笑った。（射）

二賞表彰　本社10月句会

日時　10月6日（日）午後5時半
会場　大阪府中小企業文化会館
交通便・略図は表紙裏をご参照ください。
路郎賞・川柳塔賞表彰
おはなし　吉岡美房
兼題「自然」宮崎シマ子選
「救う」津守柳伸選
「それぞれ」河井庸佑選
「人気」辻白渓子選
「栄える」西尾栞選
席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社11月句会　7日（木）

兼題　「青い」「偽る」「移す」「王手」「成功」

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）小出智子選

課題吟（3句）
「普通」牛尾緑良選
「払う」吉田あずき選
「映画」堀良江選

初歩教室「和解」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

1月号課題吟　「数字」「悟る」「始末」

お願い

「川柳塔」「水煙抄」欄への投句は、本社所定の『川柳塔用箋』をご使用ください。同用箋は1冊200円で、送料は1冊250円、2～3冊360円、数量がまとまれば「ゆうパック」がお得です。

NHK川柳作品募集

課題「占う」　森中恵美子選
ハガキに3句　10月10日締切
投句先　〒540 大阪市中央区馬場町3—43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　10月27日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「めし」　森中恵美子選
ハガキに3句　10月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
半年分　三千八百円（送料共）
平成三年九月二十五日印刷
平成三年十月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六 ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六一—六九一四番
振替口座大阪8—三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成三年九月二十五日　印刷
平成三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七七三号　川柳塔　十月号
定価　六百円（送料　五十一円）

白鳥海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よいくつろぎを

国立公園　隠岐の島

施設のごあんない
収容人員　45名
客室　13室
舞台付広間　42畳
駐車場　乗用車10台
冷暖房完備

旅館　金峰荘（きんぷそう）
〒685　島根県隠岐郡西郷町
TEL (08512) 2-1427　FAX (08512) 2-2330

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

本　社　豊津住宅KKビル
〒564　吹田市泉町5丁目28—27　TEL (06) 330—0102

豊　津　店
〒564　吹田市泉町5丁目11—14
TEL (06) 330-0006㈹
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564　吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166㈹
FAX (06) 388-6886

雑誌　05703—10